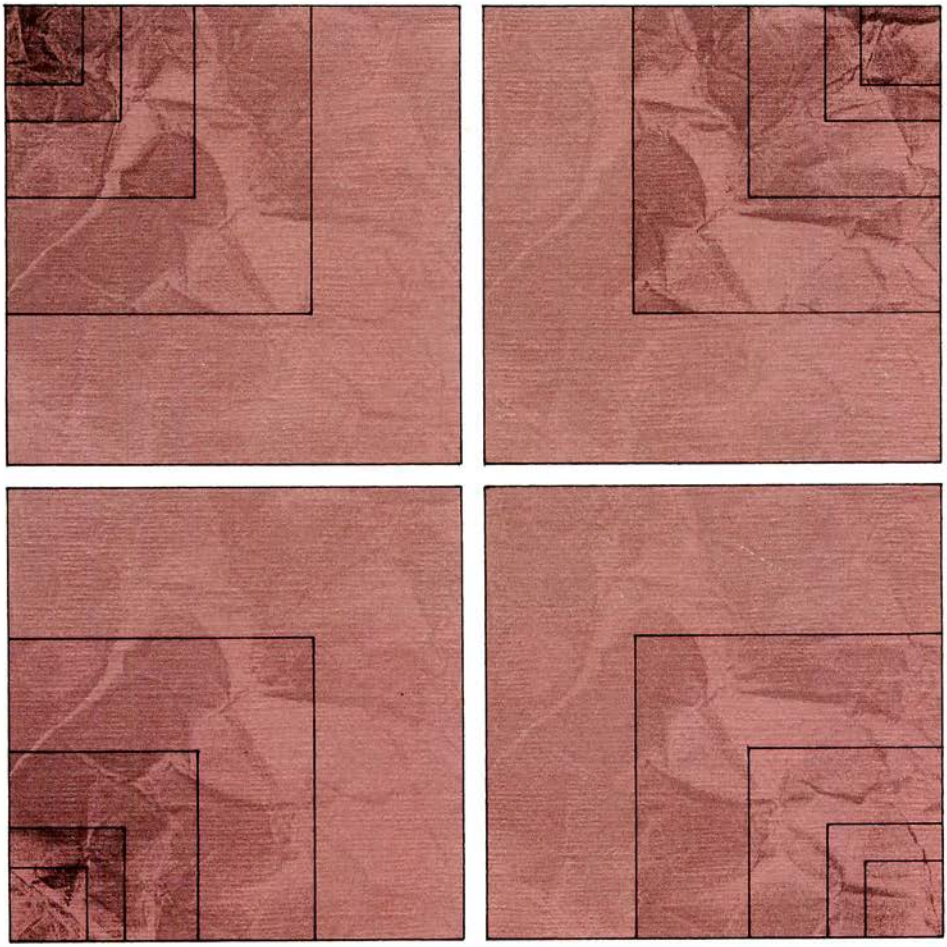
看護のための
人間科学を求めて

楽学舎 編

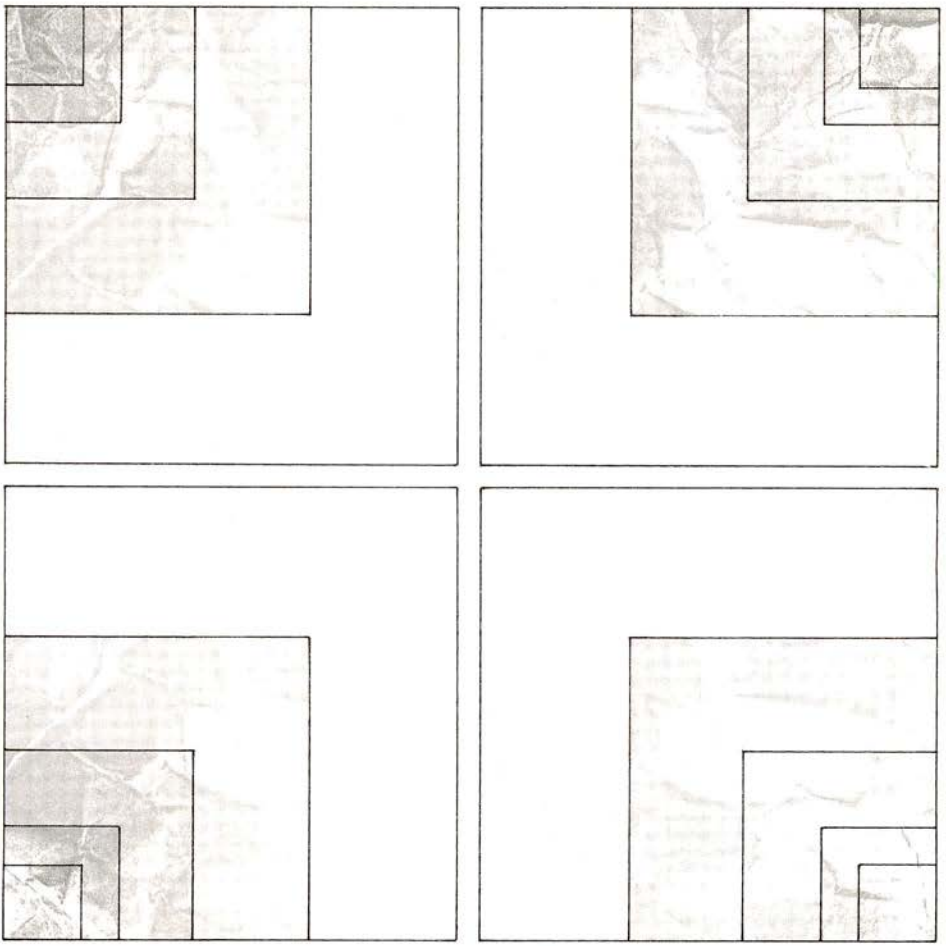


ナカニシヤ出版

看護のための

人間科学を求めて

楽学舎 編



ナカニシヤ出版

まえがき——本書のポイント

もう一つの科学を求めて

今まで，科学（サイエンス）と言えば，無条件に，自然科学のことでした。自然科学とは，私たちが小学校の理科の時間以来，勉強してきた学問です。生理学，化学，物理学なども自然科学です。自然科学が重要であることは，改めて言うまでもありません。自然科学としての医学の進歩によって，多くの不治の病が克服されました。また，私たちが享受している物質的豊かさにも，自然科学が大きく貢献しています。

その一方で，自然科学では手におえない問題，しかし，私たちにとって非常に重要な問題もあります。例えば，手術を前にして不安におびえる患者さんに，どう接したらよいのかという問題，新人の看護婦をどう育てていったらよいのかという問題，婦長や主任が職場をどう運営していったらよいのかという問題，等々。従来，このような問題に対しても，強引に，自然科学の流儀で取り組んできました。あるいは，科学（自然科学）の外の問題，つまり，人格的持ち味の問題とか，経験と勘によってしか解決できない問題とみなされてきました。

ところが，近年，このような問題を真正面から適切に取り扱っていける，もう一つの科学——自然科学と並ぶ，もう一つの科学——が主張されるようになりました。そのもう一つの科学こそ，本書で紹介する人間科学です。もはや，科学＝自然科学ではなく，科学＝自然科学＋人間科学なのです。ただし，人間を対象にする科学が，イコール人間科学ではありません——人間の生理的構造や機能を研究するのは，自然科学です。自然科学と人間科学には，対象（あるいは，問題）と研究者（あるいは，問題を解決しようとする人）の関係において，大きな違いがあります。言いかえれば，研究者が研究対象に対してとる姿勢（スタンス）に大きな違いがあるのです。

ここで，両者の違いを，ごく簡単に述べておきましょう。自然科学では，研究者は，対象との間に一線を引き，その一線の向こう側に対象を据え，研究者

は一線のこちら側から，クールに，客観的に対象を観察します。これが，自然科学の基本となる流儀です。一方，人間科学では，研究者と対象の間に，そのような一線など引けないという前提，つまり，研究者と対象は，いわば溶け合っているという前提からスタートします。では，人間科学の基本となる流儀とは――これを，本書で紹介します。

一口に自然科学と言っても，物理学，化学，生物学など，多くの学問があるように，人間科学にも，さまざまな学問が含まれます。本書では，グループ・ダイナミックス，もちろん，人間科学としてのグループ・ダイナミックスを通じて，皆さんを人間科学の世界に案内します。グループ・ダイナミックスとは，さまざまな人間の集団，組織，社会の動きを研究する学問です。ある患者さんとあなた，プリセプターとプリセプティという2人の集団，同じ病棟で働いている10人の看護婦の集団，一つの病院に勤務する500人の職員の組織，あるいは，日本で看護に従事している約100万の人々，等々は，すべて，グループ・ダイナミックスの対象です。グループ・ダイナミックスは，皆さん方が職場で出会うさまざまな問題に対して，新しい視点を提供してくれるはずです。また，グループ・ダイナミックスを学ぶことによって，研究者と対象の溶け合いの中から紡ぎ出される人間科学について，理解を深めていただけるはずです。

本書の流れ

以下，本書の流れを，おおまかに紹介しておきましょう。各章の冒頭には，章のポイントをわかりやすくまとめてあります。その部分だけを拾い読みするのもよいでしょう。

第1章では，自然科学と並ぶ，もう一つの科学，すなわち，人間科学の必要性を述べ，皆さんを人間科学の旅にいざないます。しかし，人間科学への旅立ちに先立って，一つだけ，準備しておかねばならないことがあります。それは，「個人イコール心を内蔵した肉体」という常識（および，その常識と表裏一体の関係にある「外界と内界を区別する」常識）のしばりから，自らを解き放っておくことです。第2章は，この準備に当てることにします。

第3章から，いよいよ，人間科学の旅が始まります。人間科学の旅と言っても，いろいろなルートがありますが，私たちは，グループ・ダイナミックスと

いうルートを歩くことにします。第3章では，このグループ・ダイナミックスというルートの，おおまかな見取り図を説明します。第4―7章は，まさに，グループ・ダイナミックスの旅路です。

グループ・ダイナミックスは，集合体（集団，組織，社会，等）の動き，変化についての学問です。いかなる集合体も，一つの全体としてみれば，必ず全体的な（トータルな）性質をもっています。その全体的な性質を，集合性と呼びます。私たちの旅では，この集合性を「かや」に例えます。そう，今ではあまり使われなくなりましたが，夏，部屋につるして蚊が入ってこないようにした，あの「かや」です。いかなる集合体も，「かや」に包まれているのです。

どんな人にも前姿と後姿があるように，「かや」にも前姿（観察できる面）と後姿（観察できない面）があります。「かや」の前姿については第4章，後姿については第5章で説明します。「あなたの目の前に花が見えるのは，あなたを包んでいる「かや」が，あなたに花を見させているからだ」――こんな，今聞くと，何のことだ，と言いたくなるような過激なセリフにも出会います。

集合性（かや）とは何かが理解できたところで，第6章では，「かや」はどのようにして変化していくのか，また，自分を包む「かや」に気づくにはどうすればよいのか，といった点を説明します。最後に，第7章では，「個人イコール心を内蔵した肉体」という常識も，実は，「かや」の一つにすぎないことを述べます。つまり，私たちは，「個人イコール心を内蔵した肉体」という常識から自由になるとともに，この常識のルーツをも明らかにするわけです。

対話の広場をつくりませんか

本書は，大阪の看護職による自主的な勉強会から誕生しました。その勉強会の名前は，楽学舎。楽学舎についての説明は，「あとがき」をご覧ください。私は，この勉強会発足の年（1995年），6回に分けて，本書の骨格部分を講義し，その翌年，追加の講義を行ないました。その後，約3年間をかけて，勉強会の中心メンバー3，4名とともに，疑問点について議論したり，看護現場の具体的事例と講義内容の関係について検討してきました。本書出版の計画は，そのような議論の中から，徐々に固まっていきました。また，95，96年の参加者からは，多くの事例を提供していただきました。本書には，そのほんの一

部しか使用できませんでしたが，それらの事例は，本書を書き進める上で，貴重な糧となりました。

このように，本書は，研究者である私と，看護現場の当事者が，共同で紡ぎ出したものです。第1章の言葉を使うならば，本書は，研究者と当事者の共同メッセージです。研究者と当事者の共同メッセージは，発信すれば，それで終わり，というものではありません。むしろ，最初の発信からが本番です。本書は，私たちの共同メッセージをキャッチした人との対話が始まるきっかけにすぎません。そのような，さらなる対話こそ，私たちのローカルな共同的実践を，読者のローカルな共同的実践と結びつけ，共同的実践の輪を広げていくことでしょう。これこそ，共同的実践を旨とする人間科学のあるべき姿です。

どうぞ，私たちとの対話をお願いします。本書に対する質問，意見，感想，批判など，何でも結構です。特に，本書に関連する現場の事例をご教示いただければ幸いです。そのような対話を，なるべく多くの方々と共有するために，ホームページを開設しました。アドレス（URL）は，
http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/users/rakugakusha/
です。皆さんとの対話を楽しみにしています。

編著者を代表して
杉万俊夫（すぎまん　としお）
連絡先：
〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
京都大学　総合人間学部
Eメール：tsugiman@ip.media.kyoto-u.ac.jp
Fax　：075－753－6559

目　　次

まえがき——本書のポイント ……i

第1章　看護職は二足のわらじ——自然科学と人間科学 ……1

1．2種類の事実　2

2．自然科学の流儀　5

3．人間科学　12

第2章　大きなハードル——「個人＝心を内蔵した肉体」という常識 ……25

1．私たちの常識　26

2．常識への疑問　28

3．常識を越えて　33

第3章　人間科学としてのグループ・ダイナミックス——「個人の心」から「集合性」へ ……39

1．集合体　40

2．集合性——「かや」に例えて　44

第4章　集合性（1）——集合的行動 ……51

1．集合的行動　52

2．物的環境と「もの」的環境　58

3．集合的行動の無縁圏　64

第5章　集合性（2）——コミュニケーション ……67

1．コミュニケーション——雰囲気・規範の形成　68

2．コミュニケーションの無縁圏　74

3．規範と雰囲気の形成プロセス　76

第6章　異質性――「かや」を変える原動力 ……91
1．「かや」の多層的重複構造　92
2．異　質　性　94
3．「かや」がわかるということ　98
4．自分を包む「かや」に気づく　100

第7章　「肉体に内蔵された心」という常識のルーツ ……103
1．今の心理学では心を説明できない　104
2．グループ・ダイナミックスによる心の説明　106
3．人生初期における心のルーツ　110
4．近代における心のルーツ　113
旅の終わりに　121

参考文献　125
索　引　127
あとがき　129

さし絵　野沢奈穂

第1章

看護職は二足のわらじ
自然科学と人間科学

本章のポイント

科学イコール自然科学ではありません。もう一つの科学，すなわち，人間科学も必要です。看護職は，自然科学の専門家であると同時に，人間科学の専門家でもあることが求められています。

ただ人間を対象にするのが人間科学ではありません。人間科学は，観察者と観察対象の間に一線など引けないこと，観察者と観察対象は，共同で何かを実践していることを前提にします。自然科学のように，観察者が観察対象をクールに，客観的に研究するのではありません。観察者と観察対象（当事者）による共同的実践の中から発信される共同メッセージこそ，人間科学の知識です。

1．2種類の事実

患者Sさんの事例

Sさん（49歳，男性）は，直腸ガンで，手術のために入院した。腫瘍の位置と大きさから判断して，人工肛門を造らなければならない状態であった。

Sさんは，娘さんが4歳の時に離婚，その後は，男手一つで娘さんを育ててきた。娘さんは，今では独立しており，時々，面会に来ている。現在，Sさんは，アパートで一人暮らし。職業は，日雇いの建築業のため，仕事を休むと収入はない。毎朝，仕事に出かける前に，部屋の拭き掃除をするほどのきれい好きで，几帳面であるが，神経質で，一見，近寄りがたく，気むずかしそうな人である。

入院当初から，同室者のテレビの音がうるさいと文句を言ったり，体調不良や不眠を訴えつづけた。再三，ナースコールを押し，「入院してから，よけいにお腹の調子が悪くなってきた，こんなやったら入院した意味がない」などと不満を訴えた。特に，夜になると，昼間より一層，焦燥感が募るようで，感情のコントロールがつかず，口調も荒くなり，パニック状態に陥っているようにも見えた。入院による環境の変化，経済的な不安，病気や人工肛門造設に対する不安等が重なって，そうさせたのだろう。このようなストレスから，Sさんは，入院後間もなく，胃穿孔を起こし，緊急手術を受けた。

私たち看護婦は，Sさんが2度目の直腸ガン手術を受け入れ，社会復帰に至るまでの援助として，人工肛門の自己管理ができる指導プログラムを立案した。また，胃穿孔の手術後，個室から大部屋に転室するとき，同年代のYさんと同じ部屋に移し，SさんとYさんが，互いに会話ができるよう配慮した。そうすることで，患者さんそれぞれが，同じような不安や悩みを持っていることに気づき，心理的な負担を軽減できるのではないかと考えたからである。幸い，SさんとYさんは，次第に行動を共にするようになり，友達のように仲良くなっていった。また，私たち看護婦にも明るい表情で話しかけてくるようになり，冗談を言ったり，プライベートな話もするようになった。

Sさんは，「入院してきた時は，どうしようか，どうなるのか，とても不安やった。そやけど，手術せなあかんのやったら仕方ないわ」と言った。今では，入院当初の言動を恥ずかしく感じているようだったし，同時に，人工肛門の造設に対する心の準備もできているようであった。その後，Sさんは2回目の手術を受けたが，その経過も良く，パウチの装着や排便の処理も積極的に行ない，無事，退院することができた。

2種類の事実

「患者Sさんの事例」に登場する看護婦は，さまざまな問題に取り組んでいます。例えば，

①Sさんに，直腸ガンができているという問題
②Sさんに，人工肛門を造設する必要があるという問題
③Sさんが，胃穿孔を起こしているという問題
④Sさんが，人工肛門造設を受容しないという問題
⑤Sさんが，経済的不安を感じているという問題
⑥Sさんに話し相手がなく，孤独であるという問題

のような問題に取り組んでいます。

これらの問題は，大きく2つのグループに分けることができます。

第1グループには，①Sさんに，直腸ガンができているという問題，②Sさんに，人工肛門を造設する必要があるという問題，③Sさんが，胃穿孔を起こしているという問題が入ります。

第2グループには，④Sさんが，人工肛門造設を受容しないという問題，⑤Sさんが，経済的不安を感じているという問題，⑥Sさんに話し相手がなく，孤独であるという問題が入ります。

では，第1グループの問題と第2グループの問題のちがいは，どこにあるのでしょうか。まず，第1グループの問題について考えてみましょう。例えば，Sさんに，直腸ガンができているという問題について考えてみます。ここでの問題は，Sさんに直腸ガンができているという事実です。その事実は，患者Sさんが，その事実を知ろうが知るまいが，とにかく存在しています。同じく，その事実は，看護婦，あるいは，担当の医師が知ろうが知るまいが存在してい

ます。つまり，Ｓさんに直腸ガンができているという事実は，患者，看護婦，医師といった当事者が知る知らないとは無関係に，存在しているわけです。このことは，第１グループの問題のすべてにあてはまります。現在の医療技術を前提にする限り，人工肛門の造設が必要だという事実も，Ｓさんが胃穿孔を起こしているという事実も，当事者が知る知らないとは無関係に存在します。

次に，第２グループの問題について考えてみましょう。例えば，Ｓさんが孤独であるという問題について考えてみます。今度は，第１グループとは，まったく話がちがいます。Ｓさんが，自らの孤独感を知ろうが知るまいが（孤独を感じていようがいまいが），Ｓさんの孤独感が存在すると言えるでしょうか。決してそんなことは言えません。Ｓさんの孤独感が存在するのは，まずもって，Ｓさんが，自らの孤独感を知っている（孤独を感じている）からです。Ｓさんが，自らの孤独感など知らない（孤独は感じていない）というのに，Ｓさんの孤独感が存在している（Ｓさんは孤独を感じている）などとは，決して言えません。同じことは，看護婦についても言えます。看護婦にとっても，Ｓさんの孤独感が存在しているとすれば，それは，看護婦が，Ｓさんが孤独を感じていることを知っているからです。看護婦が，Ｓさんの孤独感を知りもしないのに（Ｓさんが孤独を感じていることに気づきもしないのに），看護婦にとって，Ｓさんの孤独感が存在することなどありえません。

同じことは，第２グループの他の問題についても当てはまります。Ｓさんが人工肛門の造設を受容しないという事実は，Ｓさんが「受容したくない（あるいは，受容できない）」からこそ，存在します。Ｓさんが受容しているのに，「受容しない」という事実が存在することなどありえません。また，看護婦にとっても，Ｓさんが受容しないという事実が存在するのは，看護婦が「受容していない」ということに気づいているからです。もし，看護婦が，Ｓさんは受容していると思いこんでいたとしたら，看護婦にとっては，Ｓさんが「受容していない」という事実は存在しないでしょう。Ｓさんが経済的不安を感じているという問題についても同じです。Ｓさんが経済的不安を感じていることは，Ｓさん自身が経済的不安を感じ，かつ，看護婦もそれに気づいているからこそ，Ｓさんと看護婦にとっての事実となります。

このように，第１グループの問題と第２グループの問題には，大きなちがい

があります。第1グループは，当事者が知ろうが知るまいが存在する事実についての問題です。それに対して，第2グループは，当事者が知っているからこそ存在する事実についての問題です。

本章では，第1グループの問題と第2グループの問題には，別の科学が必要であることを説明します。結論を先に述べておくならば，第1グループの問題には自然科学，第2グループの問題には人間科学というように，2種類の科学が必要です。これまで，科学と言えば，即，自然科学のことでした。しかし，これから説明しますように，自然科学では，第2グループの問題に取り組むことはできません。私たちは，自然科学に加えて，人間科学という，もう一つの科学をも必要としているのです。

では，人間科学とは，どのような科学なのでしょうか。また，人間科学と自然科学は，どう違うのでしょうか。これを説明する前に，まず，そもそも，自然科学とは，どのような科学なのかを，あらためて整理しておきましょう。特に，自然科学の基本となる流儀を明確にしておきたいと思います。なぜならば，この基本となる流儀において，人間科学と自然科学には，大きな違いがあるからです。

2．自然科学の流儀

自然科学

第1グループの問題については，存在しているけれども，まだ知られていない事実を発見することが重要です。もし，患者の苦しみが，肉体のどこかに存在しているガン細胞によるものならば，まず，どの部位にどのようなガン細胞があるのか，その事実を発見しなければなりません。次に，発見されたガン細胞という事実に対して，すでに発見されている事実――すでに発見されている薬の効果についての事実，すでに発見されている効果的な手術についての事実――にもとづいて，処置がなされねばなりません。

患者のガン細胞についての事実，使用される薬や手術についての事実，いずれの事実も，その事実が発見される前から存在していました。存在していたけ

れども，だれにも知られていなかっただけです。ところが，患者のガン細胞についての事実が，患者を検査することによって知られる事実になりました。また，存在していたけれども，だれにも知られていなかった化学物質（薬物）の効果が，医学の進歩によって，知られる事実になったわけです。

また，あたり前の話ですが，患者のガン細胞についての事実が，当事者（医師，看護婦，患者）に知られるようになったからといって，その事実が事実でなくなってしまうことはありません（ガン細胞が，突然，消えてしまうようなことはありません）。薬や手術の効果についての事実も同じです。薬や手術の効果が広く知られるようになったからといって，その効果がなくなってしまうようなことは決してありません。

このように，知る知らないとは無関係に存在している事実を発見し，そのような種類の事実についての知識を蓄積してきたのが科学（サイエンス）です。正確に言えば，自然科学です。自然科学は，小学校以来，理科の時間に習ってきた学問です。医学も，物理学も，化学も，生物学も，自然科学です。普通，科学といえば，即，自然科学を意味しています。

ここで，改めて，自然科学の基本を確かめておきましょう。自然科学は，人間は知らなかったけれども，すでに存在していた事実を発見します。例えば，1953年に，ワトソンとクリックという生理学者が，遺伝子ＤＮＡの二重らせん構造を発見しました。でも，ＤＮＡの二重らせん構造は，それが発見されるずっと前から存在していました。ただ，人間がそれを知らなかっただけです。そして，1953年に，それが発見されたのです。

また，当たり前のことですが，ＤＮＡの二重らせん構造が発見されたからといって，ＤＮＡが，何か他の構造になってしまうことなど，決してありません。二重らせん構造が発見されたとたんに，三重らせん構造か四重らせん構造に変化してしまうなど，悪い冗談としか言いようがありません。人間がある事実を知ったことによって，その事実が変化してしまって，もう事実ではなくなってしまうなどということはありえないのです。

このように自然科学の知識は，人が知ろうが知るまいが存在している，本来の事実についての知識です。したがって，自然科学で何かを発見しようとする時には，研究対象についての事実を壊さないように注意しながら，その事実を

調べねばなりません。例えば，新薬の効果についての事実を調べる時には，新薬が体に与える影響という事実を壊さないように（曲げないように）注意して調べることが必要です。いくら新薬に効果があってほしいという期待を持っていたとしても，その期待でもって被験者の反応を歪めてしまうことなど，絶対に許されません。そんなことをしてしまっては，知ろうが知るまいが存在している本来の事実を発見することができないからです。

つまり，自然科学で何かを調べる時には，研究対象と研究者の間には，明確に一線が引かれます。そして，研究対象は，その一線の向こう側に据えられます。研究者は，その一線のこちら側から，一線を越えることなく，クールに研究対象を調べるのです。こうして，研究対象が，そもそも持っていた本来の性質（事実）を見つけ出すのです。

科学者が新しい事実を発見する時に限らず，私たちが自然科学の知識を使って事実を調べようとする場合も同じです。看護婦が患者の血圧を調べようと思えば，患者に血圧計を装着して一線の向こう側に置き，看護婦は一線のこちら側からクールに計測しなければなりません。患者の血圧が下がってほしいという願いから，その一線を越えて，血圧計を勝手に操作してしまっては何にもなりません。患者や看護婦が知ろうが知るまいが存在している血圧の高さを調べるには，患者を一線の向こう側に据え，看護婦は一線のこちら側からクールに調べなくてはなりません。

このように，研究者（観察者）と研究対象（観察対象）の間に一線を引き，研究者（観察者）は，一線の向こう側に据えた研究対象（観察対象）を，一線のこちら側からクールに研究（観察）するというのが，自然科学の基本となる流儀です。先に述べました第１グループの問題は，この自然科学の流儀で取り組まねばなりません。しかし，第２グループの問題はどうでしょうか。

自然科学が通用しない現象（その１）――「Ｓさんの事例」から

では，第２グループの問題に話を移しましょう。第２グループの問題は，当事者が知っているからこそ存在する事実についての問題でした。つまり，④Ｓさんが，人工肛門造設を受容しないという事実，⑤Ｓさんが，経済的不安を感じているという事実，⑥Ｓさんに話し相手がなく，孤独であるという事実，い

ずれの事実も，Ｓさんが知り，そして，看護婦も知っているからこそ，Ｓさんと看護婦にとっての事実になったわけです。

しかし，看護婦は，どのようにして，④－⑥を知るようになったのでしょうか。Ｓさんを一線の向こう側に据えて，一線のこちら側からクールに観察することによって知るようになった（気づいた）のでしょうか。ちがいます。Ｓさんが気むずかしそうな顔をしているにもかかわらず，看護婦はＳさんに話しかけています。それに対して，Ｓさんは，荒々しい口調で不満を訴えるばかりでした。しかし，看護婦は，繰り返し，Ｓさんに話しかけています。このようなねばり強い対話を通じて，看護婦は，④－⑥を理解する（知る）ようになりました。言いかえれば，④－⑥は，このような対話を通じて，看護婦にとっての事実になり，そして，２人（Ｓさんと看護婦）にとっての事実になったのです。そこには，一線で隔てることなどできない２人の関係をみてとることができます。

自然科学が通用しない現象（その２）――経済予測

自然科学の流儀が通用しない現象は，看護の現場に限らず，広範に存在しています。その例を見ておきましょう。

まず，少々スケールの大きい話で，経済予測の話をしてみます。向こう１年，景気はどうなるか，物価は上がるか下がるかなど，エコノミストと呼ばれる経済の専門家は，理論とデータに基づいて経済の動きを予測し，それをマスコミに発表します。この場合，いかにも，エコノミストは，一線のこちら側から，一線の向こう側に据えた対象（国民の経済活動）を予測しているように見えますが，実は，それほど単純な話ではありません。

例えば，著名なエコノミストが，理論とデータをもとに，向こう１年，日本の景気はかなり悪くなると予測したとしましょう。そして，その予測が，マスコミで公表されたとします。そうすると，企業経営者の中には，「そうか，景気が悪くなれば，消費者のサイフのひもがきつくなるだろうから，少しでも商品の値段を安くしなければ」と考え，経費削減に努力し，製品の価格を下げる人が出てきます。もし，そのような経営者が多くなると，いろいろな商品の値段が安くなるわけですから，国民の購買意欲がそそられ，結果として，物がよ

く売れ，企業ももうかり，景気が悪くならなくてすむ，ということになります。つまり，著名なエコノミストの予測は，幸いにもはずれたわけです。なぜ，はずれたかと言えば，エコノミストの予測を国民が知ることによって，対象（国民の経済活動）が変化してしまったからです。

逆の場合もあります。今度も，著名なエコノミストが，景気が悪くなると予測したとします。すると，企業経営者の中には，景気が悪くなって製品が売れなくなった時のことを考えて，生産規模を縮小する人が出てきます。また，消費者の中には，今後は給料があがらない，ひょっとすると収入が減るかもしれないと警戒して，早目から財布のひもを引き締める人が出てきます。そういう経営者や消費者が多くなると，本当に商品の売買が減少してしまい，景気が悪くなってしまいます。今度は，予測が当たったわけです。しかし，どうでしょう？予測が当たったのは，エコノミストの理論が正しかったからでしょうか？ちがいます。エコノミストの予測を知った国民が，経済活動を変えたからです。仮に，エコノミストの理論がまちがっていたとしても，権威あるエコノミストが予測をし，予測を信じた国民が経済活動を変えるならば，結果としては，予測が当たってしまう場合もあるのです。このような現象は，「予言の自己成就」と呼ばれています。予言（予測）が，その理論的根拠の正しさとは無関係に，勝手に当たってしまったという意味です。再び，重要なことは，予測が当たったかに見える場合でさえ，決してエコノミストの理論が正しかったのではなく，予測対象（国民の経済活動）が予測によって変化してしまったからだということです。

このように，経済予測では，いくらエコノミストが，自分と予測対象の間に一線を引いて，一線の向こう側に対象を据え，一線のこちら側からクールに予測しようとしても，それは不可能なのです。なにしろ，予測対象が一旦予測を知れば，その姿を変えてしまうわけですから。エコノミストが，対象についての事実をつかもうとしても，つかんだ瞬間に対象についての事実は変化してしまいます。エコノミストと対象の間には一線など引けそうにありません。

自然科学が通用しない現象（その３）――行動科学

次に，もっと身近な例をあげましょう。本屋さんに行きますと，どうすれば

人間関係がよくなるか，職場の同僚や患者にどのように接したらよいか，職場のリーダーはスタッフにどのようなリーダーシップを発揮したらよいか，などについて書かれた本がたくさん並んでいます。その中には，どうみてもかなりいい加減としか思えない本も多いのですが，同時に，心理学者や行動科学者が理論とデータに基づいて書いた本もあります。そのような本を開くと，例えば，人間関係をよくするには，かくかくしかじかの行動を心がければよいといった理論が書かれており，その裏づけとなったデータが紹介されていたりもします。

ここで，ある婦長さんがその種の本を読んで，「かくかくしかじかの行動」を学んだとします。その婦長さんは決心しました——そうか，明日から，この「かくかくしかじかの行動」でいこう，と。翌日から，婦長さんは，早速，「かくかくしかじかの行動」を実行に移しました。幸い，病棟のスタッフは，その「かくかくしかじかの行動」によって，大いにやる気を出し，仕事に熱が入るようになりました。さらに，「婦長さんって，思っていたより能力があるんだね」，「婦長さんって，意外といい人なんだね」という声も聞かれるようになりました。

でも，どうでしょう。ある日，ぶらりと本屋に立ち寄ったスタッフの一人が，たまたま，看護コーナーにあった一冊の本を手に取ったとします。その本には，リーダーたるもの，いかにあるべきかが書かれており，結論として，「かくかくしかじかの行動」が部下の仕事に対する意欲を高めるのに有効であることが述べられていました。しかも，それが，単なる著者の独断と偏見ではなく，多数の職場を調査した結果に基づくものであることが書かれており，そのデータを示すグラフも掲載されていました。

「あっ，これだ！婦長さん，最近何か変わったと思ったら，これ読んで，これをやってるんだ」——本を見たスタッフは，きっとこう思うでしょう。こうして，「かくかくしかじかの行動」を知ってしまった以上，明日からも同じというわけにはいきません。婦長さんの「かくかくしかじかの行動」が，スタッフに与える効果には必ずや変化が生じてしまいます。場合によっては，「婦長さんの手のうち，わかっちゃった」とばかりに，「かくかくしかじかの行動」の神通力がなくなってしまうかもしれません。でも，場合によっては，「婦長さんって，たくさん本も読んで，婦長としてのあり方を考えてるんだな。私も

見習わなくっちゃ」と，婦長さんに対する信頼が増すかもしれません。

いずれにせよ，大事なことは，「かくかくしかじかの行動」についての知識を持つことによって，「かくかくしかじかの行動」の効果が変化してしまうということです。整理してみましょう。まず，「かくかくしかじかの行動」有効理論を見つけた研究者がいます。この研究者の研究対象は，さまざまな職場のリーダーと部下たちです。この研究者は，一線の向こう側に研究対象（さまざまな職場のリーダーと部下たち）を据え，自分は，一線のこちら側からクールにデータを収集し，「かくかくしかじかの行動」有効理論を導き出しました。でも，その「かくかくしかじかの行動」有効理論を，研究対象の一人（たまたま本を見たスタッフ）が知ってしまうことによって，その一人の研究対象には理論が通用しなくなってしまうわけです。

この例からも，研究者と研究対象の間に一線を引くという自然科学の流儀が通用しないことがおわかりいただけたと思います。前の例では，経済予測をするエコノミストと予測対象（国民の経済活動）の間に一線を引くことなどできませんでした。それと同じことが，職場のリーダーシップや人間関係を研究する心理学者や行動科学者と，その研究対象（さまざまな職場のリーダーと部下たち）についても当てはまります。さらに，同じことが，研究成果である「かくかくしかじかの行動」有効理論という知識を適用する側（婦長）と適用される側（スタッフ）についても言えます。理論を適用される側が理論を知ってしまうと，理論が当てはまらなくなってしまうのです。理論を適用する側と適用される側の間にも一線を引くことなどできそうにありません。

自然科学が通用しない現象（その4）——カウンセリング

もう一つだけ，自然科学の流儀が通用しない例をあげておきましょう。21世紀には，脳科学や生命科学が飛躍的に進歩すると言われています。クローン動物をはじめとする遺伝子工学の成果を見るにつけ，21世紀のさらなる発展はまちがいないように思えます。ここに，21世紀中頃の，あるカウンセラーに登場してもらいましょう。そのカウンセラーは，進歩した脳科学や生命科学をよく勉強しているとします。そのカウンセラーのところに，あるクライエントが相談にきました。「どうも，最近，ノイローゼ気味なんです。昼間はまっ

たく仕事に集中できないし，夜はなかなか寝つけません。うとうとしたかと思うと，真夜中にハッと目が覚め，そうなると，あれこれ頭の中に浮かんできて，もう夜明けまで眠れません。ふと，自殺してしまおうかと思うこともあるんです。」――こう，クライエントが悩みを訴えます。

カウンセラーは，日ごろ勉強している脳科学や生命科学の知識を総動員して，クライエントに答えます――「うん，あなたの脳は，ドーパミンの分泌量が多すぎるのかもしれない。あるいは，最近のヒトゲノム研究によれば，あなたの遺伝子，ＤＮＡの構造の，この部分の配列がこうなっているのかもしれない――。」どうでしょうか。こんなカウンセリングをやられた日には，このクライエント，その晩，ほんとに自殺してしまうかもしれません。

どこが変なのでしょうか。それは，前に述べた２種類の問題（第１グループと第２グループの問題）を，ごっちゃにしているところです。つまり，観察者（カウンセラー）と観察対象（クライエント）の間に一線を引いて，クールに観察しなければならない問題と，そもそも一線など引けない問題が，ごっちゃになっているのです。もっと，はっきり言えば，クライエントが訴えている問題は，両者の間に一線など引けない問題（第２グループの問題）であるにもかかわらず，カウンセラーは，一線を引くべき問題（第１グループの問題）と勘違いしているのです。

３．人　間　科　学

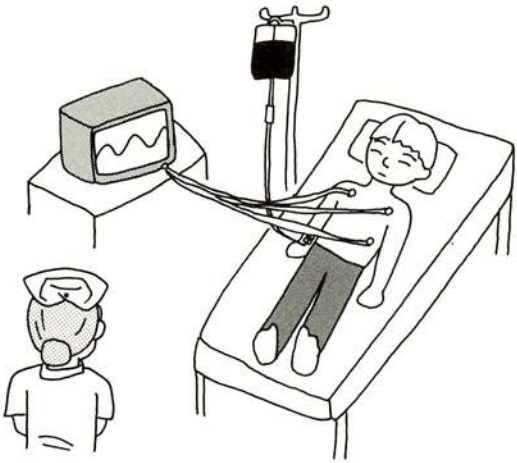
もう一つの科学――人間科学

以上，Ｓさんの事例，経済予測，「かくかくしかじかの行動」有効理論，変なカウンセリングと，４つの例をあげてきました。これらの例に共通するのは，自然科学の流儀が通用しないということです。看護婦と患者，経済予測をする人と予測対象である国民の経済活動，「かくかくしかじかの行動」有効理論を適用しようとする婦長と適用されるスタッフ，カウンセラーとクライエント，その間に一線を引き，両者を分離しようとしても不可能なのです。

しかし，いかに自然科学の流儀が通用しないとはいえ，患者への対応にして

も，経済予測にしても，婦長のリーダーシップにしても，カウンセリングにしても，私たちにとって非常に重要な問題です。自然科学の流儀が通用しないからといって，もうどうでもよいなどとは，とても言えない問題です。そういう問題に取り組める科学が必要です。つまり，自然科学とは異なる，もう一つの科学が，ぜひ必要なのです。

その，もう一つの科学こそ，人間科学です。人間科学の対象は，人間が織りなす現象です。しかし，ただ人間の現象を対象にする科学というだけではありません。いくら人間を対象にしていても，人間を一線の向こう側に据えて，クールに研究するのは，人間科学ではありません。それは，自然科学です。医学の大部分は，人間の臓器，臓器に与える薬物の効果などを一線の向こう側に据えてクールに研究していますので，いくら人間を対象にしていても自然科学で



「血圧は，どのくらいかな？」
――観察者（看護婦）は，観察対象（患者の血圧）を一線の向こう側に据え，一線のこちら側からクールに観察。

「患者にどう接したらいいのかな？」
――観察者（看護婦）と当事者（患者）は，溶け合っている，いっしょに何かを実践している。

す。

人間科学は，研究対象である人間の現象と研究者の間に，そもそも一線など引けないということを基本にします。また，人間科学の知識を使う人とその相手の間にも，一線など引けないということを基本にします。言いかえると，研究者と研究対象，あるいは，知識を使う人とその相手は，同じ土俵の上で，互いに影響を与え合っているという前提からスタートするのです。

人間科学の流儀

では，人間科学の流儀を説明します。人間科学では，研究対象と研究者は互いに影響を与え合っているわけですから，研究対象ではなく，当事者と呼ぶことにします。研究者と当事者が互いに影響を与え合っているということは，研究者と当事者が，一緒に何かを行なっているということです。言いかえれば，研究者と当事者が，共同の実践を行なっているということです。仮に，研究者や当事者に，共同の実践を行なっているという意識がなくても，両者による何らかの実践が行なわれてしまうのです。研究者と当事者，知識を適用する人とその相手が，共同の実践を行なっていること，あるいは，両者の間に，共同の実践が行なわれてしまうことを，先の4つの例について見てみましょう。

まず，看護婦と患者Sさんの例（第2グループの例）。看護婦は，患者としんぼう強く対話を重ねて，患者の不安や不満を見出していきました。つまり，患者の不安や不満が，両者にとっての事実になったのは，対話という両者の共同的実践があったからです。

次に，経済予測の例。エコノミストの予測は，国民の経済活動を変化させ，その結果，予測がはずれたり，当たったりしました。しかし，予測がはずれた場合も，当たった場合も，予測によって国民の経済活動が変化したのは，国民が，その予測に注目したからです。国民が経済活動を行なう上で，経済の動きを予測することは重要です。予測は，国民に求められているのです。その求めに応じて，エコノミストは予測をします。すると，今度は，国民の方が，その予測に基づいて経済活動を変更するわけです。これは，まさに，エコノミストと国民の共同的実践に他なりません。

次は，「かくかくしかじかの行動」有効理論を使った婦長さんとスタッフの

例。婦長さんとスタッフは，日頃から，同じ病棟で働いています。まさに，日々，共同の実践を行なっているわけです。その共同的実践の中で，「かくかくしかじかの行動」有効理論も用いられたのです。前の例では，スタッフが婦長さんと同じ本を読んで，もろに，「かくかくしかじかの行動」有効理論を知ってしまった，という極端な話になっていました。ここまで極端な話ではなくても，突然，婦長さんの行動が変化すれば，スタッフは，「おやっ」と思うはずです。そして，「どうしてだろう」と理由を考えるでしょう。あるいは，「どうしたんですか？」と，婦長さんに尋ねるかもしれません。その結果，「かくかくしかじかの行動」の効果が左右されることは，十分ありうる話です。このように，「かくかくしかじかの行動」有効理論を本で知った婦長さんが，その理論を試みてみること自体，婦長さんが望むと望まざるとにかかわらず，スタッフとの新たなる共同的実践が始まってしまうきっかけになるのです。

最後に，カウンセリングの例。そもそも，カウンセリングは，クライエントの悩みをカウンセラーが受容し，クライエントだけが知っていた（感じていた）悩みを，２人にとっての事実にするところから始まります。これも，まさに，共同的な実践です。

この点で，いわゆる心の病と心臓の病は，決定的に異なります。心臓の病という事実は，たとえ，患者本人が気づいていなくても，また，医者が気づいていなくても，存在しています。しかし，心の悩みは，クライエントも感じ，カウンセラーも気づいているときに，事実として存在します。しかも，その事実は，２人の共同的実践を通じて，事実になるのです。前の例は，クライエントの心の病を，あたかも心臓の病であるかのように勘違いした例と言えます。

ローカルな共同的実践

人間科学では，事実は，共同的実践の中から生まれ，共同的実践の中に編み込まれていきます。つまり，人間科学は，共同的実践のための科学です。当事者と研究者の共同的実践といっても，必ずしも平坦な道のりとは限りません。両者の主張がくいちがい，激しく対立することもあるでしょう。しかし，対立を経験しながらも，共同的実践が一段落し，当事者と研究者が，実践の記録や，実践から導かれた理論を，共同のメッセージとして発信できる場合も少なくあ

りません。この当事者と研究者の共同メッセージこそ，人間科学の知識です。

共同的実践は，特定の時期（時代）に，特定の場所で，特定に人々によって行なわれます。もちろん，時期の長い短い，場所の広い狭い，人々の多い少ないは，さまざまでしょう。しかし，そのような違いはあっても，共同的実践は，限定された時期に，限定された場所で，限定された人々によって行なわれます。人間科学の知識は，基本的に，限定された時期と場所における限定された人々による共同的実践，つまり，ローカル（局所的）な共同的実践の中から生まれます。

一方，自然科学は，すでに存在していたけれども，人間が知らなかった事実を発見していきます。その事実は，場所を超えて，時代を超えて妥当する普遍的（ユニバーサルな）事実です。つまり，自然科学は，普遍的事実を探求する科学です。普遍的事実を探求するには，事実についての知識が普遍的に正しいことを，実験や観察によって実証しなければなりません。したがって，自然科学の目的は，普遍的事実の「実証」だと言うことができます。それに対して，人間科学の目的は「実践」，共同的な実践です。

人間科学の目的が実践であるからといって，データ収集や観察が人間科学に不要だなどとは思わないでください。データ収集や観察は，人間科学にとっても非常に重要です。しかし，人間科学におけるデータ収集や観察は，あくまでも共同的実践のためのものです。それに対して，自然科学におけるデータ収集や観察は，普遍的事実を実証するためのものです。自然科学のデータや観察結果は，場所を超え，時代を超えて妥当する事実（現象）の「標本（サンプル）」です。

人間科学のデータ収集や観察は，ローカルな共同的実践の中で，その共同的実践のために行なわれます。共同的実践を行なおうとすれば，現状をよく観察しなければならないのはもちろんです。必要ならばデータも収集します。現状のみならず，過去のいきさつや歴史について，よく調べてみることが必要になる場合もあります。あるいは，将来について，予想やシミュレーションをしてみることが必要になる場合もあるでしょう。このように，人間科学にとっても，データ収集や観察は重要です。しかし，人間科学のデータ収集や観察は，あくまでも，ローカル（局所的）な現状，過去，将来を把握するためのものです。

決して，場所を超えて，時代を超えて妥当する普遍的事実を発見するためのものではありません。

1次モードと2次モード

ローカルな現状，過去，将来を把握し，その把握に基づいて問題解決に取り組む段階を，共同的実践の1次モードと呼ぶことにしましょう。この1次モードでは，データ収集や観察も必要になります。また，研究者は，さまざまな概念や理論を持ちこみます。

重要なことは，1次モードの共同的実践は，必ず，ある前提，しかも，気づかざる前提の上に立った実践である，ということです。「気づかざる」というところが重要です。自分たちが前提にしていることを，徹底的に洗い出し，考えぬいたとしても，考えついた前提の，そのまた根底に，必ず，「気づかざる前提」が存在しています。言い方を変えれば，気づかざる前提に立たない共同的実践など，そもそも不可能です。気づかざる前提に立って初めて，共同的実践を行なうことが可能になるわけです。

ところが，共同的実践が進行するうちに，それまでの実践の根底にあった「気づかざる前提」に気づくことがあります。この「気づかざる前提」に気づく段階を，2次モードと呼ぶことにしましょう。「あっ，そうか。今まで，そういう前提に立っていたのか」と，それまでの（1次モードの）前提に，過去形で気づくモードです。こうして，2次モードを経て，新たなる1次モードに入っていきます。

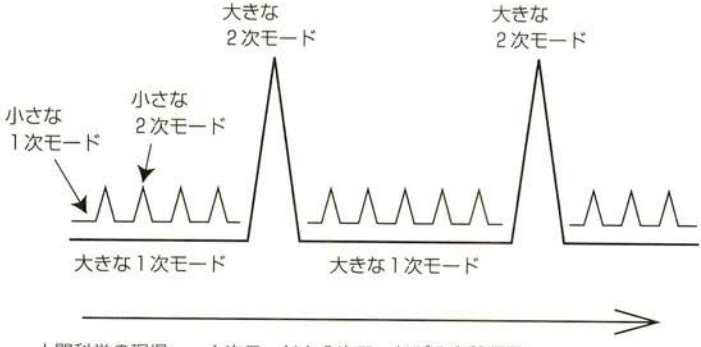
新たなる1次モードでは，現状，過去，将来の把握の仕方が，前の1次モードとは異なってきます。また，前の1次モードで行なった共同的実践の意味あいも異なってきます。しかし，今回の1次モードの共同的実践もまた，気づかざる前提――もちろん，前回の気づかざる前提とは違いますが――に立っています。その気づかざる前提に気づくときには，新たなる2次モードに入っていきます。

人間科学の現場は，1次モードと2次モードの繰り返し，1次モードと2次モードの連続的交替運動です。この2つのモードの交替運動は，小さな（微視的な）交替運動と大きな（巨視的な）交替運動に分けることができます。まず，

日常的には，微視的な交替運動が進行しています。小さな気づき，小さな発見は，すべて，1次モード→2次モード→（新たなる）1次モードという交替運動です。もちろん，この場合には，気づかざる前提に気づいたという感覚は伴いませんし，気づかざる前提が大きく変化するわけでもありません。しかし，いかに小さい変化ではあるにしても，気づかざる前提は，必ず，変化しています。感覚的には，特に前提が変化したという感覚はなくとも，現状，過去，将来の事実を徹底的に調べ，実践の対象としていくことによって，実は，気づかざる前提の方も，徐々に変化しているのです。この微視的な交替運動が数多くなされるところに，大きな（巨視的な）交替運動に向けてのエネルギーが蓄積されていきます。

大きな（巨視的な）交替運動の場合には，2次モードに入ったとき，まさに，気づかざる前提に気づいた，という感覚が伴います。「そうか，自分たちは，そう思い込んでいたのか（そういう，気づかざる前提に立っていたのか）」と，目の上の鱗が落ちるような感覚を覚えることもあるでしょう。このような大きな交替運動が生じると，それまでの（1次モードの）実践や，その基礎になっていた現状・過去・将来の把握が大きく変化します。

以上，1次モードと2次モードについて述べたことは，一見，人間科学のみならず，自然科学にも当てはまるように思えます。確かに，自然科学においても，新奇な発見をきっかけに，おおもとにある基礎理論が改訂されてきました。そして，基礎理論が改訂されると，従来の多くの知見が，改訂された基礎理論



人間科学の現場――1次モードと2次モードぴの交替運動

の上に再編成されてきました。このプロセスは，人間科学について述べた，1次モード→2次モード（基礎理論の改訂）→新たなる1次モードと同じように見えます。

しかし，自然科学では，このような基礎理論の改訂を続けることによって，普遍的な事実に接近できるという大前提があります。逆に言うと，普遍的な事実に接近していくためにこそ，基礎理論の改訂がなされるのです。一方，すでに述べましたように，人間科学は，普遍的事実を追求する科学ではありません。人間科学は，ローカルな共同的実践のための科学です。1次モードの共同的実践が，2次モードを経て，新たなる1次モードの共同的実践に入ることによって，共同的実践の当事者は，自らの実践内容や，そのための現状・過去・将来の把握に対して確信を深めていくでしょう。しかし，そのことと，普遍的に妥当する事実（時代や社会を超えて，万人に妥当する事実）を手にすることは同じではありません。

目的と価値観

実践には，必ず目的があります。また，実践は，必ず何らかの価値観を前提にしています。そうであれば，実践の中から生まれる人間科学の知識にも，何らかの目的・価値観が前提になっているはずです。さらに言えば，人間科学の知識は，その知識の前提となっている目的や価値を共有する人々の実践にとってこそ，意味ある知識なのです。

一方，自然科学では，特定の目的や価値観によって知識が影響されるなど，もってのほかです。医学書に書いてある知識は，いかなる目的や価値観を持っている人にも当てはまります。自然科学は，目的や価値観などとは無関係に存在している事実を取り扱います。

それに対して，人間科学は，目的や価値観と分かちがたく，結びついています。したがって，ある人間科学の知識を使うということは，その知識の発信者と目的や価値を共有していくことを意味します。それだけに，人間科学の知識をつくりだす研究者も，人間科学の知識を使おうとする人々も，自らの目的や価値観を問い続けることが必要です。

先に述べました1次モードと2次モードの交替運動は，目的や価値観につい

ても当てはまります。人間科学の共同的実践は，必ず，何らかの気づかざる目的や価値に立脚しています。そのような気づかざる目的や価値に立脚した共同的実践は，1次モードの実践です。しかし，研究者と当事者が，気づかずして前提にしていた目的や価値に気づく段階——2次モード——に入ることもあります。「あっ，そうか，自分（たち）は，そういう目的・価値観に縛られていたのか」，「そうだとしたら，もし，目的や価値観を変えれば，明日に向かって，こういう一手もあるじゃないか」という具合です。

ローカルな知識から広範な知識へ

ローカルな共同的実践についての共同メッセージは，特定の人物，特定の場所，特定の時代に彩られた生々しい実践の記録です。生々しい記録は，それなりに人の心をうつものですが，同時に，他の場所，他の時代の他の人々の実践に結びつきにくいのも事実です。他の人が，参考にしようと思っても，「あの人物だったから，あの場所だったから，あの時代だったから，できたのだ」という気持ちが先に立ってしまいます。

そこで，生々しい記録を，ちょっとだけ抽象化してやる必要があります。つまり，ちょっとだけ一般的な概念を使って，直接の当事者ではない人にも理解できるようにするのです。この抽象化の作業も，研究者と当事者が共同して行ないます。おそらく，研究者の方が，「こういう概念が使えるのではないか」と提案する場合が多いでしょう。研究者は，その概念について，かみくだいてかみくだいて，わかりやすく説明しなければなりません。また，当事者の方も，決して研究者の言いなりになってはいけません。自分（たち）の実践が，その概念で的確に表現されるのか，また，その概念で自分（たち）の実践をメッセージにしてよいのか，徹底的に考え，研究者と議論しなければなりません。こうして，当事者と研究者の共同によって，人間科学の知識が生まれ，発信されます。その知識は，特定の人物（たち）が，特定の場所，特定の時代に行なった実践，つまり，ローカル（局所的）な実践を，ちょっとだけ抽象化した知識です。

こうして，あるローカルな場所・時代から発信された知識は，抽象化のおかげで，他のローカルな場所・時代に伝播していきます。あるローカルな場所・

時代から発信された知識は，他のローカルな場所・時代にいる人（たち）によってキャッチされ，実践の参考にされるかもしれません。そうなれば，地点と時点を異にする２つのローカルな場が結びつくことになります。言いかえれば，２つのローカルな場の間にも，共同の関係，共同の実践が生まれるのです。つまり，ローカルな知識が，インター・ローカルな知識になるわけです。こうして，共同的実践の輪が広がります。

もちろん，キャッチした知識をそのまま使うとは限りません。批判も結構です。ちょうど，一つのローカルな場所・時代での実践の中に，当事者と研究者の対立がありうるのと同じように，異なる地点・時点の間の共同的実践にも批判や対立はありえます。むしろ，そのような批判や対立を通じて，批判する側，される側の共同が深まり，ローカルなメッセージ（知識）が，より広範な人々のメッセージ（知識）へと鍛えられていくのです。

人間科学の知識を使うということは

人間科学の知識は，ローカルな場所と時代，そして，特定の共同的実践から生まれた知識です。その共同的実践の輪は，次第に拡大していくかもしれません。しかし，基本的に，時代を超えて，社会を超えて，誰にでも当てはまる知識ではありません。どんなに共同的実践の輪が拡大したとしても，限られた時間的，空間（場所）的な範囲で適用できる知識ですし，限られた範囲の人々の実践に当てはまる知識です。この点，自然科学と対照的です。自然科学の知識，例えば，ＤＮＡの二重らせん構造の知識は，いかなる時代，いかなる社会の誰にでも当てはまります。

したがって，人間科学の知識を使うということは，自分もその知識の発信者との共同的実践に加わるということです。その際，知識の生まれた背景に十分注意することが必要です。例えば，文化が違えば，共有する価値観にも違いがあります。価値観を異にする文化の中で発信されたメッセージ（知識）には，要注意です。アメリカで発見された医学的知見を，日本にそのまま導入するようにはいきません。

これまで，本来ならば人間科学の流儀で扱うべき現象が，しばしば，自然科学の流儀で扱われてきました。アメリカで誕生した「行動科学」は，その典型

です。行動科学の本を読みますと，書かれていることがすべての人に当てはまる，あるいは，すべての看護婦に当てはまるかのように書いてあります。看護職の方は，自然科学を勉強する機会が多いだけに，行動科学の本に書いてあることを，そのまま取り入れる傾向があります。しかし，注意してください。本当に，日本の看護婦，自分の病院，自分の病棟にも当てはまるのでしょうか？これらの点を慎重に考えてみる必要があります。

2つの科学

本章では，自然科学と並ぶ，もう一つの科学，すなわち，人間科学の必要性と，その基本的な流儀について説明しました。私たちは，今から，人間科学への旅に出ようとしています。なにしろ，人間科学への旅は初めてですから，面食らうようなことも，いろいろあるでしょう。立ち止まって，じっと考えねばならないときもあるでしょう。でも，旅は楽しいものです。旅は，新しい経験，新しい出会いに満ちています。人間科学への旅は，きっと，皆さん方を，新しい知のあり方と出会わせてくれるはずです。

このように，本書は，人間科学へのいざないですから，もっぱら，人間科学の話に終始します。しかし，だからといって，自然科学を軽視しているのでは，決してありません。自然科学が重要なのは言うまでもありません。自然科学としての医学の進歩によって，多くの不治の病が克服されました。また，私たちが享受している物質的豊かさにも，自然科学が大きく貢献しています。

自然科学と人間科学は，科学という車の両輪なのです。言いかえれば，科学という知的営みは，自然科学という知的営みと人間科学という知的営みの両方を包含しているわけです。ところが，従来は，科学イコール自然科学でした。私たちのすべての問題が，自然科学で解決できるならば，それでいいでしょう。しかし，自然科学では手におえない問題，しかし，私たちにとって非常に重要な問題もあるのです。例えば，手術を前にして不安におびえる患者さんに，どう接したらよいのかという問題，新人の看護婦をどう育てていったらよいのかという問題，婦長や主任が職場をどう運営していったらよいのかという問題，等々。従来，このような問題に対しても，強引に，自然科学の流儀で取り組んできました。あるいは，科学（自然科学）の外の問題，つまり，看護婦の人格

的持ち味の問題とか，経験と勘によってしか解決できない問題としてみなされてきました。

私たちが直面する多くの問題は，大なり小なり，自然科学と人間科学の両方を必要としています。とりわけ，看護職は，医学や医療技術のような自然科学の専門家であると同時に，患者や患者の家族への対応，スタッフ間の協力などについては，人間科学の専門家であることが求められています。看護職は，自然科学と人間科学という二足のわらじの専門家であることが求められているわけです。

また，もう少し広い視野に立って，環境問題や生命倫理の問題を考えると，自然科学の急速な進歩が，もはや，野放しにはしておけないレベルに達していることに気づきます。例えば，技術的に可能だからといって，どのような生命操作でも許されるわけではないでしょう。また，技術的には造ることができる物質であっても，あえて造らない方がよい物質もあるでしょう。このように，自然科学を人間がコントロールしなければなりません。それは，自然科学のコントロールという共同的実践の問題です。自然科学の健全な進歩のためにも，人間科学が必要です。

本書を通じて，ぜひ，人間科学という，もう一つの知の世界に触れていただきたいと思います。そして，皆さん方の知の世界を，より豊かにしてください。

第２章

大きなハードル
「個人＝心を内蔵した肉体」という常識

本章のポイント

人間科学の旅に出発する前に，私たちがずっぽりつかっている常識から自由になっておく必要があります。それは，「個人，イコール，心を内蔵した肉体」という常識です。この常識は，知る知らないとは無関係に存在する世界（外界）と心の世界（内界）を区別する常識と表裏一体の関係にあります。自然科学は，この常識の上に立って，内界とは無関係に存在する，外界の事実を発見してきました。したがって，自然科学とは異なるもう一つの科学，人間科学は，この常識とは異なる前提からスタートすることが必要です。

いよいよ人間科学を求める旅に出発しましょう。前章では，人間科学という，自然科学とは異なる目的地を定めました。本章では，人間科学への旅立ちに先立って，少々，旅じたくをしておきたいと思います。それは，私たちがずっぽりつかっている，一つの常識を再検討しておくという，旅じたくです。その常識とは，私たちが，人間，あるいは，「個人」について持っている常識です。この常識をとらえ直し，この常識の呪縛から自由になっておくことが，これからの人間科学への旅にとって非常に重要です。旅立ちの前に，少々，「常識くずし」をしておこうというわけです。

1．私たちの常識

「個人＝心を内蔵した肉体」という常識

個人とは何か——改めて考えてみましょう。個人とは，まずもって，個体としての肉体です。それは，皮膚という境界で，肉体以外の外部と画されています。でも，その肉体イコール個人ではありません。個人は，単なる肉体ではなく，さまざまなことを思ったり，考えたり，意識的に行動したりできる存在だと考えられています。つまり，個人とは，意識，精神，心を持っていると考えられているのです。以下，心という言葉で代表させて，話を進めましょう。

では，心は，どこにあると考えられているのでしょうか。すぐ思いつくのは，心は脳（あるいは，中枢神経系）にあり，という答えです。確かに，脳科学は，脳のメカニズムと心的機能の関係を解明しつつあります。自然科学の立場から見れば，脳のメカニズムと心的機能の間に，密接な関係があるのはまちがいありません。しかし，私たちが，心を問題にする日常の場面を思い出してみましょう——「あの人，どんな気持ちなんだろう」「あいつ，プッツン切れそうだな」などと思う場面です。その時，果たして，「あの人の脳の中に，どんな気持ちが宿っているのだろう」「あいつの脳が，プッツン切れそうだな」などと思うでしょうか。違います。私たちの日常場面に即して考える限り，心は脳の中にあり，ではないのです。

そうかといって，今度は，誰かが，「あなたの心は，ほら，ここにあるよ」

と，机の上を指し示したとしましょう。あるいは，その人のポケットを指し示したとしましょう。これは，笑ってしまいます。冗談にしか聞こえません。そんなことは，心について，私たちが持っている常識では考えられないことだからです。

心のあり場所について，私たちが，どのような常識を持っているかがしぼられてきました。それは，皮膚で画された肉体の中のどこか（somewhere）です。それ以上でも，それ以下でもありません。somewhere より突っ込んで，肉体のどの部位かと問われても，それは無理な話です。また，そうかと言って，皮膚の外にあると言われたのでは，笑ってしまうしかありません。心は，皮膚で画された肉体の内部のどこかにある，そして，この心を内蔵した肉体こそ，個人である――これが，私たちの素朴な常識です。

「内界と外界」を区別する常識

「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，今から述べる，もう一つの常識をも意味しています。心が，皮膚で画された肉体の内部のどこかにあるとすれば，それは，内なる世界，すなわち，内界と言ってもよいでしょう。私たちは，その内界で，「ああ，きれいな花だな」と感じたり，「このパソコンのどのキーをたたいたらいいのだろう」と考えたりします。

ということは，内界の外に，花やパソコンといった事物が存在する外界がある（と考えられている）ということです。外界に存在するのは，花やパソコンのような事物だけではありません。他人という人物も存在しています。その他人も，自分と同じく，心を内蔵した個人です。また，忘れてならないのは，あなたの肉体も，外界の重要な一部だということです。自分の手のひらを眺めながら，「汚れたな，洗わなくては」と思うことがあるはずです。私たちは，視覚のみならず，聴覚，触覚，味覚なども用いて外界を捉えます。「どうも，今日は，胃が重たい」と感じる時，あなたは，胃という外界（の一部）を捉えているのです。胃は，確かに肉体の内部にはあっても，心の場所（肉体の内部の somewhere）とは別の場所にあります。

このように，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，内界と外界の区別（という常識）と表裏一体です。そこから，認識とは，「外界を内界に捉える

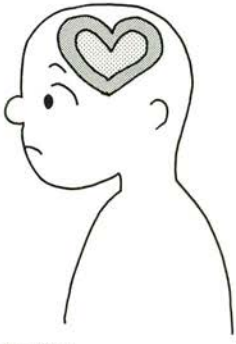
ことである」という常識が生まれます。

外界は，個人の内界に捉えられるか否かとは無関係に，存在していると考えられています。あなたが，今，気づいた足元の草（外界の一部）は，あなたが気づいていなかった1分前も，あるいは，1時間前，昨日も，そこに存在していた。その草を，今，あなたが内界に捉えた，つまり，認識した，とされるわけです。

もちろん，外界が，あるがままに，認識されるのではありません。個々人の内界の状態によっては，同じ刺激（外界）でも認識は違ってきます――でも，それは，主観が混入しているからだと言われます。極端な場合，真っ白な壁の上に，何かを見てしまう（認識してしまう）ことだってあります――でも，それは，幻覚だと言われます。

あくまでも，外界は，内界にどのように捉えられるかとは無関係に，本来の姿で存在していると考えられています。その本来の姿は，真実，あるいは，客観的事実とよばれています。真実が，そのとおりに認識されると，客観的な認識と言われ，真実とは異なって認識されると，主観的な認識と言われます。

2．常識への疑問



挿し絵2
「個人＝心を内蔵した肉体」という常識――本当にそうだろうか？

私たちが，ずっぽりつかっている常識，すなわち，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識について確認しました。しかし，その常識は，本当に当たり前のこととして認めてよいものなのでしょうか。本節では，そうではないということを，3つの角度から示すことにします。第1に，実は，私たちの素朴な体験が，この常識に反していることを指摘します。第2に，この常識に立つと，「自分と同様，他者も意識を持っていることがわかる」という体験が説明不可能になってしまうという矛盾を指摘します。第3に，この常識に立つと，2人が分かり合えるという現象が成立しなくな

ってしまうという矛盾を指摘します。

（1）「頭の中で」とは言うけれど

まず，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識が，そもそも，私たちの日常的な体験に合致していないことを，いくつかの具体例によって示してみましょう。暑い日に運動をして，喉がからからに渇いたとします。早く，水を飲みたい，水道の栓に手がかかりました。今や，栓をひねろうとする瞬間。まだ，水は出ていないのですが，なにせ，喉はからから，水が頭の中に浮かびます。そんな状況を考えてみます。確かに，「水が頭の中に浮かぶ」とは言うのですが，本当にそうでしょうか？実際は，そうではありません。たとえ，水が浮かぶ（見える）にしても，その水は，目の前にある水道の蛇口のところに見えるはずです。決して，頭の中，あるいは，自分の内界のどこかに見えるわけではありません。水は，内界ではなく，外界に見えるのです。

もう一つ例をあげましょう。先日の日曜日に登山をして，山頂から見た絶景。それを頭の中で思い出しているとします。晴れわたった空，遠くにキラキラ輝く湖も見えました。でも，「頭の中で思い出す」とは言うものの，その輝く湖は，頭の中，内界のどこかに見えるでしょうか？再び，そうではありません。おそらく，目の前に半透明のスクリーンが垂れていて，輝く湖は，そのスクリーンに映っているのではないでしょうか。そのスクリーンは半透明ですから，その向こうの壁や窓は，透けて見えます。だから，現実に目の前にある壁や窓と，輝く湖の画像が混同されることはありません。しかし，輝く湖は，決して，内界のどこかに見えるのではなく，外界（半透明のスクリーン上）に見えるのです。この例は，過去の日曜日の思い出でしたが，同じことは，未来のことを想像する場合にも当てはまります。過去のイメージも，未来のイメージも，外界に見えるのです。

以上の２つの例から，私たちが，「頭の中，ないし，内界のどこかに，見える，思い浮かべる」と言語的に表現しているイメージであっても，素朴な体験に忠実に従えば，内ではなく，外にあることがわかります。

（2）他者も意識をもっていることの理解

「女心と秋の空」と言われます。女性の心は，秋の天候のように移り気だという，男性のため息です。昨日まで自分に好意を持っていてくれたのに，だれか他に好きな人ができたのか，もう自分のことなど上の空。一体，彼女は何を考えているのか，だれのことを思っているのか。同じことは，女性に限らず，大なり小なり，他人一般について当てはまります。他人は，何を考えているのかわからない。

でも，他人の考えていること，すなわち，他人の意識は，本当に，皆目わからないのでしょうか。そうではありません。彼女は，だれか好きな男性のことを考えている。そこまでは，わかります。そして，残念ながら，その男性が自分でないこともわかります。しかし，同時に，だれのことをどのように思っているかは，わかりません。つまり，ある部分はわかるけれども，ある部分はわからない——これが，他人の意識を理解するという，私たちの素朴な経験ではないでしょうか。あるいは，こんな場合もあるでしょう。他人が何かを考えていることはわかる。しかし，何を考えているかは，全く見当もつかないという場合です。しかし，この場合も，ある部分（何かを考えている，何かを意識している）ことはわかっているわけです。繰り返せば，他人の意識とは，皆目わからないものではなく，部分的にわかり，部分的にわからないものなのです。

「個人＝心を内蔵した肉体」という個人観は，この他者意識の理解をめぐる素朴な経験に矛盾します。なぜならば，心（意識）が，皮膚で覆われた肉体の中に内蔵されているのならば，基本的に，他人の心（意識）は「全くわからない」ということになるからです。これは，他者の意識は，「部分的にはわかる」という，私たちの素朴な体験に反します。第一，もし，他人の心が全くわからないとすれば，「他人も，自分と同じように，心をもっていること」には，ついぞ気づけないはずです。しかし，私たちは，他人が何を考えているかはわからないにしても，他人にも心があることを素朴に信じています。

（3）分かり合えるということ

以上，「個人＝心を内蔵した肉体」という私たちの常識が，実は，私たちの素朴な経験——イメージを浮かべるときの素朴な経験や，他者の意識を理解す

るときの素朴な経験――に合致していないことを述べました。どうも，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，私たちの素朴な経験を，素直に反映したものではなさそうです。

さらに，もうひとつだけ指摘しておきましょう。それは，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提に立つと，私たちが，あることを分かり合えるという，これまた素朴な日常的経験がありえないことになってしまう，ということです。

「分かり合う」とは，どういうことでしょうか。AさんとBさんが，あること（例えば，X）について分かり合う場合を考えてみましょう。ここで，AさんがXを知っていることを，A知（X）という記号で書くことにします。同様に，BさんがXを知っていることを，B知（X）と書きます。

では，AさんとBさんが，Xについて分かり合っている状況は，単に，A知（X）とB知（X）が同時に成立している状況と言えるでしょうか。そうではありません。それだけでは，「分かり合う」と言うには不十分です。2人がXについて分かり合っている状況では，Aさんは，単にXを知っているのみならず，「BさんがXを知っていること」をも知っていなければなりません――つまり，A知（X）のみならず，A知（B知（X））も成立していなければなりません。同じことは，Bさんについても言えます。Bさんも，単に，Xを知っているのみならず，「AさんがXを知っていること」をも知っていなければなりません――つまり，B知（X）のみならず，B知（A知（X））も成立していなければなりません。

まだ，不十分です。2人がXについて分かり合っている状況では，Aさんは，「自分（Aさん）がXを知っていることを，Bさんが知っていること」をも知っていなければなりません――つまり，A知（B知（A知（X）））も成立していなければなりません。同様に，Bさんは，「自分（Bさん）がXを知っていることを，Aさんが知っていること」をも知っていなければなりません――つまり，B知（A知（B知（X）））も成立していなければなりません。

すでに，お察しのとおり，まだまだ不十分です。結局，同じ論理を続けていくと，2人が分かり合っている状況というのは，次のような無限の条件が満たされている状況ということになります。

A知（X）	B知（X）
A知（B知（X））	B知（A知（X））
A知（B知（A知（X）））	B知（A知（B知（X）））
・	・
・	・
・	・
・	・

つまり，2人が分かり合えるということは，無限の「知ること」を必要とするわけです。もし，分かり合えるために，無限の「知ること」が必要とされるならば，無限の時間が必要になる，すなわち，永遠に分かり合えることはないということになってしまいます。

しかし，どうでしょうか。私たちは，有限の時間の中で，さまざまなことを分かり合うことができます。ということは，今までの話の前提，つまり，「知ること」についての前提に問題があるということです。今までの話は，AがXを「知ること」とは，Xを，Aの肉体に内蔵された心で捉えることであるという前提に立っています。同様に，BがXを知っていることをAが「知ること」とは，BがXを知っていることを，Aの肉体に内蔵された心で捉えることであると考えています。そして，この前提を貫く限り，2人は永遠に分かり合えないという結論にならざるをえません。

以上，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，私たちがイメージを浮かべる時の素朴な経験に合致していないこと，そのような常識に立つ限り，私たちが，他者も意識を持っていることがわかるという経験が説明不可能になってしまうこと，また，私たちが分かり合えるという，これまた日常の素朴な経験も否定する結果になることを説明してきました。それにもかかわらず，「個人＝心を内蔵した肉体」という観念は，私たちの常識，さらに言えば，さまざまな常識のそのまた根底にある「常識中の常識」になっています。

では，「個人＝心を内蔵した肉体」という観念は，私たちの素朴な経験と合致しないにもかかわらず，なぜ，私たちの素朴な常識になってしまったのでしょうか。残念ながら，この疑問に，今すぐ答えることはできません。この疑問

に答えるには，まず，次章（第3章）から第6章までをお読みいただき，人間科学としてのグループ・ダイナミックスを理解していただかねばなりません。その上で，本書の最終章（第7章）で，この疑問に答えたいと思います。

3．常識を越えて

これまで述べましたように，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，決して，私たちの素朴な日常経験に裏づけられたものではありません。つまり，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，何らかの経緯を経て，多くの人々があたりまえと思うようになった了解事項なのです。その経緯については，最終章で説明しますが，現在，「個人＝心を内蔵した肉体」という了解事項が，日常生活でさまざまなことを考えるときの「前提」になっていることは事実です。

しかも，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提は，「内界と外界を区別する」という前提と表裏一体でした。そして，この「内界と外界を区別する」という前提こそ，自然科学の前提でもあるのです。なぜならば，内界と外界を区別し，内界にどう映るかとは無関係に存在する外界の本来の姿を解明するのが自然科学だからです。第1章で，自然科学の知識は，人が知ろうと知るまいと存在する事実についての知識だと述べましたが，人が知ろうと知るまいと存在する事実とは，まさに，内界にどう映るかとは無関係に存在する外界の事実ということです。このような外界（の一部）を研究対象として，研究対象と研究者の間に一線を画し，研究対象を一線の向こう側に据え，一線のこちら側から主観（内界の動き）をまじえることなく，クールに研究をするのが自然科学の流儀でした。

一方，第1章で述べましたように，人間科学は，研究対象と研究者の間に一線など引けないということ，さらには，研究対象（当事者）と研究者は共同的な実践を行なっているということを，基本的な前提とする科学です。ということは，人間科学は，自然科学のような「内界と外界を区別する」という前提は採用しないということですし，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提も採用

しないということです。

現前・身体・事物

では，人間科学は，どのような前提に立つのでしょうか。ここで，人間科学の前提を述べるために必要となる3つの用語を説明しておきたいと思います。というのも，私たちが日頃使用している言葉が，すでに，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識，あるいは，「内界と外界を区別する」という常識と分かちがたく結びついてしまっているからです。例えば，「花を見る」と言えば，暗黙のうちに，外界にある花を内界に捉えることを意味してしまいます。そこで，どうしても，日頃は使用しない用語を使わざるをえないのです。今から3つの用語を説明するのも，そのためです。

まず，「現前する」という用語を説明します——きれいな花が現前する，現前するきれいな花というように使います。私たちの周りには，ある世界が広がっています。世界と言っても，別に，身構える必要はありません。さしあたって，世界とは，風景のことだと考えて下さい。私たちの周りは，決して虚無ではありません。見渡せば，向こうに窓が見えますし，その向こうには木々が見えます。今度は，ずっと手元を見れば，ボールペンや本があったり，もっと手元を見れば，自分の手のひらが見えます。風景というのは，そんな取りたてて言うまでもない，ただの風景のことです。外を通る自動車の音も，いれたてのコーヒーの香りも，頬をなでる風も風景の一部です。また，前に，喉がからからに渇いて，水道の栓をひねろうとする瞬間，水のイメージが水道の蛇口のところに見える（決して，頭の中に見えるのではなく）という例を出しました。その場合には，蛇口のところに見える水（のイメージ）も，風景の一部です。

そんな風景，世界が，私たちの周りに広がっています。それを，そんな風景，世界が現前していると言うことにします。また，その風景，世界の中には，窓，木々，自動車の音，コーヒーの香りなどが含まれています。それを，窓，木々，自動車の音，コーヒーの香りなどが現前していると言うことにします。注意していただきたいのは，「現前する」という言葉には，外界に，窓，木々，自動車の音，コーヒーの香りなどが実在していて，それらを，私たちが内界に捉えているという意味あいは，いっさい含まれていないということです。

では，もっと詳しく見ていきましょう。テーブルの片方にAさん，もう片方にBさんが座っているとします。テーブルの上にはコーヒーカップやきれいな花が置いてあります。でも，Aさんに現前している世界とBさんに現前している世界は同じではありません。Aさんには，コーヒーカップの取っ手が現前していますが，Bさんには現前していません（日常の言葉を使うならば，Aさんには取っ手が見えるが，Bさんには見えない，ということです）。同様に，きれいな花のAさんに対する現前のしかたは，Bさんに対する現前のしかたとは異なります（日常の言葉で言うならば，きれいな花の見え方は，AさんとBさんで異なる，ということです）。このように考えていくと，Aさんに現前する世界とまったく同じ世界が，他の人にも現前するということはありえないことがわかります。座る場所が違えば，また，時間が違えば，どんなにわずかでも，必ず，現前する世界は異なります。言いかえれば，Aさんに現前する世界は，Aさんに固有の世界だということです。

次に，2番目の用語として，「身体」という用語を説明します。身体とは，固有の世界が現前しているもののことです。Aさんにも，Bさんにも，固有の世界が現前していますから，AさんもBさんも身体です。そう言えば，部屋のすみっこに，Aさんがかわいがっている猫がいます。その猫には，AさんともBさんとも異なる世界が現前しているでしょう。したがって，その猫も身体です。

最後に，3番目の用語として，「事物」について説明します。事物とは，固有の世界が現前しないもののことです。コーヒーカップに対して，何か固有の世界が現前しているとは考えられません。また，テーブルに対しても，固有の世界が現前しているとは考えられません。したがって，コーヒーカップもテーブルも事物です。

私たちに現前する世界は，大別すると，身体と事物で構成されています。身体と事物の区別は，一見，生物と非生物の区別と同じようですが，そうではありません。何が身体となり，何が事物となるかは，身体と事物をひっくるめた全体――これを集合体とよびます――の状態によって変わります。例えば，小さな子供と，その子供が自分の兄弟のようにかわいがっているぬいぐるみの集合体を想像して下さい。そのぬいぐるみが傷つけられた日には，子供は自分の

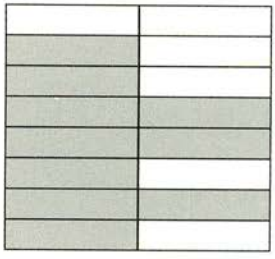
体を傷つけられたような痛みを感じるでしょう。そのような集合体では，子供のみならず，ぬいぐるみも身体なのです。

人間科学の前提

さて，「現前する」，「身体」，「事物」という3つの用語を説明しましたので，話を一歩先に進めましょう。私たちに現前する身体や事物は，単に「何か」ではありません。必ず，「意味」をもっています。ある身体は，単に「何か」ではなく，「Aさん」という意味をもっています——その身体は，「Aさんとしての何か」です。また，部屋のすみっこにいる身体も，単に「何か」ではなく，「猫」という意味をもっています——その身体は，「猫としての何か」です。同様に，目の前の事物も，単に「何か」ではなく，「コーヒーカップ」という意味をもつ何かですし，あるいは，「テーブル」という意味をもつ何かです——「コーヒーカップとしての何か」，あるいは，「テーブルとしての何か」です。

私たちに現前する身体や事物は，すべて，意味をもっています。テーブルの上の小さなゴミだって，「どこかに飛んでいっても，どうでもよいゴミ」という意味をもっています——「どこかに飛んでいっても，どうでもよいゴミとしての何か」です。

現前するすべての身体や事物が意味をもっているということは，意味をもたない身体や事物は，そもそも現前しないということです。意味をもたないものは，たとえ網膜に映ったとしても，現前しないのです。一例をあげましょう。あなたの部屋に，図のような本棚が並んでいるとします。その本棚をじっくり見て下さい。さて，黒くぬった奇妙な多角形は現前していたでしょうか（見えていたでしょうか）。おそらく，現前していなかったでしょう。それに対して，本棚の1段分とか2段分，あるいは，本棚1個の全体は，現前していたにちがいありません。どうしてでしょうか。それは，本棚の1段分とか2段分，あるいは，本棚1個の全体は，意味をもっているからです。一方，あんな奇妙な多角形は意味をもちません。なぜ，本棚の1段分とか



本棚の一段，二段は現前するが，こんな奇妙な多角形は現前しない。

2段分，あるいは，本棚1個の全体が意味をもっているかと言えば，過去に，「これだけの本，本棚一段に収まるかな」，「本棚一個の本を全部運ぶのに，ダンボール何箱必要だろう」などと考えた経験があるからです。しかし，あのような奇妙な多角形について，何かを考えた経験などありません。だから，あのような多角形は意味をもたず，したがって，現前しないのです。

このように，何かが現前するには，それが単なる何かではなく，何らかの意味をもっていることが必須条件です。詳しい話は第5章に譲りますが，意味は，必ず，集合体（身体と事物の集まり）の中で形成されます。例えば，コーヒーカップという意味は，コーヒーカップのような事物を，コーヒーカップとして，当たり前に使用している集合体があるから形成されたのです。その集合体は，コーヒーカップをコーヒーカップとして使用する，非常に多数の身体と，非常に多数の事物（コーヒーカップ）で構成される集合体です。おおざっぱに言って，コーヒーカップでコーヒーを飲む世界中の人々が含まれる，巨大な集合体です。あなたにとって，当たり前にコーヒーカップが現前するとしたら，それは，あなたも，その巨大な集合体の一員だからです。

以上，①世界（身体と事物）が現前するには，それが意味をもっていることが必須条件である，②意味は，必ず，集合体の中で形成される，という2点を述べました。これら2点から，次のことが導かれます。すなわち，私たちに現前するものは，すべて，集合体によって現前させられたものである，ということです。つまり，私たちに何が現前するかは，私たちが，どのような集合体に属しているかによって決定されるわけです。

「私たちにさまざまなものが現前するのは，ひとえに，集合体のなせるわざである」――これこそ人間科学の前提です。決して，外界があって，それを内界に捉えるから，外界のさまざまなものが現前するのではありません――それは，自然科学の前提です。人間科学が，私たちにさまざまなものが現前するのは，ひとえに，集合体のなせるわざであるという前提に立つのであれば，集合体について理解を深めておくことは，極めて重要です。この集合体についての人間科学こそ，グループ・ダイナミックスです。

くどいかもしれませんが，ここで，もう一度，私たちの旅がどこに向かっての旅であるかを確認しておきましょう。私たちは，「個人＝心を内蔵した肉体」

という常識，「内界と外界を区別する」常識と訣別し，そのような常識とは違う前提に立つ科学——人間科学——を求める旅に出発しようとしています。私たちは，「内界と外界を区別する」常識と訣別したのですから，「外界があって，それを内界（＝肉体に内蔵された心）にとらえたから，外界が見える」などと考えてはいけません。したがって，これからの旅では，「個人の肉体に内蔵された心」という常識に引き戻されないよう，よくよく注意しなければなりません。しかし，何といっても，「個人の肉体に内蔵された心」という常識，「内界と外界を区別する」常識は，日常生活の中で，私たちがずっぽりつかっている常識です。その常識から脱却しようというのですから，これは並たいていのことではありません。

したがって，今からの旅で耳にする話は，奇妙きてれつな話であることを覚悟しておいた方がよいでしょう。なぜならば，これからの話は，常識はずれな話だからです。常識から脱却するための話が，常識はずれになるのは当然です。自分の中でむくむくと頭をもたげてくる常識を，ぐっと押し戻して，あえて，奇妙きてれつな話につきあうこと，これが，今からの旅を楽しむ大事なコツです。今からの旅で，最大の敵は，「おとなの常識」です。

さあ，これで，旅じたくも完了。いよいよ，次章から，集合体についての人間科学——グループ・ダイナミックス——に向かって旅立ちです。

第３章

人間科学としてのグループ・ダイナミックス
「個人の心」から「集合性」へ

本章のポイント

グループ・ダイナミックスという学問分野の基本的な考え方について説明します。もちろん，人間科学としてのグループ・ダイナミックスです。グループ・ダイナミックスは，さまざまな人間の集合体を，環境も含めて，一つの全体としてとらえ，その動きを研究します。さらに，集合体の中の人間（身体）に現前する世界が，集合体によってどのようにつくられていくのかを研究します。

本章では，グループ・ダイナミックスの全体像を，大づかみに説明します。集合体を一つの全体としてとらえたときの全体的性質を集合性とよぶことにします。集合性は，見える側面（集合的行動）と見えない側面（コミュニケーション）という２面からとらえることができます。集合的行動については第４章で，コミュニケーションについては第５章で詳しく説明します。

1．集　合　体

グループ・ダイナミックスの研究対象——集合体の動き

グループ・ダイナミックスという学問分野について説明しましょう。グループ・ダイナミックスは，さまざまな人間のグループを研究の対象にします。例えば，

・患者と看護婦，夫婦，恋人同士といった2人グループ

・一緒に仕事をしている数人，あるいは，一緒にスポーツを楽しんでいる数人のグループ

・一つの企業に所属する何百，何千，何万という人のグループ（普通，組織と呼ばれるグループ）

・野球場の観客席を埋め尽くす数万人のグループ（普通，観衆，群集とよばれるグループ）

・同じコミュニティに居住する何千，何万という人々のグループ

・日本列島の上に住む1億3千万の人々のグループ（国民とよばれるグループ）

等は，すべて，グループ・ダイナミックスが研究対象とするグループの例です。

これらの例からおわかりのように，グループ・ダイナミックスのグループという言葉を，「集団」，あるいは，そのまま「グループ」と訳したのでは，少々，意味合いが狭すぎます。集団やグループと言えば，どうしても，こぢんまりした集まりだけを思い浮かべてしまうからです。そこで，耳慣れない言葉だとは思いますが，あえて，「集合体」という訳語を使うことにします。つまり，グループ・ダイナミックスは，大小さまざまな集合体を研究対象にするわけです。最近では，地球規模の環境問題や，先進国と発展途上国の間の利害対立（南北問題）が，大きくクローズアップされるようになりました。今や，宇宙船地球号の乗組員数十億人という集合体を，グループ・ダイナミックスの研究対象にしていくことも，時代の要請と言えるでしょう。

次に，グループ・ダイナミックスの「ダイナミックス」という言葉に移りま

しょう。ダイナミックスとは，動き，変化についての学問，すなわち，「動学」を意味します。つまり，グループ・ダイナミックスは，さまざまな集合体を，基本的に，動いていくもの，変化していくものと捉えます。そして，集合体が，何によって，また，どのように変化していくのかを研究するわけです。もちろん，集合体によっては，百年一日のごとく，変化しない集合体もあるでしょう。しかし，変化しないということは，変化のスピードがゼロという特殊ケースに過ぎません。集合体は変化するという動学の立場をとっておけば，変化しない集合体も，決して，研究対象から除外されたりはしません。

これで，グループ・ダイナミックスの訳語，「集合体動学」のできあがりです。グループ・ダイナミックスとは，集合体の変化についての学問，すなわち，集合体の動学なのです。

こんな集合体も

ここまでの集合体の例は，たった2人という小さな集合体から，宇宙船地球号の全乗組員という巨大な集合体まで，集合体のサイズ（大きさ）こそさまざまでしたが，どの集合体にしても，自分がその集合体に属しているかどうかを，はっきり言えるような集合体ばかりでした。言いかえれば，大小のちがいはあっても，集合体に属する人たちをイメージしやすい集合体ばかりでした。しかし，グループ・ダイナミックスが対象にする集合体は，そのような集合体に限定されません。普通は，集団，組織，社会とは呼ばないよう集合体も研究対象に含まれます。

例をあげましょう。日本各地に，いろいろな方言があります。方言の中には，共通語から大体の意味を推測できるものもありますが，その方言を知らない人には，まるでチンプンカンプンという方言も少なくありません。当然のことながら，どんな方言でも，その方言で話したり，書いたりする人々がいるからこそ，方言が存在しているわけです。方言を使う人がいないのに，方言だけが存在するなどということはありえない話です。つまり，方言を使う集合体があるからこそ，方言が存在するのです。その集合体の人々の多くは，ある一定の地域に住んでいる人々ですが，今は遠くの地にすみ，たまに，ふるさとの身内や知人に電話するときだけ方言を使う人も，その集合体に含まれます。

方言に限らず，一つの言葉を当たり前に使用している人々は，一つの集合体を構成していると考えることができます。看護の世界にも，さまざまな専門用語が使われています。その中には，看護職の人々に広く使用されている専門用語もあるでしょうし，看護職の中の一部の人たちにだけ使用されている専門用語もあるでしょう。一つ一つの専門用語は，それぞれの専門用語を使用する集合体があるからこそ，専門用語として存在しています。

専門用語と同じく，私たちが日常会話の中で使用している普通の言葉も，その言葉を使用する集合体があるからこそ，言葉として存在しているのです。「パソコン」という言葉は，直接，間接にパソコンを使用している集合体があるからこそ，一つの言葉として存在します。その集合体は，「パソコン」集合体とでも呼べる集合体で，その集合体は，非常に多くの人々（身体）と非常に多くのパソコン（事物）で構成されています。同じことは，私たちが日常使用している多くの言葉の一つ一つについて当てはまります。小さい乳幼児は，日々，新しい言葉を使えるようになっていきます。それは，新しい言葉を覚えるたびに，新しい集合体の一員になっていくことを意味しています。

以上，言葉に対応した集合体について述べましたが，必ずしも言葉に対応しない集合体もあります。最近，駅や繁華街で，階段や通路上に座り込んで時間を過ごしている若い人たちを見かけることがあります。これを，ファッショナブルと見るか，場所をわきまえない行為と見るかは別にして，以前は，ほとんど見かけなかった光景，少なくとも，日本では，ほとんど見られなかった光景です。今でも，私の見る限り，中年以上の人で座り込んでいる人は，ほとんどいないようです。これは，日本に，新しい集合体が登場したことを示しています。この集合体は，大きな集合体です。この集合体の人々は，ほとんど若い人たちのようですが，そうかと言って，若い人のすべてが，この集合体に属しているわけでもありません。もちろん，この集合体の人々は，お互い顔見知りではありませんし，そのような集合体の一員であると思っているわけでもありません。しかし，今では結構大きなその集合体も，最初は，小さな集合体だったはずです。次第にまねる人たちが増えるにしたがって，大きな「ジベタリアン」集合体になったのです。

もう一つだけ例をあげましょう。最近では，「ケイタイ」と言えば，携帯電

話のことです。その急速な普及には，ただただ驚くほかありません。今や，ビジネスマンはもちろん，主婦，学生，子供にいたるまで，多くの人がケイタイを持ち歩いています。電車にのって，あの電子音を耳にしないほうが少ないくらいです。この現象も，新しい集合体（ケイタイ集合体）が出現したことを示しています。前の「ジベタリアン」集合体と同様，「ケイタイ」集合体も大きな集合体です。この集合体の人々は，お互い顔見知りではありませんし，そのような集合体の一員であると思っているわけでもありません。しかし，非常に多くの人々（身体）と非常に多くの携帯電話（事物）から構成される集合体なのです。

けんかする2人も集合体

上に述べましたように，グループ・ダイナミックスは，集合体に属する人たちをイメージできないくらい大きな集合体や，集合体に属している人たちに直接の面識がないような集合体も，研究対象にします。さらに，グループ・ダイナミックスは，けんかをしている複数の人たち，対立している複数の人たちも，一つの集合体として取り扱います。いかに殴り合いのけんかをしている2人であっても，その2人を，ひとまとめにして全体的に観察すると，何らかの特徴を観察することができます。例えば，白熱したボクシングさながら，交互にパンチを繰り出している場合もあるでしょう。あるいは，どちらかが一方的にうちのめしている場合もあるでしょう。いずれの場合も，2人のうちの1人だけを見ていたのでは観察できない動きです。2人を全体的に観察してはじめて，交互にパンチを繰り出しているのか，はたまた，どちらかが一方的にうちのめしているのかがわかります。

けんかをしている2人も集合体

同様に，グループ・ダイナミックスは，戦っている複数の集団や対立関係にある複数の集団をひとまとめにして，一つの集合体として取り扱います。もちろん，個々の集団も一つの集合体です。Aという集団とBとい

う集団が対立関係にあるとき，集団A，集団B，AとBをひっくるめた集合体という3つの集合体が，それぞれ研究対象になります。集団Aと集団Bの対立の構図は，AとBをひっくるめた集合体の特徴として分析していくことができるのです。

2．集合性――「かや」に例えて

グループ・ダイナミックスの基本

以上に述べましたように，グループ・ダイナミックスが取り扱う集合体は，実に，多種多様です。その中には，小ぢんまりした集団もあれば，巨大な集合体もあります。さらに，私たちが，通常，集団，組織，社会といった言葉からは連想しないような集合体も含まれます。では，このような多種多様な集合体を，グループ・ダイナミックスは，どのような視点から研究するのでしょうか。

いかなる集合体も，集合体を，その環境も含めて，一つの全体として見るならば，必ず，何らかの全体的性質を見てとることができます。この集合体の全体的性質を，「集合性」という言葉で呼ぶことにします。例えば，ある夫婦を，一つの（2人）集合体として見れば，その夫婦2人が醸し出している性質（集合性）を見てとることができます。また，同じ病棟に勤務している看護婦10名の集合体であれば，他の病棟とはどこか違った，その病棟独特の性質（集合性）を感じ取ることができるものです。同じことは，ずっと規模の大きい集合体についても言うことができます。日本列島の上に生活している人々の集合体は，アメリカ合衆国に生活している人々の集合体とは違った，独特の全体的性質（集合性）をもっています。

集合体に見てとることができる集合性は，「かや」に例えることができます。そう，一昔前まで，夏になると，蚊に刺されぬよう部屋につるしていた，あの「かや（蚊帳）」です。最近では，田舎でも，あまり使われなくなっているようですが，なつかしい夏の風物詩には欠かせません。また，「かや」など見たこともないという若い人でも，いつもの仲間から，自分だけ仲間はずれにされると，「自分だけ蚊帳（かや）の外に置かれた」と不満を言います。若い人を

含めて，「かや」という言葉は，日本人一般のボキャブラリー（語彙）に含まれているようです。

いかなる集合体も，必ず，何らかの「かや」（集合性）に包まれています。そして，集合体の人たち（身体たち）に何らかの世界が現前するのは，「かや」に包まれているためです。もし，生まれてこのかた，いかなる「かや」にも包まれていない人がいたとしたら，その人には何も現前しないでしょう。その人の世界は，文字どおりの無です――日常の表現を使うならば，たとえ，肉体的，神経的機能は正常だとしても，その人には何も見えない，何も聞こえない，何もにおえない，何も触って感じない，のです。もし，今，あなたに何らかの世界（風景）が現前しており，その世界の中にボールペンが含まれているとしたら，そういうものをボールペンとみなし，ボールペンとして使用する人々（非常に多くの人々）を包む「かや」があって，あなたも，その「かや」に包まれているからです。その「ボールペンかや」とでも呼べる「かや」に，あなたの身体が包まれているからこそ，目の前のものが，当たり前にボールペンに見えるのです（目の前のものが，ボールペンとして現前するのです）。

集合体が違えば，あるものが全く同じ意味を持つことは，まずあり得ません。ここが，外国語を翻訳するときの難しさにもなります。辞書を見れば，family は家族ですが，family＝家族かと言うと，一応はそう言えても，それだけでは割りきれない部分が，どうしても残ってしまいます。嫁・姑の問題，見合い結婚の可能性，等々は，family には含まれていません。その理由は，family という言葉（の意味）を生み出した人々の集合体には，嫁・姑のいざこざや見合い結婚の経験が含まれていなかったからです。

同じことは，もっと身近な集合体についても当てはまります。例えば，どこの家庭にもあるテレビ。もちろん，テレビの辞書的な意味については，どの家庭でも，ほぼ共通だと思いますが，あなたの家の居間にあるテレビと隣の家の居間にあるテレビでは，プラスアルファの異なる意味もあるはずです。例えば，食事のときには必ず消さなければならないテレビかもしれませんし，食事をしながら見るテレビかもしれません。あるいは，映りが悪くなったので，明日にでも買い換えようとしているテレビかもしれませんし，まだまだ半年は我慢しようというテレビかもしれません。このように，同じ家族という集合体でも，

「かや」がちがえば，意味あいを異にするテレビが現前します。

私たちが包まれている「かや」が世界を現前させるということは，次のように言いかえてもよいでしょう——私たちが，何かを認識（見たり，聞いたり，におったり）するとき，実は，「かや」に認識させられている；私たちが，何かが欲しい，何かをしたいと感じるとき，実は，「かや」の欲望に突き動かされている；私たちが，何かをじっくり考えているとき，実は，「かや」の思考に動かされている；私たちが，何かを行動に移すとき，実は，「かや」の行動の一部を演じている。このように，あえて，認識や欲望や行動の「主体」という言葉を使うならば，決して，心を内蔵した個人が主体ではありません。「かや」こそ，主体です。

皆さんの中には，きっと，反発を感じる方がいらっしゃることでしょう——「いくら何でも，それは言い過ぎだ。もし，そうだとしたら，皆，自分が属している集団や，周りの人々に流されているだけ，ということになるじゃないか。もちろん，人間，周りに流される場合もあるけれど，周りの動きとは別に，自分独自で考え，判断する場合もある。それに，集合体なんかとは無関係に，自分一人で，もの思いにふけったり，考えこんだり，何かをしたくなったりすることもあるじゃないか」と。

このような反発は，言いかえれば，人間の主体性——主体的な判断——は，どこにいったのだ，という反発です。実際，私たちは，主体的に判断した経験をもっていますし，主体的に判断することが重要である場合があることも経験しています。しかし，そのときに，注意していただきたいのは，主体的に判断するとは，周りの人に流されず，「肉体に内蔵された自分自身の心（あるいは，頭）」で判断することだと考えられているということです。

思い出して下さい——私たちは，人間科学の旅に出たことを。人間科学は，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提，「内界と外界を区別する」という前提とは異なる前提に立つ，もう一つの科学でした。もし，主体性を，肉体に内蔵された心による判断と考えるならば，早々と，人間科学の旅をあきらめてしまうことになってしまいます。

では，人間科学では，主体性を，どう考えたらよいのでしょうか。まず，重要なことは，「主体的な判断」というのは，自分や他者のふるまいが現前する

ときの，現前のしかたの一つだということです。自分や他者のふるまいが，どのように現前するかは，実にさまざまです。「誰かに強制された判断」，「全く偶然による判断」，「不注意による判断」等々，さまざまな現前のしかたがあります。「主体的な判断」は，そのようなさまざまな現前のしかたの一つです。

そうであれば，「私たちに，さまざまなものが現前するのは，ひとえに，集合体のなせるわざである」という人間科学の前提は，「主体的な判断」の現前にも当てはまるはずです。つまり，あなた（という身体）に「主体的な判断」が現前する（普通の言葉で言えば，あなたが，自分は主体的に判断していると思う）のは，ひとえに，あなた（という身体）が属する集合体のなせるわざ，なのです。

もちろん，集合体のなせるわざと言っても，たった一つや二つの集合体のなせるわざではありません。あなたの身体は，オギャーと生まれて以来，無数と言っていいくらい多くの集合体に属しています。言いかえれば，あなたの身体は，多くの集合性（かや）に包まれているのです。そして，身体を包む集合性（かや）が，ある条件を満たすとき，「主体性」が現前します。

では，どのような集合性（かや）に包まれれば主体性が現前するのか――残念ながら，今すぐ，この質問に答えるのは無理な話です。この質問に答えるには，まずもって，次章（第4章）から第6章までをお読みいただき，集合性について理解していただかねばなりません。その上で，最終章（第7章）で，この質問に答えたいと思います。

ここで，重要なことを一つだけ指摘しておきましょう。主体性は，人間科学（あるいは，人間科学としてのグループ・ダイナミックス）にとって，「解くべき問題」だということです。言いかえれば，人間科学にとって，主体性は，最初から前提にされるのではなく，他の前提からスタートして，考察を重ねることによって「解いていく問題」だということです。実際，私たちは，第4―6章を勉強し，その後に，主体性の問題を解こうとしています。

つまり，主体性は，人間科学にとっては考察の「前提」ではなく，考察によって解くべき「問題」なのです。一方，従来の心理学は，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提に立っています。したがって，「肉体に内蔵された心に宿る主体性」も，最初から前提にされてしまいます――「肉体に内蔵された心に

宿る主体性」を前提とした上で，せいぜい，どういうときに，その主体性が強くなるか，あるいは，弱くなるかが問題になる程度です。

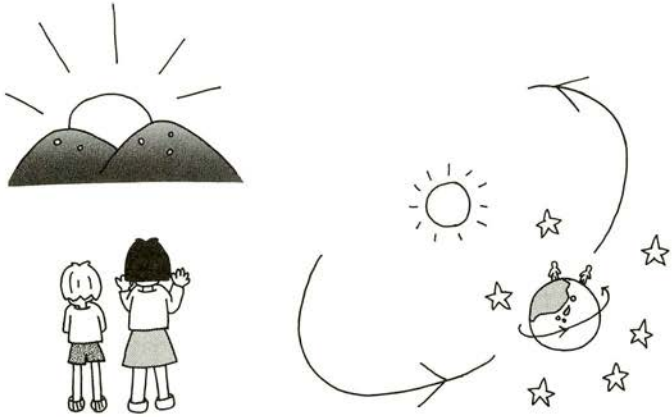
このように，人間科学と従来の心理学では，問題の立て方そのものが異なることに注意してください。人間科学は，「集合性（かや）こそ主体」という前提に立ち，どのようにして，「個人＝心を内蔵した肉体」という観念が常識になったのか，また，その肉体に内蔵された心に，どのようにして主体性が宿ると信じられるようになったのかを「解いていきます」。一方，従来の心理学は，「個人＝心を内蔵した肉体」，あるいは，「肉体に内蔵された心に宿る主体性」を，最初から前提として認めてしまいます。ある事柄を考察の前提として認めてしまうということは，その前提そのものが，なぜ成り立つかについては一切触れないということです。従来の「心」理学が，心の科学であることを標榜しながらも，心についてまともな知識を生み出せなかった理由も，実は，ここにあるのです。

天動説と地動説のたとえ

コペルニクスやガリレオが地動説を唱える以前は，天動説が信じられていました。現在では，だれでも，小学校の理科の時間に，地球が自転しながら，太陽の周りを回っているのだと，地動説を習っています。天文学的に正しいのは，地動説です。

しかし，私たちの日常生活は，圧倒的に天動説です。地面は止まっており，動いているのは太陽の方です——朝，太陽は東から昇ってきますし，夕方には，西に降りていきます。太陽が昇ってくるからこそ，ご来光を拝む気にもなりますし，太陽が沈んでいくからこそ，日没の美しさにひたることもできるのです。自分が立っている地面の方が動いているのだなどと考えた日には，興ざめしてしまうのが落ちです。つまり，日常生活については，天動説オンリーで十分なのです。

でも，天文学者までが，天動説オンリーでは困ります。それでは，日食や月食も予測できませんし，流星ショーの予告もできません。やはり，天文学者は，地動説にも精通していなければなりません。天文学者は，まず第一に，地動説に基づき，流星の動きを予測します。次に，その予測を，天動説オンリーの一



日常生活は天動説（個人＝心を内蔵した肉体）でいいけれど…

専門家は地動説（「かや」こそ主体）も勉強しておこう

般の人々にもわかるように，天動説のことばで発表します――何月何日の何時何分ごろ，東の空に流星が現われる，という具合に。

天動説は，私たちが日常生活の中でずっぽりつかっている常識ですから，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識に相当します。一方，地動説は，「集合性（かや）こそ主体」という人間科学の前提に相当します。天文学を勉強して地動説に精通すれば，一般の人に見える天の動きを，地動説の立場から明らかにすることができるようになります。同じように，人間科学を勉強すれば，一般の人々が思っている（肉体に内蔵された）心の動きを，「集合性（かや）こそ主体」という人間科学の立場から明らかにすることができるようになります。さらに，その上で，明らかになったことを，もう一度，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識をもつ人々にもわかる言葉に変換して，共通の知識にすることもできるようになるのです。

「かや」の2つの側面

では，いよいよ，集合性の話――グループ・ダイナミックスの話――に入っていきましょう。集合性は2つの側面からとらえることができます。一つは，見える側面，観察できる側面です。見える側面ですから，人に例えれば，前姿

と言ってもいいでしょう。集合性の見える側面を「集合的行動」と呼ぶことにします。

もう一つは，見えない側面，観察できない側面です。見える側面が前姿ならば，後姿と言ってもいいでしょう。集合性の見えない側面を「コミュニケーション」と呼ぶことにします。ただし，後で説明しますように，私たちが普通使っているコミュニケーションという言葉の意味とはちがいます。コミュニケーションは，見えない後姿ですが，ちょうど背骨のように，見える前姿を後ろからしっかり支えています。

前姿だけあって後姿のない人などいませんし，後姿だけあって前姿のない人もいません。それと同様に，集合性には，必ず，集合的行動とコミュニケーションという2つの面があります。集合性（かや）の見える側面が集合的行動，見えない（けれども見える側面を支えている）側面がコミュニケーションです。

第4章では集合的行動について，第5章ではコミュニケーションについて説明します。

第４章
集合性（1）
集合的行動

本章のポイント

集合性（かや）は，観察できる集合的行動と観察できないコミュニケーションという２つの面からとらえることができます。本章では，まず，集合的行動について説明します。集合的行動とは，集合体の人々と環境をひとまとめにして，トータルに観察する時に，観察できる全体的な動きです。人々だけではなく，環境も含まれることに注意してください。私たちは，生まれてから死ぬまで，寝ている時もおきている時も，１秒の隙間もなく，常に，何らかの集合的行動の一角を演じつづけています。

1．集合的行動

集合体の全貌を視野に

では，集合性の2つの側面——集合的行動とコミュニケーション——のうち，集合的行動から話を始めましょう。集合的行動とは，集合体を，一つの全体として観察したときに観察できる，集合体全体の動き（行動）のことです。重要な点が2つあります。

第1は，一つの集合体の集合的行動を観察するには，その集合体の「全体」を視野に入れなければならないということです。決して，集合体の特定個人や特定の何人かに注目するのでありません。したがって，もし，一緒に夜勤をしている2人の看護婦を，一つの集合体としてとらえる場合には，その2人をすっぽり視野に入れる必要があります。同様に，同じ病棟に勤務している10名の看護婦の集合体の集合的行動をとらえる場合には，その10名の全体を視野におさめることが必要です。また，数百人の職員（医師，看護婦，技師，事務職員等）によって構成されている大きな病院で，職員の集合的行動を観察する場合には，それら数百人全体を視野に入れなければなりません。もちろん，集合体が大きくなると，その全体を一気に視野に入れるのは困難になります。現実的には，部分部分を観察して，それを合成して全体像を得ることになるでしょう。

挿し絵5
集合的行動——集合体（身体も事物も）の全貌を視野に入れる

第2の重要な点は，集合的行動には，集合体の人々のみならず，それらの人々の環境も含ま

れるということです。第2章（34頁）で述べた概念を使えば，集合的行動は，集合体の身体（たち）の動きと事物の動きの両方を包含しています。したがって，同じ病棟に勤務している10名の看護婦の集合的行動とは，10名の看護婦はもちろんのこと，その環境をも，すっぽり視野におさめることが必要です。同様に，数百人の職員（医師，看護婦，技師，事務職員等）の集合的行動を観察するには，それら数百人全体とその環境をひっくるめた全体の動きを観察しなければなりません。

争い・対立の集合的行動

第3章（43頁）で，グループ・ダイナミックスは，けんかをしている2人をも，一つの集合体として取り扱うこと，対立している複数の集団をも一つの集合体として取り扱うことを述べました。けんかをしている2人，あるいは，対立している複数の集合体も，何らかの集合性（かや）に包まれています。

では，けんかをしている2人は，どのような「かや」に包まれているのでしょうか。ここでは，その「かや」の一面である集合的行動について考えることにします（もう一つの面であるコミュニケーションについては，次章で考えます）。

2人の男，AとBが，宝石を取り合って，殴り合いのけんかをしているとします。AとBを，一つの集合体として，トータルに観察するとき，どのような集合的行動が観察されるでしょうか。Aが，渾身の力をこめて，Bに殴りかかったとします。Bは，身をねじって，Aのパンチをよけます。次の瞬間，今度は，Bが，Aにパンチをたたきつけます。すると，Aは，身をねじって，パンチをよけ，そして，今度は，Aが，――と，ボクシングの試合さながらのパンチの応酬が観察されます。そして，殴り合う2人のそばには，宝石の箱が置かれています。例えば，こんな集合的行動が観察されるでしょう。パンチの応酬が，辛辣なセリフの応酬になっても，一つの集合的行動であることに変わりはありません。

最近，学校でのいじめが，大きな問題になっています。しばしば指摘されるのは，現在のいじめと一昔前のいじめの違いです。一昔前のいじめでは，学級（という集合体）で，いじめる子といじめられる子が，割とはっきりしていま

した。いじめっ子といじめられっ子が，大体，決まっていたわけです。しかし，最近のいじめは，非常に流動的です。昨日までいじめられていなかった子が，突然，今日はいじめられる。昨日までいじめられていた子が，今日は，いじめる側に——こんなふうに，いじめる子といじめられる子が流動的に変わります。子どもたちは，この流動する集合的行動に敏感に反応し，一層，流動的になっていくようです。同じいじめでも，一昔前と現在では，集合的行動に大きな違いがあるようです。

次に，看護現場の事例を用いて，集合的行動について説明してみましょう。

Tさんの事例——集合的行動の変化

Tさんは，69歳の男性。自営業を営んでいた。妻と2人暮らし。明るい性格であり，おしゃれな人だった。

Tさんは，胃ガンにおかされていた。しかし，ガンであることは，妻にしか告げられていなかった。Tさんは，胃ガン手術を受け，5月の連休前に一旦退院したが，腸閉塞のため，連休後には再入院となった。本人の希望により，個室に入った。24時間の持続点滴が必要だった。腸の蠕動運動は見られず，一日少量の水分以外，経口摂取はほとんど不可能であった。イレウスチューブの挿入による苦痛と，ガンによる倦怠感に苦しんでいた。トイレに歩いていくこともできず，排泄には，ポータブルトイレを使用していた。

妻は，毎朝来院し，夕方までTさんに付き添っていた。しかし，何をするでもなく，一日中，二人でじっとテレビを見ていることが多かった。最初の入院

二人でテレビばかり…

のときには明るかったTさんも，再入院後は，全身倦怠感とイレウスのため口数が少なくなった。「今日は暖かいですね」と話しかけても，「僕は，部屋の中にいるからわからないよ」と，そっけない返事しか帰ってこなかった。私たち，看護婦も，用事があるときしか訪室しなくなりつつあった。「奥さんを支えなければ」と感じてはいたが，その糸口さえ見つけられずにいた。

Tさんは，自分の死が近づいていることを知っているようであった。それでも，2，3日に1回排便があると，嬉しそうに，「便が出ましたよ，スッキリしました」と，素直に喜びを表現してくれた。自己の中で死を受け入れつつも，自らの生の可能性に期待しているかのようであった。

ある日，私（担当看護婦）は，ふとしたことから，妻と会話をする機会を得た。「大丈夫ですか。毎日たいへんですね。辛いですね。」「ありがとうございます。私は，あの人に何もしてあげられない。何も言えない。病気のことに触れられるのが怖いんです。」と涙を流しながら話してくださった。私たちは，カンファレンスで，もっと積極的に，Tさんと妻に関わっていかねばならないことを確認しあった。そして，次の日から，身体を拭いたり髪を洗ったりするときには，妻も一緒に参加するよう促した。妻が，看護婦と一緒に，自分の世話をしてくれるのを，Tさんは喜んだ。それは，妻にとっての喜びでもあった。

その後も，イレウス状態は改善されず，1日に3回の熱気浴が行われた。ある日，私は，腹部の痛みが持続しているようだったので，「おなかをさすってみましょうか。」とたずねた。すると，Tさんは快く受け入れてくださった。20分間くらい，腹部を手のひらでマッサージした。Tさんは「気持ちいい，気持ちいい。」と応じてくれた。それ以降，私は，時間をみつけては，Tさんのマッサージをした。Tさんも，少しずつ話してくれるようになった。Tさんの話には，あきらめと期待が交錯していた。「Tさん，偉いですね。きっと，いろいろあると思いますけど，自分ひとりでがんばっていらして」「僕はもういいんだよ。もう，70歳だからね」。

私は，Tさんに自分が受け入れてもらっているのを感じた。Tさんの中に入っていきたいという，私の気持ちが通じたようにも思えた。この頃から，ためらわず，Tさんの部屋へ向かえるようになった。

気持ちいい，気持ちいい

この事例には，4つの「かや」が登場します。Tさん夫婦を包む「かや」，Tさんと看護婦を包む「かや」，妻と看護婦を包む「かや」，そして，夫婦と看護婦の3人を包む「かや」です。これらの「かや」は，事例の中ほどに出てくる，妻と看護婦の会話を境に，大きく変化します。

まず，この会話がなされる以前の集合的行動について整理しておきましょう。

①夫婦の「かや」――事例の筆者（看護婦）は，夫婦（という集合体）の集合的行動を，次のように描写しています――「妻は，毎朝来院し，夕方までTさんに付き添っていた。しかし，何をするでもなく，一日中，二人でじっとテレビを見ていることが多かった」。Tさんと妻の2人とも，観察者の視野に入っていること，また，テレビという事物も視野に入っていることに注意して下さい。

②Tさんと看護婦を包む「かや」――2，3日に一度排便があったときには，Tさんは，嬉しそうに，「便が出ましたよ。スッキリしました」と，看護婦に喜びを表現しています。しかし，ほとんどのときは，Tさんは，重い病状のため，口数が少なく，看護婦との会話も，決して多くはなかったようです。「今日は暖かいですね」という看護婦の語りかけにも，「僕は，部屋の中にいるからわからないよ」という，そっけない返事だったそうです。Tさんと看護婦という2人集合体の集合的行動の特徴は，そっけない返事という描写によく現われています。

③妻と看護婦を包む「かや」――看護婦には，「奥さんを支えていかなければ」という気持ちはあったようですが，妻との接点を見つけられずにいました。このように，妻と看護婦という2人集合体の集合的行動も，Tさんと看護婦の集合的行動と同じく，少ない接触，少ない会話が特徴でした。

④夫婦と看護婦の3人を包む「かや」――「私たち，看護婦も，用事があるときしか訪室しなくなりつつあった」という記述は，3人集合体の集合的行動

には，必要最低限の接触しかなかったことを示しています。

これら4つの「かや」は，妻と看護婦をつつむ「かや」の，ふとした変化をきっかけに，劇的に変化していきます。「大丈夫ですか。毎日たいへんですね。辛いですね。」「ありがとうございます。私は，あの人に何もしてあげられない。何も言えない。病気のことに触れられるのが怖いんです」――この涙ながらの会話が，妻と看護婦の「かや」を，大きく変えました。この涙ながらの会話も，妻と看護婦という2人集合体の集合的行動です。

妻と看護婦の会話を境に，どのように集合的行動が変化したかを見ておきましょう。妻と看護婦の集合体には，Tさんの清拭や洗髪を一緒にするという新しい集合的行動が出現しました。また，Tさんと看護婦の集合体にも，新しい集合的行動が出現しました。「おなかをさすってみましょうか」という看護婦の申し出を，Tさんは快く受けるようになりました。看護婦の方も，そのような申し出を気軽にできるようになっています。Tさんは，マッサージに，「気持ちいい，気持ちいい。」と応えています。看護婦も，時間を見つけて，マッサージをしようと心がけるようになりました。これらは，すべて，Tさんと看護婦の2人集合体に観察されるようになった，新しい集合的行動です。

以上のような「かや」の変化は，「Tさん，偉いですね。自分一人でがんばっていらして」「僕は，もういいんだよ。もう，70歳だからね」という会話――集合的行動――すら，出現させるに至りました。

常に集合的行動の一角を演じている

私たちは，オギャーと生まれてから死ぬまで，1秒の切れ目もなく，常に，何らかの集合的行動の一角を演じつづけています。つまり，純粋に単独の行動というのは，ありえないのです。要は，どのくらい広い範囲を観察するか，そして，どのくらい長い時間観察するか，です。ある時点に，目の前だけを観察すれば，いかに，単独の行動に見えても，もっと広い範囲を視野に入れ，もっと長い時間観察すれば，何らかの集合的行動の一部であることがわかります。

例えば，夜勤で，たった一人，ナース・ステーションにいるときを考えてみましょう。そんなときには，集合的行動など関係ないのでしょうか。そうではありません。もし，ねばり強く，24時間にわたって，ナース・ステーション

を観察している観察者がいたとしたらどうでしょうか。その観察者には，夜勤の人たちから日勤の人たちへの引き継ぎ，日勤の人たちから準深の人たちへの引き継ぎ，そして，準夜の人たちから深夜の人たちへの引き継ぎが，すべて，観察できるはずです。これは，深夜，日勤，準夜の人たち（の集合体）が，24時間という時間をかけて織りなす，三交代制という集合的行動です。今の時点だけを考えれば，深夜，たった一人でナース・ステーションにいる看護婦も，観察する時間を長くとれば，やはり，誰かと何らかの集合的行動を織りなしているわけです。

看護には直接関係ありませんが，こんな話を聞いたことがあります。まわり一面を杉の木に囲まれた山あいの村に行ったときに聞いた話です。小さな杉の苗木を植えてから，商品として伐採できるようになるには，短くても40年くらいの年月がかかるそうです。つまり，祖父が植えた苗木を，息子が育て，孫の代になって初めて伐採できるようになるわけです。もし，苗を植えたときから，伐採の瞬間までの約40年間を，杉の木のかたわらで見守っていた観察者がいたとしたら，その観察者には，親子3代にわたって織りなされる集合的行動（もちろん，杉の木も含めた集合的行動）を観察することができるでしょう。3人のいずれも，一人，山の中で仕事をしています。また，ひょっとすると，祖父は孫の顔を見ることなく，この世を去っているかもしれません。しかし，3人とも，約40年間にわたる（3人集合体の）集合的行動の一角を演じています。

2．物的環境と「もの」的環境

集合体とは，身体と事物の両方を含む概念です。したがって，集合体の動き，すなわち，集合的行動も，身体の動きと事物の動きの両方を含む，トータルな動きのことです。事物は，身体にとっては環境の一部です。ここで，環境について，説明を付け加えておきましょう。今までは，暗黙のうちに，環境といっても，もっぱら，「物的」な環境だけを考えてきました。しかし，集合体の環境には，物的環境以外の環境もあります。

制　度

多くの病院で，「プリセプター制度」が導入されています。学校を出て初めて病院勤務に就いた新人看護婦を，先輩看護婦がマンツーマンで指導し，新人看護婦が職場に適応するのを援助しようという制度です。もちろん，一口にプリセプター制度と言っても，実際に導入しようとなると，さまざまな苦労があるようですが，ある看護婦から，「自分が新人のときに，プリセプターに指導してもらって，本当に助かった」という話を聞きました。これは，言葉をかえれば，「新人のときに，この病院にプリセプター制度という「環境」があって，本当に助かった」ということではないでしょうか。

しかし，プリセプター制度は，決して，「物」的環境ではありません。もちろん，プリセプター制度を導入し，運用していこうとすれば，マニュアル，指導計画書等々の「物」も必要です。しかし，それらの物が，プリセプター制度ではありません。プリセプター制度は，あくまでも，一つの「制度」です。それは，物的環境ではない，一つの制度という環境なのです。

制度のように，物ではない環境を，「もの的環境」と呼ぶことにしましょう。日本語というのは便利です。「物的」と「もの的」と，漢字で書くかひらがなで書くかによって，使い分けることができます。ここで，早速，もの的環境の定義を述べるべきかもしれませんが，その前に，もう一つだけ，「もの」的環境の例をあげておきましょう。

役　割

先にあげた制度という「もの」的環境の他に，「役割」という「もの」的環境もあります。病院という集合体にも，さまざまな役割があります。看護婦（士），医師，技師，薬剤師，事務担当等々，どれをとっても，病院という集合体が，通常の集合的行動を織りなしていく上で，欠くことのできない役割です。また，看護婦（士）という役割について細かく見れば，婦長，副婦長，スタッフというように地位別の役割がありますし，内科，外科等々の専門別の役割もあります。さらに細かく，内科病棟に勤務している一般看護婦と言っても，その担当業務や経験年数などによって役割が分かれています。三交代制の勤務形態にも，深夜，日勤，準夜という３つの役割があります。

役割も，制度と同様，物的環境ではありません。確かに，特定の役割についている人だけが使用する（あるいは，使用できる）物品や部屋はありますが，それらの物品や部屋そのものが役割ではありません。しかし，ある役割——例えば，「夜勤」という役割——が病院に存在する場合と存在しない場合を想像してみればわかるように，ある役割の有無は，集合体の集合的行動を，がらりと変えてしまいます。役割は，確かに，物的環境ではありませんが，集合体にとって重要な環境（もの的環境）の一つです。

「もの」的環境の例として，制度と役割について述べてきましたが，制度にしても，役割にしても，特定の集合的行動がパターン化（定型化）したものです。プリセプター制度を例にとれば，たまたま，特定の先輩看護婦が，特定の新人看護婦の指導をするだけでは，制度とは言えません。プリセプターに選ばれた人が，新人看護婦を指導するということが，毎年，定期的に行われ，しかも，それが，「プリセプター（制度）」という名前で呼ばれるようになって初めて，一つの制度となるわけです。

役割にしても同じです。特定の役割がどのようなものになるかは，役割についている人だけによって決められるのではありません。プリセプターという役割に期待される行動は，病院全体の方針によって，つまり，病院組織（あるいは，看護組織）という集合体によって，ある程度，決められます。また，さらに細かく見れば，プリセプターと新人看護婦の特定の組み合わせ，つまり，2人集合体の中でつくられていきます。同じマニュアルに従っていても，どのような指導が求められるかは，その2人集合体の特徴によって決まっていきます。

言　葉

最後に，もう一つだけ，重要な「もの的環境」をあげておきましょう。それは，集合体の中で，当たり前に使用されている言葉です。ある言葉を使って話し合うというのは，一つの集合的行動です。最初は，1人，2人の人が使っていたにすぎない言葉が，次第に，集合体の多くの人によって使われるようになり，皆が，日常的に使用する言葉になっていく（その言葉の使用がパターン化する）と，その言葉は，「もの的環境」の一部になっていきます。

日本社会という大きな集合体について考えてみますと，ここ十数年の間に使

われるようになった言葉が，数多くあります。つまり，ここ十数年の間に，日本社会という集合体の「もの的環境」に組み込まれた言葉です。例えば，「バブル」という言葉は，いわゆるバブル経済が崩壊したあと，だれでも使用する言葉になりました。また，女性が職場に進出するようになり，女性の人権尊重を主張する運動が高まるとともに，「セクハラ」という言葉も，おなじみの言葉になりました。「携帯」という言葉自体は，従来からあった言葉ですが，今や，単なる「携帯」ではなく，携帯電話の意味で使用されるようになりました。

医療関係者という（大きな）集合体に独特の言葉もあります――「保存的治療」，「原発性・続発性」，「教育入院」など。また，看護婦という（これまた）大きな集合体に特有の言葉もあります――「申し送り」，「看護診断」，「看護過程」など。これらの言葉は，一歩，医療関係者や看護婦の集合体の外に出ると，まったくチンプンカンプンか，あるいは，異なった意味に受け取られてしまいます。しかし，医療関係者や看護婦の集合体の内部では，これらの言葉があるおかげで，日々の医療活動や看護活動（という集合的行動）が，スムーズに行なわれています。

しかし，集合体の「もの的環境」になっている言葉が，常に，よい機能を果たすとは限りません。ちょうど，ナイフが，果物の皮をむくのに使えると同時に，人を傷つけるのにも使えるのと同じように，言葉も，集合体に役立つこともあれば，害になることもあります。極端な場合，言葉は，集合体の一部の人たちに，まるで胸を貫かれたような痛みを与えることもあるのです。差別用語と言われる言葉は，そのような言葉です。特定の言葉を差別用語とみなし，使用を避けるということは，その言葉を，集合体の「もの的環境」から消し去ろうとしているわけです。

集合体で使用する言葉を変えることによって，集合的行動を変化させることもできます。ある病院で，「患者」という言葉の代わりに，「患者さま」という言葉を使う運動をしているという話を聞きました。この試みは，「患者さま」という言葉を使うことによって，より患者本位の医療や看護（という集合的行動）を行なっていこうとする試みです。

前に，「もの的環境」としての制度や役割について説明しましたが，制度や役割は，それらを指し示す言葉が普及するとともに，明確な制度や役割になっ

ていきます。例えば，プライマリー・ナーシングの制度は，「プライマリー・ナーシング」という言葉の普及とともに，アソシエート・ナースという役割は，「アソシエート・ナース」という言葉の普及とともに確立されていきます。

「もの的環境」と単なる現象の違い

以上，「もの的環境」として，制度，役割，言葉について説明してきました。「もの的環境」とは，集合的行動が繰り返され，パターン化したものでした。では，単に，ある集合的行動が行なわれているのと，その集合的行動がパターン化して「もの的環境」になっているのとでは，どのような違いがあるのでしょうか。

確かに，「もの的環境」は，「物的環境」ではありません。しかし，重要なことは，「もの的環境」になると，物的環境と非常に似た性質を帯びてくるということです。では，物的環境の性質とは何でしょうか。病棟に大きな，いや，大きすぎるテーブルがあったとします。どう考えても，仕事のじゃま。そんな場合には，集合体の人々が，協力して，そのテーブルを倉庫にでも運んでいって，代わりに，倉庫から適当なサイズのテーブルを運んでくることができます。このように，テーブルという物的環境は，じゃまなら，集合体の人々が協力して除去できますし，必要ならば，協力してもってくることもできます。つまり，物的環境というのは，それに対して，集合体の人々が協力して手を打てるという性質があるわけです。この，集合体の人々が協力して手がうてるという性質を，「もの的環境」はもつようになるのです。

具体例をあげましょう。ここに，非常に後輩思いの先輩看護婦Aさんがいたとします。たまたま，病棟に新人が入ってきて，その新人を気に入ったAさんは，親切に指導をしてあげました。ときには，プライベートな相談にものってあげました。このAさんがしたことは，プリセプター制度のプリセプターの役割と同じです。しかし，Aさんの病院は，プリセプター制度を導入していません。Aさんは，あくまでも，自らの親切心から，新人の面倒をみただけです。

Aさんが行なったことは，まちがいなく立派なことです。それを否定するわけでは，決してありません。しかし，Aさんの指導のしかたに改良の余地があったとします。でも，Aさんが自らの好意で指導していることに，そこはこう

した方がいい，こう変えた方がいいなどと，ずけずけ言えるでしょうか。これには，かなりの困難が伴います。よほどAさんと親しい人でもない限り，そんな忠告はできません。つまり，Aさんが新人とともに行なっている集合的行動について，集合体の人々が協力して手を打つということには，かなりの困難が伴うわけです。

一方，プリセプター制度が導入されている場合は，どうでしょうか。もし，現在，プリセプターが指導すべきとされている内容に不十分な点があれば，病院の看護婦（という集合体）が協力して，マニュアルを見直し，指導内容を追加することもできます。また，プリセプターが指導する期間が短かすぎると判断されるならば，再び，看護婦（という集合体）が協力して，指導期間を長くすることもできます。このように，制度や役割という「もの的環境」になっていれば，集合体の人々が協力して，手を打てるわけです。ここが，「もの的環境」になっている場合の違いです。

同じことは，集合体で使用されている言葉についても当てはまります。ある困った現象が，ただ存在しているだけでは，その現象に，集合体の人々が協力して手を打つことは困難です。しかし，その現象を指す言葉ができると，その現象に対して手を打つことが可能になるのです。前に，「セクハラ」という言葉を，日本社会（という集合体）が，「もの的環境」に組み込んだことを述べました。考えてみますと，セクハラというのは，職場で，男性が女性に性的に不愉快な行為をすることですから，「セクハラ」という言葉が誕生する，ずっと以前から，そのような行為は行なわれていたはずです。つまり，セクハラという現象は存在していたわけです。でも，その現象を指す言葉を，日本社会（という集合体）は持っていませんでした。

ただ，セクハラという現象があるだけでは，それに対して手を打つことは困難です。しかし，「セクハラ」という言葉が誕生し，普及し，日本社会（という集合体）の「もの的環境」に組み込まれると，事態は一変します。身近にセクハラ的行為をしている人がいれば，「それはセクハラだ，やめなさい」と注意することもできます。また，病院内に，セクハラ対策委員会を設置できるのも，「セクハラ」という言葉があるからです。

3．集合的行動の無縁圏

あなたの病棟で，夜勤の看護婦が，ナースステーションでカラオケを歌う（という集合的行動が観察される）ことなど考えられるでしょうか。もし，そんな話を聞いたら，あなたは，「エッ，ウッソー」と言うでしょう。あるいは，あなたの病院で，看護婦がスケートボードで病室を巡回する（という集合的行動が観察される）ことなど想像できるでしょうか。再び，そんな話を聞いたら，「エッ，ウッソー」と吹き出してしまいます。

しかし，考えてみますと，確かに，非常識きわまりない行動だとしても，ナースステーションでカラオケを歌うことは不可能ではありませんし，スケートボードで巡回することも不可能ではありません。手をバタバタやって空を飛ぶことは不可能ですが，カラオケやスケボーは不可能ではありません。それにもかかわらず，ナースステーションのカラオケやスケボー巡回をやるなど，想像もしません。

どうしてでしょうか。それは，いわゆる，まともな集合的行動を繰り返すことによってです。夜勤のときは，病室を巡回したり，ナースコールに備えたりという集合的行動を，日常的に繰り返しています。そのような特定の集合的行動を日常的に繰り返すことによって，カラオケを歌うことが想像できない集合

こんな集合的行動は，無縁圏に廃棄されている

的行動になっていくのです。

このように，集合体は，特定の集合的行動をとることによって，その特定の集合的行動とは無縁の世界（無縁圏）をもつくっていきます。無縁とは，想像もしないという意味です。上の例では，夜勤のときに，病室を巡回したり，ナースコールに備えたりという，特定の集合的行動を繰り返すことによって，同時に，集合的行動の無縁圏をもつくっていきます。カラオケを歌うという集合的行動は，無縁圏にあるわけです。カラオケを歌うという集合的行動は，無縁圏に廃棄されたと言ってもよいでしょう。

ここで，無縁圏への集合的行動の廃棄は，決して自覚的になされるのではないということに注意して下さい。無縁圏への集合的行動の廃棄は，集合体が特定の集合的行動を織りなすことの裏返しとして，結果的になされてしまうものなのです。例をあげましょう。私たち日本人（という大きな集合体）は，長い歴史の中で，知人に出会ったときには，互いに頭を下げて挨拶するという，おじぎの習慣をつくってきました。言いかえれば，長い歴史を通じて，日本人は，そのような集合的行動を織りなし続けてきたわけです。そして，それと同時に，相手の目を直視して握手を交わすという集合的行動は，無縁圏に廃棄し続けてきたわけです。もちろん，握手の集合的行動を，意識的に廃棄してきたのではありません。もし，日本人が，「握手などしないぞ」と意識しながら，握手を拒否し続けてきたとしたら，それは，握手という集合的行動が，決して，無縁圏には廃棄されていなかったことの証明になってしまいます。無縁ということは，意識の片隅にものぼらないという意味なのです。

もう一度，前に紹介した「Ｔさんの事例」（54頁）を見て下さい。この事例の前半では，Ｔさん夫婦（という集合体）には，「一日中，二人で，じっとテレビを見ている」という集合的行動が観察されました。また，Ｔさん夫婦と看護婦（という集合体）には，少ない接触，必要最低限の会話という集合的行動が観察されました。そのような集合的行動が続く中では，事例の後半に出てくるような集合的行動――妻が看護婦と一緒に，夫の体を拭いたり，洗髪をするといった集合的行動――は，無縁圏に廃棄されていたわけです。

事例の後半では，ちょうど，その逆が起こります。事例の後半では，看護婦がＴさんにマッサージを申し出，Ｔさんは，快く受けるという集合的行動や，

看護婦とTさんが親しく会話するという集合的行動が観察されるようになりました。そして，それと同時に，事例の前半で観察されたような集合的行動は，無縁圏に廃棄されたのです。

第５章
集合性（2）
コミュニケーション

本章のポイント

第３章で，集合性は，観察できる集合的行動と，観察できないコミュニケーションという２つの面からとらえられることを述べました。本章では，後者のコミュニケーションについて説明します。コミュニケーションとは，集合体にとってのコミュ（共同性），すなわち，規範や雰囲気をつくっていくプロセスのことです。決して，個人間の情報伝達や意思疎通という意味ではありません。本章では，規範や雰囲気が，どのようにしてつくられるのかを説明します。一見奇抜な理論ですが，ついてきてください。奇抜に思えるのは，どうしても，私たちがずっぽりつかっている常識――「個人＝心を内蔵した肉体」――に引っ張られてしまうからです。

1．コミュニケーション――雰囲気・規範の形成

集合的行動と並ぶ集合性のもう一つの側面，コミュニケーションの話に移りましょう。コミュニケーションという言葉は，日常会話でも，よく使われる言葉です。研修会で，今の職場の問題点についてグループ・ディスカッションをすると，最もよくあがってくる問題点の一つが，「コミュニケーションがうまくいっていない，コミュニケーションが不足している」といった問題点です。

では，日常会話でコミュニケーションという言葉は，どのような意味で使われているのでしょうか。おそらく，次のような意味でしょう。ここに，Aさんと Bさんがいるとします。まず，Aさんが，自分が感じたこと，考えたことを，メッセージとしてBさんに伝える――ちょうど，キャッチボールでボールを投げるように。次に，そのメッセージを受け取ったBさんが，自分なりに感じ，考えたことを，Aさんにメッセージとして伝える。そうすると，今度は，そのメッセージを受け取ったAさんが，メッセージを作り，Bさんに伝える――。日常，コミュニケーションという言葉が使用されるときには，おそらく，このようなメッセージのキャッチボールという意味で使用されているのではないでしょうか。

しかし，本書では，コミュニケーションという言葉を，これとは異なる意味で使用します。「コミュニケーション」という単語の「コミュ」という部分に注目して下さい。この「コミュ」を含んだ言葉に，コミュニティというのがあります。コミュニティとは，地域「共同」体のことです。それ以外に「コミュ」を含む言葉として，コミュニズムというのもあります。かつて，ロシアや東ヨーロッパの国々は，コミュニズム（共産主義）の国でした。コミュニズムとは，個人が資本を所有することを禁じ，国家という「共同」体が資本を所有することをめざす思想のことです。以上，コミュニティ，コミュニズムという例からおわかりいただけるように，「コミュ」は，「共同」を意味しているわけです。

そもそも，コミュニケーションとは，「共同」のものをつくっていく，とい

う意味です。コミュニケーションは，必ず，複数の人の間で行なわれます。つまり，集合体の中で行なわれます。その集合体の中で共同のものがつくられていくプロセスこそ，コミュニケーションという言葉の本来の意味なのです。本書では，コミュニケーションという言葉を，この本来の意味で使用していきたいと思います。

では，集合体のなかで「共同のもの」とは，何のことでしょうか。それは，集合体が醸し出している雰囲気，あるいは，集合体の人々がしたがっている規範のことです。つまり，コミュニケーションとは，集合体が，雰囲気や規範をつくっていくプロセスなのです。もっとていねいに言えば，コミュニケーションとは，集合体が，雰囲気や規範を創出したり，維持したり，変化させたり，あるいは，消滅させていくプロセスのことです。

雰囲気

まずは，雰囲気から話を始めましょう。集合体には，必ず，その集合体に独特の雰囲気が形成されていくものです。皆さん方の病院，あるいは，病棟にも，他の病院や病棟とはどこか違う，独特の雰囲気があると思います。何かの用事で，他の病院や病棟に出かけたりすると，自分の病院や病棟とは違う，一種独特の雰囲気を感じることが少なくありません。

集合体の雰囲気は，集合体の身体と事物（もの的環境を含む）によって，かもしだされていきます。そして，その，かもしだされた雰囲気は，一人一人の身体に現前する世界に，さまざまな“表情”や“色あい”を与えます。世界に，明るく晴れ晴れとした表情を与えたり，暗くうっとうしい色あいを与えたりします。

第3章（53頁）で，争いや対立の「かや」もあることを述べました。争いあう2人も，一つの集合体です。その集合体も，雰囲気をかもしだしています。その雰囲気は，世界（とりわけ，争っている相手）に，攻撃的な表情を与え，殺伐とした色あいを与えることでしょう。

しかし，私たちは，日ごろ，現前している世界に与えられた表情や色あいを，世界の表情や色あいとは考えていません。私たちは，例の「肉体に内蔵された心」という常識，「内界と外界を区別する」常識に，どっぷりつかっています

ので，「物理的に外界にある世界を，心（内界）で，明るく感じたり，暗く感じたりするのだ」と考えています。その場合の心の状態を指す言葉が，「気分」や「気持ち」です。例の常識につかっている私たちは，「外界に対して，明るい気分や暗い気持ちを心の中に抱くのだ」，あるいは，「そのような気分や気持ちが，心の中に宿るのだ」と考えています。

しかし，日ごろ，私たちが気分や気持ちで表現しているものは，決して，心の中にあるのではありません。それは，私たちの前に現前している世界そのものの表情であり，色あいなのです。第2章（29頁）で，喉がからからに渇いて水道の栓をひねろうとしている時に，水のイメージが浮かぶ話をしました。水のイメージは，頭の中に浮かぶという言葉で表現はしますが，素朴な経験としては，水道の蛇口の先に，つまり，現前している世界の中に見えるのです。集合体の雰囲気が与える（世界の）表情や色あいも同じです。いかに，心の中の気分や気持ちといった言葉で表現はしていても，実は，心の中のことではなく，現前している世界そのものの表情や色あいなのです。

雰囲気それ自体は，言語的に表現することができません。この点が，次に述べる規範とのちがいです。もちろん，雰囲気が，現前する世界に与える表情や色あいは，言語的に表現することができます——明るく晴れ晴れとした表情だとか，暗くうっとうしい色あいだとか。しかし，雰囲気そのものを，ずばり言語で表現することはできません。ですから，言語で表現しようとしても，一種独特の雰囲気だね，とか，えもいわれぬ雰囲気だね，とか，そういう表現にならざるをえないのです。雰囲気が言語で表現できるようになると，それは，もはや，規範と呼ばれることになります。

規範——「べし」規範と「である」規範

では，規範の話に移りましょう。規範とは，集合体の人々によって形成され，そして，集合体の人々がしたがっている，暗黙の了解事項のことです。規範は，雰囲気とは異なり，言語的に表現することが可能です。その言語的な表現の仕方によって，規範を二つに分類することができます。

一つは，言語的に表現した場合に，「——すべし（あるいは，するべからず）」，「——した方がよい（あるいは，しない方がよい）」といった言いまわし

で表現できる規範です。本書では，この種の規範を，「——すべし」で代表させて「べし規範」と呼ぶことにしましょう。

もう一つは，言語的に表現した場合に，「——である（あるいは，ではない）」，「——がある（あるいは，がない）」といった言いまわしで表現できる規範です。この種の規範を，「——である」で代表させて「である規範」と呼ぶことにしましょう。

べし規範

まず，「べし規範」から話を始めましょう。おそらく，皆さんの職場（という集合体）にも，たくさんの「べし規範」があるはずです。例えば，「遅刻をするべからず」，「カンファレンスには出席すべし」，「病室を清潔に保つべし」などは，いずれも，「べし規範」の例です。

先に，規範は，言語的に表現「可能」であると言いましたが，だからと言って，規範が，現実に必ず，言語として表現され，集合体の人々に意識されているかというと，そうではありません。「べし規範」に中には，集合体の人々が，明確に意識することなく従っている「べし規範」がたくさんあります。例えば，ミーティングのときの着席位置。決まって，婦長が上座に，あとは，おおよそ年齢順に着席する職場があったとします。しかし，ミーティングのたびごとに，このような着席位置を考えて席につくわけではありません。ただ，いつものように席につくだけのことです。しかし，その職場には，着席位置についての「べし規範」があり，皆，それにしたがっています。

日常の集合体の活動がうまくいくのは，そのような「べし規範」がたくさん形成されているからです。もちろん，改善すべき問題点はあるにせよ，まがりなりにも日々の集合体の生活が営まれているのは，そのような暗黙の「べし規範」が，たくさん形成されているからです。

したがって，集合体を変えていこうとすれば，この暗黙の「べし規範」を変えていかねばなりません。しかし，暗黙の「べし規範」は，あくまでも暗黙の了解事項です。集合体の人々は，通常，そのような「べし規範」を意識することはありません。でも，その「べし規範」に，120パーセントしたがっているのです。

では，どうしたら暗黙の「べし規範」に気づくことができるのでしょうか。この点については，第6章（98頁）で詳しく説明しますが，ここでも，ごく簡単に触れておきましょう。暗黙の「べし規範」に気づくには，集合体を外から見る眼（「かや」の外から見る眼）が必要になります。つまり，外部者の視線です。私たちが，新しい職場に入ったときなど，まだ，内部者にはなりきっていませんので，外部者の眼で見ることになります。そうすると，内部者には気づけない「べし規範」にも気づくことができます。例えば，「へー，この病棟では，こんなふうに記録をつけないといけないのか」と，その病棟では，皆が，もはや意識することなくしたがっている「べし規範」に気づきます。

である規範

次に，「である規範」の話に移りましょう。先に，「である規範」とは，「——である」，「——がある」といった言いまわしで表現できる規範だと述べました。ということは，もし，あなたに，ナースキャップが現前しているとしたら，「それはナースキャップである」という「である規範」に，あなたがしたがっているからだ，ということになります。くれぐれも，私たちが人間科学への旅立ちに際して訣別した「内界と外界を区別する」常識に引き戻されないよう注意して下さい。決して，外界にナースキャップが存在し，それを内界にとらえたから，ナースキャップが現前するのではありません。

「それはナースキャップである」という「である規範」は，看護の長い伝統の中で，ナースキャップをナースキャップとして用いる，巨大な集合体ができあがり，その集合体の中でつくられました。あなたの目の前に，あたりまえに，ナースキャップが現前しているのは，あなたも，その巨大な集合体の「かや」に包まれているからです。ところで，最近，ナースキャップの着用をやめる病院が出てきました。この傾向が，今後も広がっていくのかどうかはわかりませんが，もし，この傾向が広がって，ナースキャップがほとんど使用されなくなったと仮定しましょう。それは，ナースキャップをナースキャップとして使用する集合体が消滅すること，そして，「それはナースキャップである」という「である規範」も消滅することを意味します。もし，本当にそうなれば，看護婦には，もうナースキャップは現前しなくなるでしょう。たとえ，目の前にナ

ースキャップが置いてあったとしても，現前するのは，白い布でできた，わけのわからない物体だけ，となるでしょう。

私たちは，「それは聴診器である」，「それは解熱剤である」などと，多くのものを認識することができます。また，聴診器，解熱剤といった名詞で認識するだけではなく，「血圧が高い」，「外傷がひどい」という具合に，形容詞（高い，ひどい）で認識することもあります。あるいは，「心拍が低下している」，「発作が始まった」という具合に，動詞（低下する，始まる）で認識することもあります。

「さあ，仕事」——「それはナースキャップである」という「である規範」にしたがっている。

今後は，このような形容詞や動詞によって表現される規範も，「である規範」に含めて考えることにします。そうすると，ナースキャップについて述べたことは，そのまま，「血圧が高い」という認識や，「心拍が低下している」という認識についても当てはまります。つまり，今，計った血圧が高いと認識する（血圧が高いことが現前する）のは，そのような血圧値を高いとみなす集合体があり，あなたも，その集合体の「かや」に包まれているからです。そして，「そのような血圧は高い」とみなす「である規範」にしたがっているからです。「心拍が低下している」という動詞を用いた認識の場合もまったく同じです。そのような心拍の変化を「低下している」とみなす集合体があり，あなたも，その集合体の「かや」に包まれているのです。そして，そのような心拍の変化を，「低下している」とみなす「である規範」にしたがっているのです。

ナースキャップの例にしても，血圧や心拍の例にしても，その集合体は，医療関係者からなる大きな集合体です。しかし，いかに大きな集合体ではあっても，その集合体に含まれない人もたくさんいます。いわゆる医療の専門的知識を持たない，普通の人たちは，その集合体には含まれません。したがって，それら普通の人たちには，同じ血圧計や心拍計を見せても，問題にするほど高い血圧も，問題にするほど低下している心拍も現前しません。

私たちは，無数と言っていいくらい多くの「である規範」にしたがっていま

す。だから，さまざまなものについて，名詞を使って，それが何であるかを言えますし，形容詞を使って，それがどんな状態にあるかを言えますし，動詞を使って，それがどうなっていっているか（何をしているか）を言うことができます。しかし，言語で言える，つまり，言語的に表現可能だからといって，実際に，言語で言っている（言語的に表現している）とは限りません。ナースキャップを手に取るときに，いちいち，「これはナースキャップだ」などと思うでしょうか。そんなことなど意識せずに，さっと，ナースキャップを手に取るのではないでしょうか。

このように，実際には，言語的に表現しない方が，圧倒的に多いのです。この点は，先に説明した「べし規範」と同じです。私たちは，改めて意識することなく，さまざまな暗黙の「べし規範」にしたがっています。同様に，私たちは，いちいち意識することなく，さまざまな暗黙の「である規範」にもしたがっているのです。したがって，暗黙の「べし規範」に気づく場合と同じく，暗黙の「である規範」に気づくにも，集合体の外部からの視線が必要になります。

争いあう2人の集合体にも，「である規範」が形成されます。第4章（53頁）で，宝石をめぐって，2人の男が殴りあいのけんかをするという集合的行動を例に出しました。2人の男（という集合体）は，殴りあえば殴りあうほど，一つの「である規範」を強化していきます。それは，「この宝石は，何がなんでも手に入れなければならない物である」という「である規範」です。

2．コミュニケーションの無縁圏

前章で，特定の集合的行動を繰り返すことによって，同時に，集合的行動の無縁圏もできていくことを述べました。無縁圏に廃棄された集合的行動とは，想像もしないような集合的行動のことでした。あるいは，そんな集合的行動があるなどと聞いた日には，「エッ，ウッソー」と言ってしまうような集合的行動のことでした。

これと同じことが，コミュニケーション，すなわち，雰囲気や規範の形成プロセスについても当てはまります。ある特定の雰囲気や規範が形成されると，

その逆の面として，無縁のものとして，無縁圏に廃棄される雰囲気や規範も出てきます。

ここで，もう一度，前章の「Tさんの事例」(54頁）を見てみましょう。この事例は，事例の中ほどに出てくる，Tさんの妻と看護婦の涙ながらの会話を境として，前半と後半に分けることができます。前章では，前半と後半で，集合的行動（および，集合的行動の無縁圏）がどのように変化したかを分析しました。ここでは，これらの集合的行動の変化に伴う，コミュニケーション（雰囲気や規範）の変化について分析してみましょう。

前半での，Tさん夫婦と看護婦（という3人集合体）には，重苦しい雰囲気（正確には，重苦しい世界を現前させるような雰囲気）がありました。しかし，妻と看護婦の例の会話をきっかっけに，後半は，明るい雰囲気へと変化していきます。前半では，明るい雰囲気など，思いもよらなかったでしょう。つまり，明るい雰囲気は，無縁圏に廃棄されていたわけです。一方，後半では，前半のような重苦しい雰囲気は想像もできないものになっています。今度は，重苦しい雰囲気が，無縁圏に廃棄されたわけです。

次に，規範の変化についてみてみましょう。まず，清拭や洗髪についての「である規範」に大きな変化が見られます。前半では，清拭も洗髪も，「看護婦の仕事である」という「である規範」に，3人ともしたがっています。さらに言うと，妻は，「看護婦の仕事に手など出すべきではない」という「べし規範」にもしたがっています（ちなみに，一般の人々の多くは，一旦病院の敷居をまたぐと，この「べし規範」にしたがうように思えます)。前半では，清拭や洗髪は，「看護婦と家族が一緒にする仕事である」という「である規範」も，「家族も看護婦の仕事を手伝った方がよい」という「べし規範」も，完全に，（コミュニケーションの）無縁圏に廃棄されていたと言えます。

しかし，後半は，事態が一変します。後半では，清拭や洗髪は，「看護婦と家族が一緒にする仕事である」という「である規範」，そして，「家族も看護婦の仕事を手伝った方がよい」という「べし規範」に変化しています。それと同時に，清拭も洗髪も，「看護婦の仕事である」という「である規範」や，「家族は看護婦の仕事に手など出すべきではない」という「べし規範」は，無縁圏に廃棄されています。

以上のように，清拭や洗髪についての規範が変化するのに対応して，看護婦についての「である規範」も変化しています。前半，3人の集合体には，「看護婦は，最低限の仕事だけして，病室を去っていく人物である」という「である規範」が形成されていました。だから，看護婦にとって，妻は，どう話しかけてよいやらわからない人物でしたし，妻にとっても，看護婦は，親しみにくい人物でした。ところが，例の会話をきっかけに，「看護婦は，その来室が待ち遠しい人物である」という「である規範」が次第に形成されていきます。それに伴い，前半の特徴であった「である規範」は無縁圏に廃棄されていきました。

3．規範と雰囲気の形成プロセス

今から，規範や雰囲気が，どのようにして形成されるのかを説明します。つまり，コミュニケーション（規範や雰囲気の形成）のメカニズムの話です。ここで，重要になるのが，第2章（35頁）で説明した「身体」という概念です。身体とは，固有の世界が現前しているもののことでした。身体は，肉体とはちがいます。また，個人（＝心を内蔵した肉体）ともちがいます。身体という概念には，心を内蔵しているという意味あいは，まったく含まれていません。

最初に，結論を述べておきましょう。多分，念仏のようにしか聞こえないでしょう。それでもかまいません。まずは，念仏と思って，結論を丸暗記してください。

「身体が身体になるのは，互換的身体の状態でありつつ，超越的身体の勢力圏に入ったときである」――これが結論です。身体が身体になるとは，世界が現前してくるということです。とりあえず，互換的身体とは，他の身体と溶け合う身体，超越的身体とは，神のような身体と考えてください。そうすると，上の結論は，次のように言いかえられます――「身体に世界が現前するのは，他の身体と溶け合う身体でありつつ，神のような身体の勢力圏に入ったときである」。

トトロの世界

「となりのトトロ」というアニメがあります。ここで，トトロに登場してもらって，今述べた結論をなじみやすくしておきましょう。

母親は長期入院中。父親は，２人の小さな姉妹を連れて，田舎で暮らすことにしました。無邪気で，純粋無垢な２人の子供は，すぐに，田舎の自然に溶け込んでいきます――花や木々，虫や動物の身体と，子供の身体は，互換の状態になります。ある日，２人がバス停で父親の帰りを待っていると，いつのまにか，２人の横に，巨大なトトロ（愛嬌のある巨大なタヌキみたいな）が立っているのです。これが，トトロ登場のシーンです。

トトロは，溶け合う（互換状態にある）身体たち――２人の子供の身体，生き物の身体，あるいは，川や岩の身体――から生成された超越的身体です。だから，トトロは，２人の子供にしか見えません。おそらく，草木や動物には，見えるはずです。でも，父親には見えません。

こうして，２人の子供の身体は，さまざまな自然の身体と互換する身体でありながら，同時に，トトロという超越的身体の一部（トトロの勢力圏にある身体）にもなります。それによって，子供の身体には，それまで現前しなかった不思議な光景が現前しだします。

互換する身体

私たちは，「肉体に内蔵された心」という常識に，どっぷりつかっています。今からの話では，この「肉体に内蔵された心」を消し去り，それを，「溶け合う身体」と「神のような身体」で置き換えていきます。では，互換的身体（他の身体と溶け合う身体）から説明しましょう。

互換的身体の状態とは，２つ以上の身体が，根こそぎ入れ替わる（互換する）状態のことです。つまり，今までのあなたが私になり，今までの私があなたになる――私とあなたが互換する――ような状態です。あくまでも，今までのあなたが私に「なる」，今までの私があなたに「なる」のです。決して，あなたが，私になったような気持ちになっているとか，あなたが，私の立場に立って考えているとかいうのではありません。文字どおり，あなたが私に「なる」，私があなたに「なる」，つまり，あなたという身体と私という身体が，根

こそぎ互換するのです。

前に，身体には，何らかの世界が広がっていることを述べました。身体が互換するときには，２つ以上の身体が根こそぎ入れ替わるわけですから，それぞれの身体とっての世界も，根こそぎ入れ替わってしまいます。身体の根こそぎの互換は，世界の根こそぎの互換でもあります。

２つ以上の身体が，何度も何度も互換するならば，それぞれの身体の区別は希薄になってしまいます。例えば，身体Ａと身体Ｂが何度も何度も互換を繰り返すならば，身体Ａは，何度も何度も身体Ｂに「なり」，身体Ｂも，何度も何度も身体Ａに「なる」わけですから，２つの身体の区別は希薄になってしまいます。つまり，２つの身体は，いわば，溶け合っているような状態になるのです。

互換する身体の例

互換的身体の状態が顕著になる例をあげてみましょう。

まず，目の前にいる他者の行為を見て，まさに自分が，その他者であるかのような強い感情を経験する場合があげられます。例えば，目の前に，みるからに危なっかしい手つきで包丁を使っている人（Ａさん）がいたとします。あなた（Ｂさん）は，はらはらしながら，見つめていましたが，ついに，指をグサッとやってしまいました。その瞬間，「あっ，痛い」，思わず，自分の手に激痛が走りました。そんな場合です。

この場合，Ｂが，はらはらしながらＡを見つめている間，身体Ｂは何度も身体Ａになっています。そして，グサッとやった瞬間も，身体Ｂは身体Ａになっているのです。つまり，Ｂは，自分の指をグサッと切ったわけです。その直後に，再び，身体Ｂになり（身体Ｂに戻り），物理的には切れていない手に，激痛を感じたのです。もちろん，仮に，私たちがＢのような経験をしても，ここに書いたような説明はしません。私たちは，例の「個人＝心を内蔵した肉体」の常識，「肉体に内蔵された心」という常識にしたがって説明をします――「まるで，自分の指をグサッとやったような気持ちがした（そのような気持ちを心に感じた）」と。でも，実は，身体Ｂになり，自分の指をグサッと切ったのです。

イタッ！――指を切った身体になっている

次の例に移りましょう。私たちは，他人の視線を読むことができます。他人の視線を追って，その人が何を見ているかを察知することができます。考えてみると，よくそんな器用なことができるものです。しかし，これも，他人の身体に「なっている」と考えれば，ごく自然のことに思えてきます。他人の身体になって，実際に，対象を見て，そして，元の身体になって（戻って）いるのです。さらに，単に，他人の視線を読むだけでなく，２人の人が，互いに視線を追い合いながら，ある同一の対象を視線にとらえる，ということもできます。この場合は，２つの身体が頻繁に互換しあっています。わずか１，２秒の短い時間でしょうが，２つの身体の互換が頻繁に生じることによって，最終的に，同一の対象に２つの目線を当てることができるのです。

乳幼児の行動には，互換的身体の状態が端的に現われるケースが多いようです。その理由は，乳幼児は，後で述べる超越的身体の影響を，成人ほど受けないからです。例えば，こんな事例があります。２人で遊んでいた子どもの一方（Ａちゃん）が，何があったのか，突然，Ｂちゃんの顔を，パシッとたたきました。もちろん，Ｂちゃんは火がついたように泣き出します。すると，Ａちゃんいわく，「たたいたのは，Ｂちゃん」。ただし，この事例では，Ａちゃんが意図的にうそを言っているわけではありません。パシッとやった瞬間，Ａちゃんは，Ｂちゃんの身体になっているのです。だから，パシッと「たたかれている」のです。その直後，再び，Ａちゃんは，元の身体に戻り，「自分は，たたかれた（＝たたいたのはＢちゃん）」と言ったのです。

互換する身体にとっての世界

身体の互換によって根こそぎ変化する世界とは，一体，どのような世界なのでしょうか。例えば，テーブルの向こうとこちらに座っている身体が，互換し

たとします。テーブルのこちらにいる身体の世界（風景）には，テーブルの上に置かれた人形の顔が含まれていたとします。でも，その身体が，互換によって，テーブルの向こう側の身体になってしまえば，人形の後姿しか世界に含まれなくなってしまいます。

重要なことは，そのときに，「先ほどまで前方から見ていた同じ人形の後姿を見ているだけ」という感覚は伴わないということです。つまり，今，後姿を見ている人形と，先ほど前姿を見ていた人形とは，まったく別の物として見えるのです。もし，同じ人形の前姿・後姿という感覚が伴うとしたら，「根こそぎ」の互換にはなりません。「同じ人形」という感覚が，2つの世界をつないでいますから，それは，もはや，「根こそぎ」の変化とは呼べません。世界が根こそぎ変化するということは，前の世界と後の世界をつなぐものが何もないということ，前の世界と後の世界はまったく別の世界であるということです。

このように，互換的身体に現前する世界は，通常，私たちが経験している世界とはずいぶん違います。私たちの通常の世界は，根こそぎ変化するのではなく，もっと継続性をもっています。いくら顔は見えなくなっても，今，見ている人形は，先ほどまで見ていた人形と同じ人形だというように，今の世界は，先ほどの世界と継続しています。ということは，通常の私たちにとっては，目の前の「何か」（例えば，人形の後姿）は，ただ単に，今ここでの「何か」ではなく，今ここを越えた「それ以上のもの」（あの同じ人形）としての「何か」だということです。

意味の形成

通常私たちに現前する世界に含まれるものは，単に，今ここでの「何か」ではなく，今ここを越えた「それ以上のもの」としての「何か」です。一方，互換的身体に現前する世界は，すべて，今ここだけの「何か」です。実は，互換的身体の世界に，今ここを越えた「それ以上のもの」を付け加え，私たちの通常の世界にしてくれるのが，超越的身体です。そこで，超越的身体の説明に入る準備として，今ここを越えた「それ（何か）以上のもの」について，もう少し説明しておきましょう。

今ここを越えた「それ（何か）以上のもの」とは，「何か」の意味のことで

す。あなたの目の前にある紙束は，単なる「何か」（紙束）ではありません。それは，新聞という意味をもっています――あなたの目の前にあるのは，「新聞としての紙束」，「新聞という意味をもつ紙束」です。あるいは，もっと詳しく表現するならば，その紙束は，もう読み終わったのでかたづけるべき新聞なのかもしれません。そうであれば，その「何か」（紙束）は，「かたづけるべき新聞としての紙束」，「かたづけるべき新聞という意味をもつ紙束」ということになります。

第2章（36頁）で述べましたように，私たちに現前する世界（風景）を見渡してみれば，すべてのものが，意味をもっていることがわかります。つまり，すべてのものが，「――としての何か」，「――という意味をもつ何か」です。あろうがなかろうが自分には何の関係もない，床の上の小さな小さな塵も，「あろうがなかろうが自分には何の関係もない，床の上の小さな小さな塵としての何か」，「あろうがなかろうが自分には何の関係もない，床の上の小さな小さな塵という意味をもつ何か」です。もし，それが，全く意味をもたなかったとしたら，そもそも，それが，世界（風景）の一部になることはなかったでしょう。私たちに現前する世界（風景）に含まれるもの（身体や事物）は，ことごとく，何らかの意味をもっています。

異なる身体には，異なる世界（風景）が広がっています。たとえ，私とあなたが，隣り合った席に座っていても，目の前の人形の見える範囲は，必ず違うはずです――私には見えるけれども，あなたには見えない部分，あるいは，あなたには見えるけれども，私には見えない部分が，必ずあるはずです。ましてや，それぞれが，人形にダブらせて浮かべている思い出まで含めるならば，私とあなたの世界（風景）は，いよいよ異なったものとなります。つまり，今ここでの「何か」（今の場合，人形の，正確な見え姿）について言えば，私にとっての「何か」とあなたにとっての「何か」は，必ず，異なっているわけです。

しかし，私が，「あの人形，なかなかいいじゃないか」と言えば，あなたは，「うん，そうだね」，「いや，そうかな？」などと応えるでしょう。あるいは，あなたが，「あの人形の置き場所を変えてくれないか」と言えば，私は，それに応えることができます。つまり，私とあなたは，「同じ」人形について話をすることができるのです。目の前の今ここでの「何か」は，私とあなたで異な

ります。しかし，その「何か」がもっている意味（テーブルの上の人形という意味）は，私にとっても，あなたにとっても同じなのです。私とあなたが，目の前の「何か」について話ができるのは，それが，単なる「何か」ではなく，「テーブルの上の人形としての何か」，「テーブルの上の人形という意味をもつ何か」だからです。言いかえれば，目の前の「何か」が，意味をもつからこそ，その意味をもつ「何か」について，話し合う，動かしてくれと頼み頼まれる，等々といった，私とあなたに「共通の経験」が可能になってくるわけです。

「共通の経験」が意味をつくる

意味は，異なる世界をもつ人たちに，共通の経験を与えます。しかし，重要なことは，そもそも，意味が，異なる世界をもつ人たちの共通の経験の中から生まれるということです。異なる世界をもつ人たちの共通の経験の中から生まれ，異なる世界をもつ人たちに，共通の経験を与えるのが，意味なのです。

もう一度繰り返しますと，意味の定義は，「見え姿の違いを越えて，共通の経験を与えてくれるもの」でした。しかし，そもそも意味がどうやって生まれてくるかというと，「見え姿の違いを越えて，異なる世界を持つ人たちが，共通の経験を持つこと」から生まれるのです。

この点，食物と同じです。食物とは，食べることのできる事物です。しかし，この世に人間が登場する前から，どの事物が食物であるか，決まっていたわけではありません。ある事物が，どうして食物になったかというと，多くの人間が，それを「食べた」からです。世界中を見渡せば，ある地域では食されるけれども，他の地域では食されないものがたくさんあります。例えば，日本人にとっては，おいしい食物である魚貝類の一部は，欧米人にとっては，およそ食すべきものとは思われていないようです。しかし，そのような魚貝類が，なぜ，日本人にとっては食物であり，欧米人にとっては食物ではないのかと言えば，日本人の多くは，その魚貝類を食べたけれども，欧米人の多くは食べなかったからです。食べたからこそ，食物（＝食べられるもの）になるわけです。つまり，「ある事物を食べる」という多くの人々の経験によって，その事物が食物になったわけです。

意味も同じです。意味は，一旦できてからは，見え姿の違いを越えて，共通

の経験を与えます。しかし，そもそも，意味がどうやってできたかと言えば，共通の経験を通じてできてきたのです。では，共通の経験を通じて意味ができるプロセスを見ていきましょう。

互換が共通の経験を与える

互換的身体を思い出して下さい。ある身体とある身体が，根こそぎ入れ替わる――そんな身体が互換的身体でした。身体が互換すれば，身体に広がる世界も，根こそぎ変化します。したがって，互換的身体に広がる世界では，すべてのものが，今ここだけの「何か」に過ぎません。今ここを越えるものとしての「何か」――意味をもつ何か――は，皆無です。

いくつかの身体が頻繁に互換しあったとします。しかも，その時々の，今ここだけの世界の経験が，十分，強烈だったとします。この頻繁な互換は，一種独特の効果を生み出します。つまり，頻繁な互換によって，互換し合ういずれの身体も，ある経験を共有することになります。例えば，A，Bという2つの身体が，頻繁に互換したとします。AがBになり，BがAになれば，その世界は根こそぎ変化してしまいます。しかし，2つの身体が，再び入れ替わり，さらに，もう一度入れ替わるという具合に，何度も何度も入れ替わるとどうなるでしょう。このような入れ替わりが繰り返されれば，Aの身体は，何度もBの身体の世界を経験していますし，Bの身体も，何度もAの身体の世界を経験しています。そこには，Aの身体にも，Bの身体にも共通する経験が生まれるはずです。

この「共通の経験」こそ，「意味」に他なりません。前に，意味について，こう言いました――意味とは，見え姿の違いを越えて，共通の経験を与えてくれるものだけれども，そもそも意味がどうやって生まれてくるかというと，「見え姿の違いを越えて，異なる世界を持つ人たちが，共通の経験を持つこと」から生まれるのです，と。今，私たちは，もっと明確に，意味の誕生を述べることができます。意味は，頻繁に互換し合う身体たちに生じる共通の経験から誕生するのです。

ここで，看護現場の事例を引きながら，頻繁に互換し合う身体たちの中から，共通の経験，すなわち，意味が誕生するプロセスを見ていきましょう。

Tさんの事例

再びTさんの事例を見ることにしましょう（54頁）。さきほど，この事例の前半と後半で，清拭や洗髪についての「である規範」や，担当看護婦についての「である規範」が大きく変化したことを説明しました。繰り返しておきますと，清拭も洗髪も，「看護婦の仕事である」という「である規範」は，「看護婦と家族が一緒にする仕事である」という「である規範」へと変化しました。また，「看護婦は，最低限の仕事だけして，病室を去っていく人物である」という「である規範」は，「看護婦は，その来室が待ち遠しい人物である」という「である規範」に変化しました。

この「である規範」の変化は，すなわち，意味の変化でもあります。つまり，清拭や洗髪の意味が，「看護婦の仕事としての清拭や洗髪」だったのが，「看護婦と家族が一緒にする仕事としての清拭や洗髪」に変化しました。また，看護婦の意味が，「最低限の仕事だけして，病室を去っていく人物としての看護婦」だったのが，「来室が待ち遠しい人物としての看護婦」に変化しました。

この大きな意味の変化のきっかけになったのが，妻と看護婦の涙ながらの会話でした――「大丈夫ですか。毎日大変ですね。辛いですね」「ありがとうございます。私は，あの人に何もしてあげられない。何も言えない。病気のことに触れられるのが怖いんです」。このとき，おそらく，妻と看護婦の身体は，互換的身体の状態にあったのでしょう。妻は，「夫に何もしてやれない。病気のことに触れるのが怖い」と心情をうちあける身体と，その涙まじりの声を聞く身体の間を行ったり，来たりしたはずです。また，看護婦も，決して，クールに妻の訴えを聞いたのではなく，涙ながらの訴えを聞く身体と，涙ながらに訴える身体の間を行き来したにちがいありません。このような身体の互換，身体の溶け合いを通じて，両者に共通の経験が生まれ，その共通の経験をきっかけに，意味の変化がもたらされたのです。

次に，もう一つ，新しい事例を紹介します。

Fさんの事例

Fさんは，51歳，胃ガンの末期で，2度の手術を受けていた。Fさんは，離婚の後，娘2人と生活していた。元来は，よく冗談も言う明るい性格の人で

あった。しかし，病状が進むにつれ，全身の衰弱と痛みがひどくなり，家族以外とは，ほとんど会話を交わさなくなった。看護婦のケアを拒否することもしばしばであった。私は，何とかFさんの精神的苦痛をやわらげるよう援助したいとは思っていたが，Fさんは，昼間もカーテンを閉めきり，声をかけるきっかけすらつかめずにいた。

そんなある日，一緒に夜勤をしていた卒後2年目の看護婦が，「Fさんが，あー，もう嫌になった，痛い」と言っていたと，私に教えてくれた。Fさんと話すきっかけすらつかめずにいた私は，どうしてFさんと話ができたのか，と尋ねた。「私は何も言ってません。ただ少し時間があったので，じっと側にいたんです。するとFさんが，『じっとしてていいんか，他にすることがあるやろ』と話しかけてきたんです」。彼女は，こう説明してくれた。

それを聞いた私は，彼女のとった行動と，自分自身がしようとしていたことの違いがどこにあるのかを考えた。私は，Fさんに対する援助の方法を，技術的に選択しようとするあまり，患者の気持ちを忘れていたのではないか，と感じた。

その後，Fさんは，少しずつではあるがケアを受入れるようになった。また，気分のいいときには，冗談も言うようになった。

この事例は，先のTさんの事例に登場した，涙ながらの互換とはまたちがう互換の可能性を教えてくれます。いわば，静かな時間の流れの中での互換です。新しい意味は，それまでの意味を忘れる（あるいは，それまでの意味に捕らわれすぎない）ことを通じて誕生します。事例の筆者は，「私は，Fさんに対する援助の方法を，技術的に選択しようとするあまり，患者の気持ちを忘れていたのではないか」と振り返っています。このセリフは，「自分が身につけてきた，専門的，技術的な意味づけに捕らわれすぎていた」と言っているように聞こえます。

卒後2年目の看護婦が，特に何もしゃべらず，じっとFさんのかたわらに座っていた間，静かな時間の流れの中で，看護婦の身体とFさんの身体は，何度も何度も互換したのではないでしょうか。おそらく，静かに流れる時間を共有しながら，看護婦は，自分の職務を忘れて，何度もFさんになったのでしょう。

また，Fさんも，何度も看護婦になったにちがいありません。そして，しばし看護婦だった自分から，ふとベッドの上の自分に戻ったときに出た言葉が，「じっとしててていいんか，他にすることがあるやろ」という言葉だったのでしょう。その言葉は，ちょっと前までの自分（ベッドのそばに座っていた自分）に対して発せられた言葉のようです。

この互換的身体の状態から生まれた共通の経験は，卒後2年目の看護婦の意味，事例の筆者も含めた他の看護婦の意味，さらには，看護婦が行なうケアの意味を変化させていったようです。こうして，看護婦によるケアは，「受け入れるもの」という意味をもつようになり，看護婦は，「冗談だって言える相手」という意味をもつようになったのでしょう。

超越的身体

話を，もう一歩，先に進めます。では，共通の経験から生まれる意味は，どのような身体に対して現われてくるのでしょうか。ここで，重要なことは，互換する身体AとBに共通な経験は，あくまでも，AとBに共通の経験であって，Aにとっての世界と同一ではないし，Bにとっての世界とも同一ではないということです。つまり，共通の経験は，身体Aにとっての世界そのものでもなければ，また，身体Bにとっての世界そのものでもありません。

したがって，共通の経験から生まれる意味は，身体Aでもなく，身体Bでもない，第三の身体にとっての世界である，ということになります。言いかえれば，第三の身体は，AとBを代表して，AとBの世界の共通部分，そして，そこから生まれた意味だけを対象にする身体なのです。第三の身体は，AとBの個別的世界を超えた，両者に共通の経験から生まれた意味を対象にしますので，超越的身体と呼ぶことにします。また，身体AとBは，互換し合うにしても，目に見える身体ですが，超越的身体は，Aでもなく，Bでもない，ちょうど両者の中間のどこかに浮上してくる「神」のような，見えない身体です。

意味が，超越的身体の対象であるならば，意味は，超越的身体の声だと言ってもいいでしょう。ここで，私たちに何かが現前するのは，その何かが意味をもっているときだけだ，ということを思い出して下さい。ということは，私たちに何かが現前するのは，超越的身体の声（意味を与える声）が聞こえるとき

だけだ，ということになります。もし，何かが目の前にあっても，超越的身体の声が聞こえてこなければ，その何かは現前しないのです。前に，本棚の奇妙な多角形が現前しないという話をしました（36頁）。あのような多角形が現前しないのは，あのような多角形の意味を与える，超越的身体の声が形成されていないからです。

超越的身体（トトロ）の勢力圏に入ったとき，意味が生まれる

超越的身体の声が聞こえる範囲を，超越的身体の勢力圏と呼ぶことにします。今，あなたの目の前にボールペンが現前しているのは，あなたは，ボールペンという意味を与える超越的身体の勢力圏にいるからです。その勢力圏は広大です。ボールペンをボールペンとして使用している，非常に多くの身体が，その勢力圏に入っています。また，あなたに，そろそろ買いかえどきのテレビが現前しているとしたら，そのテレビに，「そろそろ買いかえないといけないもの」という意味を与える超越的身体の勢力圏に，あなたが入っているからです。その勢力圏には，「このテレビ，そろそろ買いかえようね」と話し合っている家族の身体が入っています。

超越的身体が規範を与える

本節のタイトルは，「規範と雰囲気の形成プロセス」です。これまで，私たちは，超越的身体の生成による意味の形成プロセスを述べてきましたが，実は，意味の形成プロセスは，規範の形成プロセスでもあるのです。前に，規範には，「べし規範」と「である規範」があることを述べました（70頁）。「べし規範」とは，「～すべし（べからず）」と表現できる規範であり，「である規範」とは，「～である（がある）」と表現できる規範でした。言いかえれば，「べし規範」とは，「～すべし（べからず）」という声であり，「である規範」とは，「～である（がある）」という声だということです。

「庭の花に水をやるべし」ということは，庭の花が，単なる庭の花ではなく，

「水をやらなければならないもの」という意味をもっているということです——「水をやらなければならないもの」としての花，だということです。逆から言えば，「～すべきもの」という意味を与える超越的身体の声は，「～すべし」という「べし規範」を与える声でもあるのです。

同じことは，「である規範」についても言えます。「これは，時計である」ということは，これが，単なる「これ」ではなく，「時計」という意味をもっているということです——時計としてのこれ，だということです。逆から言えば，～という意味を与える超越的身体の声は，「～である」という「である規範」を与える声でもあるのです。これで，意味を与える超越的身体の声は，すなわち，規範を与える声でもあることがおわかりいただけたと思います。

雰囲気の形成プロセス

雰囲気の形成プロセスは，規範の形成プロセスと同じです。つまり，身体の互換を通じて形成される超越的身体こそ，雰囲気の源泉なのです。前に，規範は，言語的に表現可能であるのに対して，雰囲気は，言語的に表現できないのが特徴だと述べました（70頁）。規範が言語的に表現可能なのは，規範（そして，意味）を与える超越的身体の声が，～すべし，～である，のような言語的な声だからです。

一方，超越的身体の声には，はっきりした言語にはならない声もあります。それは，私たちの声と同じです。私たちの声には，言語で発する声もあれば，オーという叫び声，音楽のメロディのような声もあります。そのような言語にはならない，非言語的な声を超越的身体が発するとき，雰囲気が生まれます。そして，雰囲気によって，私たちには，表情を帯びた世界や色あいに満ちた世界が現前します。

以上，規範と雰囲気について述べたことをまとめておきましょう。身体には，2つの水準があります。一つは，「互換する身体」の水準，もう一つは，「超越的身体」の水準です。超越的身体は，互換する身体たちの中から生成されます。そして，互換する身体の水準にある身体たちが，互換する身体でありつつも，生成された超越的身体の勢力圏にも入ったとき，規範や雰囲気が成立します。

規範や雰囲気は，超越的身体の声です。正確に言えば，互換する身体であると同時に，超越的身体の勢力圏にも入った身体に対する，超越的身体の声なのです。私たちの身体は，さまざまな集合体の中で，互換し合い，超越的身体をいくつもいくつも生成し，その一つ一つの勢力圏に入っています。

今ここを越えた「それ以上のもの」	「意味」 ←	超越的身体
としての	をもつ	
今ここだけの「何か」	「何か」 ←	互換的身体

第６章
異質性
「かや」を変える原動力

本章のポイント

集合性（かや）は，集合的行動とコミュニケーションという２つの面をもつことを説明しました。私たちは，たった一つの集合性（たった１枚のかや）にだけ包まれているわけではありません。生まれてこのかた，さまざまな人と環境とともに，多くの集合性に包まれてきています。世の中には，無数と言っていいくらい多くの「かや」が形成されており，それらの「かや」は，包む人と環境を異にしています。自分とは異なる「かや」に包まれている人は，異質な存在です。しかし，その異質性こそ，「かや」を変化させる原動力になるのです。

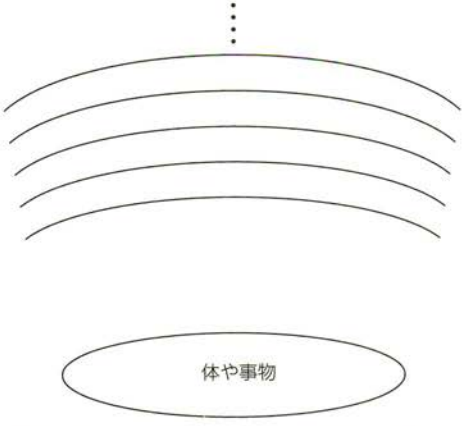
これまで，集合体の全体的性質，すなわち，集合性は，2つの側面からとらえられることを述べてきました。2つの側面とは，第4章で説明した集合的行動と第5章で説明したコミュニケーションです。集合的行動とは，集合体の人と環境を，一つの全体として観察したときの動きでした。一方，コミュニケーションとは，雰囲気や規範が形成されていくプロセスのことでした。集合性は，必ず，集合的行動とコミュニケーションという2つの面をもっています。

グループ・ダイナミックスの基本を述べた第3章で，集合性を「かや」にたとえました。いかなる集合体も，何らかの「かや」に包まれています。集合的行動は，集合性の観察可能な面ですから，「かや」の前姿に当たります。一方，コミュニケーションは，直接観察できませんから，「かや」の後姿に当たります。

1．「かや」の多層的重複構造

「かや」の多層性

ここまでは，話をわかりやすくするために，あたかも，一つの集合体が一枚の「かや」に包まれている（一つの集合体に一つの集合性がある）かのように話をしてきました。しかし，現実の集合体を問題にするならば，集合体を包む「かや」が，たった一枚しかない（集合体が，集合性を一つしかもっていない）ということは，まずありえません。むしろ，集合体は，何枚もの「かや」に包まれている（多数の集合性を持っている）というのが，現実の集合体の姿です。



集合体は何枚もの「かや」に包まれている（多層性）

例えば，同じ病棟で勤務している看護婦の集合体を見ても，

さまざまな「かや」に包まれています。夜勤の人から日勤の人への申し送りをめぐる「かや」，朝の回診をめぐる「かや」，新人の指導をめぐる「かや」，等々。これらの一つ一つは，すべて，同じ職場の看護婦を包んでいる「かや」なのです。

このように，一つの集合体は，さまざまな「かや」に包まれています。言いかえると，何枚もの「かや」に多層的に包まれているわけです。これを，「かや」の多層性と呼ぶことにします。多層的な「かや」の一つ一つが，集合的行動とコミュニケーションという2つの面をもっていることは言うまでもありません。

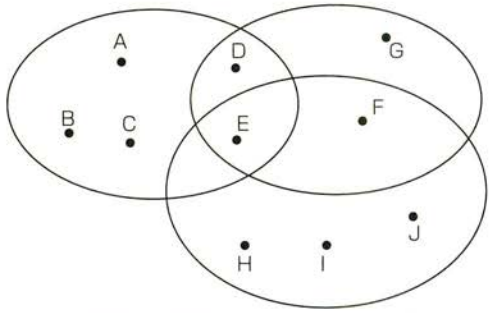
集合体によっては，その中の人々が非常に親密で，お互いのことが手に取るようにわかるような集合体があります。あうんの呼吸が通じ合うような集合体です。従来，このような親密さは，心の内面で感じられている親密さと考えられてきました。つまり，「肉体に内蔵された心」という常識に基づいて，親密さは，心の状態の一つ，感情の一つと考えられてきました。

しかし，親密な集合体というのは，決して，心の状態などではなく，「かや」が非常に多層的に形成されているということなのです。例えば，長年つれそってきた老夫婦（という集合体）。食事中の箸の上げ下ろしのような，相手のちょっとしたしぐさからも，相手が何かいつもと違うことを察知します。これは，この集合体が，箸の上げ下ろしのような些細なことに関する「かや」も含めて，非常に多くの「かや」に，多層的に包まれているからです。

「かや」の重複構造

現実の集合体を包んでいる「かや」は多層的であるだけではありません。多くの「かや」が，部分的に重なりあいながら存在しています。例えば，図に示しましたように，ある一群の「かや」は，A，B，C，D，Eの5人を包み，別の一群の「かや」は，D，E，F，Gの4人を包み，さらに別の一群の「かや」は，E，F，H，I，Jの5人を包む，という具合に，部分的に重なりあっています。このような部分的に重なり合う構造を，重複構造と呼ぶことにします。

先ほど，親密さは「かや」の多層性によって生まれることを述べましたが，



いくつもの「かや」が重複構造をなしている

今度は，個性（ユニークさ）について考えてみましょう。個性も，普通は，心（あるいは，頭）の個性というように考えられています。しかし，本当に，そうなのでしょうか。

今，ある人が，オギャーと生まれて以来，包まれてきた「かや」を，すべて描き出したとします。もちろん，そんなことはできるわけがありませんが，仮に描くことができたとします。そして，その人が，一番下から自分を包んでいる多くの「かや」を見上げたとします。こうして見えるすべての「かや」が，その人を今までに包んできた「かや」群です。おそらく，この人が包まれている「かや」群と全く同じ「かや」群に包まれている人は，この人以外にはいないでしょう。

つまり，私たちは，一人一人独特の「かや」群に包まれています。この「かや」群の独特さこそ，個性あるいはユニークさといわれているものに他なりません。個性は，決して，人の心あるいは内面の個性ではありません。その人を包む「かや」群の個性です。

2．異　質　性

異質性との出会い

ある「かや」に包まれている人たちにとって，自分たちの「かや」に包まれ

ていない人は異質な存在です。言いかえれば，その人は異質性をもっています。なぜならば，自分たちが行なっている集合的行動は，その人には通用しませんし，自分たちがしたがっている規範（べし規範・である規範）も，その人には通用しないからです。一緒に何かやろうとしても無理。あたりまえと思っていた認識や道徳も通用しない。それが異質性です。

現実の「かや」は，多層的重複構造をなしています。したがって，ある人とある人が，同じ「かや」には包まれていない，異なる「かや」に包まれているという関係が，いたるところに存在しています。そのような関係では，互いに，相手は異質性を持っているわけです。

そのような関係で，２人の間に何も起こらなければ，それまでです。ちょうど，道ですれちがった見知らぬ２人が，すれちがったことさえ気づかないようなものです。「かや」に何の変化も生じません。しかし，２人の間に何かが起こったとします。偶然でもよいし，あるいは，何かしら外部からの力があって，２人の間に何かが起こったとします。何でもかまいません。２人の前で，急に老人が転んで，２人で協力して助けおこすことになった，急に配置転換になって，まったく知らなかった２人が一緒に仕事をするようになった，等々，何でもかまいません。

こうして２人の間に何かが起こるということは，２人を包む新しい「かや」ができるということです。２人は一つの集合体として，何らかの集合性（かや）に包まれていきます。２人とその環境には，何らかの集合的行動が観察されるようになりますし，何らかの雰囲気や規範が形成されていきます。

場合によっては，けんかや争いでもよいのです。道ですれちがう２人が，偶然，激しくぶつかり合い，けんかになったとします。もちろん，路上のけんかを奨励する気はありませんが，新しい「かや」ができるという点では，けんかも同じです。第４章（53頁）で述べましたように，対立する２人（あるいは，２集団）も，ひとまとめに見れば，「かや」に包まれています。「かや」に包まれていると言っても，協力的な「かや」，ハッピーな「かや」だけではないことを忘れないで下さい。

協力的な「かや」であろうと，けんかの「かや」であろうと，２人を包む新しい「かや」ができると，それまで２人が別個に包まれていた「かや」にも変

化が生じます。少なくとも，変化が生じる可能性が出てきます。異質性は，「かや」を変化させる原動力になりうるわけです。

異質性による「かや」の変化

ここで，異質性との出会いによって「かや」が変化するメカニズムを見ておきましょう。今，Aという「かや」に包まれているaさんと，Bという「かや」に包まれているbさんがいるとします。2人は，別の「かや」に包まれていますから，互いに異質性をもっています。そんな2人が出会い，2人を包む新しい「かや」Xができたとします。

aは，もともと，「かや」Aに包まれていますので，「かや」Aの集合的行動の一角を演じていますし，「かや」Aの規範にしたがっています。同じく，bは，「かや」Bの集合的行動の一角を演じていますし，「かや」Bの規範にしたがっています。そんな2人が，「かや」Xをつくるわけですから，「かや」Xは，いわば，「かや」Aと「かや」Bのブレンドされたものになるでしょう。

a，bを包む「かや」Xが，「かや」Aと「かや」Bのブレンドであれば，「かや」Bの性質は，aを介して，「かや」Aに浸透していきますし，「かや」Aの性質は，bを介して，「かや」Bに浸透していくでしょう。こうして，「かや」Xができたことによって，「かや」Aも，「かや」Bも変化していくのです。

第4章（64頁）で述べた，集合的行動の無縁圏，第5章（74頁）で述べた，コミュニケーションの無縁圏を思い出してください。集合体が，特定の集合的行動を行なうことによって，無縁なものとなった集合的行動が，集合的行動の無縁圏，集合体が，特定の規範や雰囲気を形成することによって，無縁なものとなった規範や雰囲気が，コミュニケーションの無縁圏でした。

上の例で，集合体Bの集合的行動や規範・雰囲気が，集合体Aの無縁圏にあったとき，もし，「かや」Xができるならば，集合体Aの「かや」は，大きく変化するでしょう。何しろ，それまで想像もしなかった集合的行動が行われるようになり，それまでは，エッ，ウッソーだった，規範や雰囲気がもたらされるのですから。

このように，互いに異質な少数の身体の間に，新しい「かや」ができることによって，それまで，少数の人が別々に包まれていた大きな「かや」が変化し

ます。変化のきっかけは，異質性との出会いです。偶然の出会いもあるでしょうし，大きな外力によってもたらされる出会いもあるでしょう。このような異質性との出会いの可能性は，多層的重複構造のいたるところに存在しています。いたるところで異質性と異質性が出会い，新しい「かや」が発生することによって，多層的重複構造をなす「かや」群が，次々に変化していくのです。

異質性と言うと，ずいぶん，たいそうなことに聞こえるかもしれませんが，そんなことはありません。先に，個性（あるいは，ユニークさ）の話をしたことを思い出してください。そのとき，ある人の個性は，決して，その人の内面の個性ではなく，その人を包んでいる「かや」群の個性であることを述べました。そして，ある人と同じ「かや」群に包まれている人は，その人以外にはいないことも述べました。ということは，皆，独特の「かや」群に包まれているわけですから，皆，異質性をもっていることになります。この皆がもっている異質性が，多層的重複構造を通じて，「かや」群を変化させていくのです。

新しい知識を学ぶということ

私たちは，生まれてこのかた，数多くのことを学んでいます。ミルクの飲み方，スプーンの持ち方に始まり，一つ一つ言葉を覚え，学校でも，多くのことを学びます。また，職場で，地域で，あるいは，マスコミから，さまざまな知識を学びます。このように，何かを学ぶときには，上で述べたような「かや」の変化が起こっています。

例として，学校の先生から，「三角形の内角の和は180度」という知識を学ぶ場合を考えてみましょう。この場合，先生は，すでに，「三角形の内角の和は180度である」という「である規範」の「かや」に包まれています。その「かや」は，「三角形の内角の和は180度」ということを知っている，非常に多くの人々を包んでいます。教室で行なわれている，三角形についての授業は，この先生と生徒たち（という集合体）の集合的行動です。先生と生徒たちは，一つの「かや」に包まれています。そして，この学級集合体の中で，先生の身体を介して，「三角形の内角の和は180度である」という「である規範」の「かや」が，生徒たちの集合体の「かや」に浸透していくのです。もし，生徒の全員が，「三角形の内角の和は180度」を理解できたならば，「三角形の内角

の和は180度である」という「である規範」の「かや」は，生徒の数だけ広がることになります。

同じことは，一対一で，何かを教え，教えられる場合にも当てはまります。あなたが，友人から，Eメールの使い方を教えてもらったとします。友人の身体は，すでに，Eメールを使う人々の「かや」に包まれていました。その「かや」に包まれる人々にとって，あなたは異質であり，その「かや」に包まれている人々は，あなたにとって異質でした。そして，今，友人とあなたの小さな「かや」ができたのです。この小さな「かや」の形成をきっかけに，友人を介して，あなたも，Eメール・ユーザーの「かや」に包まれます――それが，Eメールの使い方を学ぶということです。

3．「かや」がわかるということ

内部者 兼 外部者

私たちは，他人が包まれている「かや」に気づくことがあります。例えば，新しい職場に移ったとき，「へー，ここでは，朝の申し送りはこんなふうにやるのか」と思ったとします。これは，申し送りのやり方という集合的行動に気づいたということです。あるいは，申し送りのときに使用される記録用紙に，「おやっ」と思うかもしれません。それは，集合的行動の一部である，物的環境のちがいに「おやっ」と気づいたわけです。あるいは，申し送りのときの役割に，「おやっ」と思うかもしれません。それは，集合的行動の一部である「もの」的環境の違いに「おやっ」と気づいたわけです。

集合的行動とコミュニケーションは表裏一体です。新しい職場の集合的行動に，「おやっ」と思うときには，そこでのコミュニケーションにも，「おやっ」と思っているのです。今まで考えてもみなかったやり方で申し送り（という集合的行動）を行なっている職場は，それなりの雰囲気や規範を形成しているはずです。例えば，その申し送りは，「新人を育てるべし」という「べし規範」に支えられているのかもしれません。

このように，ある集合体が包まれている「かや」に気づくとき，言いかえる

と，ある集合体の集合性が現前するとき，あなたと集合体は，どのような関係にあるのでしょうか。もちろん，観察者であるあなたが，集合体を一線のこちら側から観察しているのではありません。観察者（あなた）と観察対象（集合体）の間に一線など引けないということは，すでに，第1章で述べたとおりです。

ここで，重要なことが2つあります。

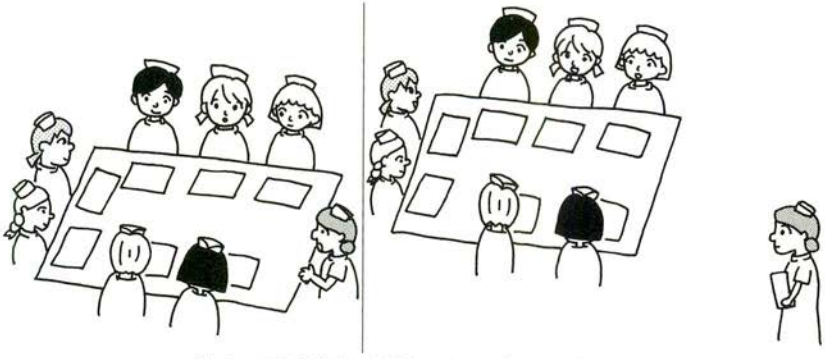
（1）まず，あなたは，集合体が包まれている「かや」の内部者でなければなりません。もし，仮に，あなたが，集合体の「かや」の完全な外部者だったとします。ということは，集合体の人々に現前する世界と，あなたに現前する世界は，完全に異なるということです。そうだとすれば，集合体の人々がやっていることは，あなたにとって，文字どおり，チンプンカンプン，一体何をやっているのか皆目わからないはずです。

もちろん，あなたも集合体の人々も，看護職という大きな「かや」に包まれているわけですから，皆目わからないというのは言い過ぎでしょう。しかし，申し送りの特徴を理解できるということは，それを理解できる程度には，同じ「かや」に包まれている必要があります。おそらく，学校を出て，看護婦になったばかりのひとは，そのような「かや」には包まれていないでしょう。申し送りのさらに細部について，「おやっ」と気づくには，さらに深く「かや」の内部者であることが必要です。

（2）しかし，逆に，もし，あなたが，集合体とまったく同じ「かや」に包まれているとしたら，つまり，あなたが集合体の完全な内部者だったとしたら，どうでしょうか。そのような場合には，あなたは，何も「おやっ」と思わないでしょう。自分が完全に織り込まれている集合的行動や，自分が完全に浸りきっている雰囲気や規範に，気づくことはありません。自分自身を包んでいる「かや」には気づけないのです。

ということは，あなたが「かや」に気づくときには，あなたは，「かや」の外部者でもあるということです。そして，「かや」の外部者あるということは，あなたは，内部者にとっての異質性だということです。

（1）と（2）から，あなたが，ある集合体の「かや」に「おやっ」と気づくとき，あなたは，その「かや」の内部者であると同時に外部者でもあるとい



「かや」の内部者かつ外部者のとき，「かや」がわかる

うことがわかります。集合体の人々と，同じ「かや」にも包まれながら，異なる「かや」にも包まれているとき，あなたは，「おやっ」と「かや」に気づくことができます。

4．自分を包む「かや」に気づく

自分を包む「かや」はわからない？

自分が包まれている「かや」に気づくのは，非常に難しいことです。なぜ難しいかは，「かや」の2面――集合的行動とコミュニケーション――の説明を思い出せば，わかります。まず，集合的行動。集合的行動とは，集合体の身体と事物の全貌を視野に入れたときに，観察できる集合体全体の動きです。したがって，あなた（の身体）を包む「かや」の集合的行動を観察しようとすれば，あなた自身をも含めて，すべての身体と事物を視野に入れなければなりません。しかし，あなたの身体をも含めて，あなたの視野に入れることは不可能です。

次に，コミュニケーション。「べし規範」にしても，「である規範」にしても，その多くは，集合体の人たちが，意識せずして，したがっている規範です。意識せずして，したがっているということは，したがっている規範に気づけないということです。また，雰囲気についても，同じことがいえます。あなたを包んでいる雰囲気は，まさに，あなたを包む空気のようなものです。自分は空気

に包まれているなどと，改めて意識しないように，自分が包み込まれている雰囲気を自覚することなど，ほとんどありません。

以上のように，「かや」の2面である，集合的行動とコミュニケーションのいずれについて考えてみても，自分を包んでいる「かや」に気づくのは難しい，と結論せざるをえません。ここまで，「かや」について勉強しておきながら，自分の「かや」に気づくのは難しいというのでは，なんとも残念，無念，――というより，ここまで読者をひっぱった本書の著者に腹が立つ――。ご安心ください。自分の「かや」に気づく方法は，あるのです。

前節で，「かや」がわかるには，「かや」の内部者であると同時に，外部者でもあることが必要だ，と述べました。このことは，自分を包む「かや」がわかる場合についても，当てはまります。つまり，自分の「かや」に気づくには，自分の「かや」の内部者であると同時に，外部者でもあることが必要なのです。自分の「かや」の内部者であることは当然ですから，問題は，「外部者でもある」というところです。これを，さらにつきつめると，自分の「かや」の外部者になった分だけ，自分の「かや」が見えてくる，ということになります。

異質性との出会いによって外部者に

では，どうしたら，自分の「かや」の外部者になれるのでしょうか。ここで，本章第2節「異質性」で説明したことを思い出してください。そこでは，「かや」Aに包まれている身体aと，「かや」Bに包まれている身体bが，「かや」Xをつくることによって，「かや」Aと「かや」Bが変化していくプロセスを説明しました。「かや」Xができるまでは，aとbは，別々の「かや」に包まれていたわけですから，互いに異質性をもっていたわけです。そんな2つの身体が，小さな新しい「かや」Xをつくることによって，大きな「かや」A，Bに変化のきっかけがもたらされるのでした。

実は，このプロセスは，自分の「かや」に気づくプロセスでもあります。aとbでつくった「かや」Xは，いわば，AとBという2つの「かや」のブレンドです。したがって，aは，「かや」Xに包まれたときから，「かや」Bによっても動かされるようになっています。「かや」Xに包まれるまでは，「かや」Aによってのみ動かされていましたが，「かや」Bによっても動かされるように

なったのです。ということは，aは，「かや」Bによって動かされるようになった分だけ，「かや」Aの外部者になったわけです。こうして，aは，「かや」Aの内部者でも外部者でもある身体になり，外部者になった分だけ，自分を包んでいる「かや」Aのことがわかるようになるのです。

今度は，同じプロセスを，「かや」Bの方から見てみましょう。最初，集合体Bにとって，身体aは，まったくの外部者でした。おそらく，aが，集合体Bの動きを見ても，大方，チンプンカンプンだったでしょうし，第一，aが，集合体Bに関心を向けることすらなかったでしょう。しかし，aとbによる「かや」Xができると，aは，ちょっとだけですが，「かや」Bの内部者にもなります。Aが，「かや」Xに強く包まれるにしたがって，aは，一層，「かや」Bの内部者になっていくでしょう。ということは，aは，「かや」Bにとって，内部者でもある外部者ということになります。したがって，aは，「かや」Bについても，いろいろ気づくことができるわけです。

このように，異質性との出会いは，自分の「かや」に気づくためにも，また，自分の「かや」を変化させていくためにも，きわめて重要です。とは言うものの，異質性と出会い，つきあうのは，どうしても，敬遠されがちです。何しろ，自分の集合体では，あうんの呼吸でやっている集合的行動も通用しませんし，自分の集合体では当たり前の規範も通用しない身体，それが異質な身体なのですから。へたに，そんな身体とつきあった日には，明日からの生活がめちゃめちゃになるかもしれない，リスクがいっぱい，つきあわない方が無難――そう考える理由は十分わかります。しかし，そうかといって，あまりにも異質性を遠ざけすぎると，今度は，自分の「かや」に気づいたり，自分の「かや」を変えるきっかけをも遠ざけることになってしまいます。

前に，人の個性は，その人の内面的な持ち味ではなく，その人が，生まれてこの方，包まれてきた「かや」の個性だと述べました（94頁）。どの人も，皆，異なる「かや」群に包まれています。つまり，だれでも異質性をもっているのです。従来，日本社会は，同質性を重視し，異質性を押え込む傾向にありました。今，私たちは，どのように異質性と向き合っていくかを，改めて考えてみる時期にきているのではないでしょうか。

第7章

「肉体に内蔵された心」という常識のルーツ

本章のポイント

私たちは，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識と訣別し，「かや」のイメージとともに，人間科学としてのグループ・ダイナミックスの世界を旅してきました。その旅も，本章で終わりです。旅の終わりに当たって，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識のルーツを見定めておくことにします。私たちが，そのような常識を持っているということは，個人とは，心を内蔵した肉体「である」という「である規範」の声にしたがっているということです。本章では，そのような「である規範」を特徴とする「かや」が，どのようにしてできてきたのかを説明します。

1．今の心理学では心を説明できない

自然科学は外界を解明する科学

私たちは，第1章で，自然科学とは異なる，もう一つの科学，人間科学という世界があることを知りました。そして，第2章では，人間科学の世界に旅立つ準備として，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識に訣別しました。その上で，第3－6章で，グループ・ダイナミックスという人間科学の一分野を実際に旅行してきたわけです。

この第7章（最終章）では，第2章で訣別した「個人＝心を内蔵した肉体」という常識，言いかえれば，「肉体に内蔵された心」という常識が，どのようにして形成されてきたのかを説明しておきましょう。人間科学としてのグループ・ダイナミックスは，ただ単に，「肉体に内蔵された心」という常識を無視するのではありません。第3－6章で説明したように，グループ・ダイナミックスは，「肉体に内蔵された心」という常識的前提とはまったく違う前提に立って理論を構築し，その理論に基づいて，「肉体に内蔵された心」という常識が，なぜ，どのようにして常識になったのかも，きちんと説明します。

第2章で，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，外界と内界を区別する常識と表裏一体であることを述べました。自然科学は，この常識に立って，外界を徹底的に解明してきましたし，今後も，解明を続けていくことでしょう。しかし，自然科学では，いくら外界を解明することはできても，内界を解明することはできません。さらに言えば，自然科学が外界を解明すればするほど，内界は，より一層不思議な世界，ミステリアスな世界として残っていくでしょう。外界について知れば知るほど，外界について，こんなに知ることのできる心（内界）は，どうなっているのか，まったく神秘的と言うよりない，となるわけです。21世紀には，脳科学が飛躍的に進歩すると言われていますし，実際，そうなるでしょう。しかし，脳科学の進歩と内界の解明は，別のことです。脳という外界について知れば知るほど，脳について，そんなに知ることのできる心（内界）は，一層，神秘的になるでしょう。だからこそ，人間科学が必要

なのです。人間科学は，外界と内界を区別する常識とは違う前提から出発します。そして，外界と内界を区別する常識で考えられている内界とは，本当は何であるのか，また，どのようにして形成されるのかを説明します。

行動主義心理学と認知心理学

心理学は，「個人＝心を内蔵した肉体」という前提に立ち，内界と外界を区別する自然科学の方法を使って，内界（肉体に内蔵された心）を解明しようとしてきました。現在の心理学は，大きく2つに分類することができます。一つは，行動主義心理学の流れをくむ心理学，もう一つは，認知心理学の流れをくむ心理学です。

まず，行動主義心理学というのは，個人の内面の心理は不問にして，もっぱら，個人に外から与えられる刺激と，それに対する個人の反応の関係を解明していこうとする心理学です。行動主義心理学でも，刺激と反応の関係を説明するために，内面のメカニズムについての概念――例えば，学習，動機，等――が使用されることもありますが，やはり最も重要なのは，きちんと測定できる刺激と反応です。よく，人間の心について勉強しようと思って，心理学の本を開いたら，ネズミやハトのことが書いてあって，びっくり（ガッカリ）したという話を聞きますが，これも，内面の心理は一応不問にして，刺激と反応の関係だけを研究するのであれば，ある程度，動物で代用がきくだろうという，行動主義心理学の発想によるものです。

心理学のもう一つの流れ，認知心理学は，人間個人を，ちょうど一つのコンピューターにみたて，そのコンピューターの中で動いている（と想定される）プログラムを解明しようとしています。ご承知のように，コンピューターは，ふたを開けてみればわかるように，いろいろな部品からできた機械（ハードウエア）です。その点では，テレビや自動車と何も違いもありません。ただ，コンピューターの大きな特徴は，そのハードウエアの上で，さまざまなプログラム（ソフトウエア）を走らせることができるところにあります。同じハードウエアでも，ソフトウエアさえ変えれば，いろいろな動き方をしてくれます。同じコンピューターが，ワープロになったり，ゲーム機になったり，電子メールの送受信機になったりします。

認知心理学は，こう考えています――人間個人も，コンピューターのように，ハードウエアとソフトウエアからできている；そして，人間コンピューターのハードウエアは，生理学が研究してくれるとして，ソフトウエアを研究することこそ，心理学の役割だ，と。肉体に内蔵された心を，コンピューターに内蔵されたソフトウエアに見たてて研究しているのが認知心理学です。

以上のとおり，行動主義心理学は，内面の心を不問にして，もっぱら外界からの刺激と外界への反応の関係に注目しています。対照的に，認知心理学は，内面の心を，コンピューターのソフトウエアに見たてて研究しています。しかし，重要なことは，行動主義心理学も認知心理学も，「内界（心）と外界を区別する」前提の上に立っているということです。両者のちがいは，行動主義心理学が外界にこそ事実があると考えているのに対して，認知心理学は内界にこそ事実があると考えている点です。しかし，「内界と外界を区別する」前提に立脚しているという点において，行動主義心理学と認知心理学は，同じ穴のむじななのです。行動主義心理学，認知心理学を乗り越えるところに，人間科学への道が開かれるわけです。

そもそも，心理学は，最初の最初から，「肉体に内蔵された心」の存在を前提にするところから始まっています。つまり，心理学にとって，「肉体に内蔵された心」は「前提」であって，解いていく「問題」ではないのです。最初から，「肉体に内蔵された心」を自明なものとして前提にしてしまっては，もう，なぜ，そうなるのかという問いは放棄されてしまいます。したがって，なぜ，「肉体に内蔵された心」という観念が生まれたのかを問おうとすれば，「個人＝心を内臓した肉体」という前提とは異なる前提からスタートしなければなりません。

2．グループ・ダイナミックスによる心の説明

超越的身体の成長・崩壊

では，いよいよ，人間科学としてのグループ・ダイナミックスの立場に立って，内界，つまり，肉体に内蔵された心について説明することにしましょう。

まず，注意しておくべきことは，「個人＝心を内蔵した肉体」という個人観も，規範の一つだということです。それは，個人とは，心を内蔵した肉体「である」，という「である」規範です。あるいは，心とは肉体に内蔵されているもの「である」，という「である」規範です。

ということは，そのような規範の声を発する超越的身体が形成されているということです（86頁）。では，「個人＝心を内蔵した肉体」という規範の声を発する超越的身体は，どのような超越的身体なのでしょうか。

第5章で，超越的身体を，アニメのトトロにたとえました。トトロは，2人の子供とさまざまな自然物の身体が互換する（溶け合う）中から生成されました。したがって，トトロの勢力圏は，互換しあう子供の身体と自然物の身体です。父親の身体は，勢力圏には入りません。トトロ（超越的身体）は，自らを生成せしめた，互換する身体たちを勢力圏とし，その勢力圏の中にある身体たちに対して，規範を与える声を発するのです。

超越的身体は，一度，生成されれば，ずっとそのまま存続するのではありません。ほっておけば，すぐ消滅してしまいます。超越的身体を存続させるには，エネルギーが必要です。そのエネルギーこそ，勢力圏にある身体たちの互換です。身体の互換をエネルギーとして，超越的身体は存続できるのです。

噴水の上にのっているビーチボールを想像してください。吹き上がる噴水の水の上にのっているビーチボールです。超越的身体はビーチボール，身体の互換は吹き上げる水に例えることができます。ビーチボールが，今の位置にいることができるのは，吹き上げる水が支えているからです。水が1秒でも止まろうものなら，ビーチボールは地面に落ちてしまいます。それと同じように，身体の互換が停止すれば，超越的身体は消滅してしまいます。超越的身体は，常に，消滅の可能性をはらんでいるのです。

一方，噴水の水圧が上がったり，吹き上がる水流の本数が増えると，ビーチボールは，より高い位置に上がることができます。これと同じく，同じ身体たちであっても，その互換がより頻繁になったり，あるいは，今まで互換していなかった身体をも巻き込んで，互換しあう身体の数が増えると，超越的身体は，より強力になっていきます。強力になるとは，超越的身体が発する規範の声が，より明確になり，より多くの身体たちに対して発せられるようになるというこ

とです。

強力な超越的身体――より一般的な規範

ここで，重要なことが2つあります。まず，第1に，超越的身体が強力になって，より多くの身体たちに対して規範の声を発するには，規範の内容が，より一般的にならねばならないということです。一般的の反対語は，特殊的です。「昨日，母親が買ってきて，今，テレビの横にいけてあるチューリップを，握りつぶしてはいけないよ」というのは，非常に特殊的です。一方，「部屋にいけてある花を握りつぶしてはいけないよ」というのは，より一般的です。後者は，前者を包含しています。より多数の身体に対して，規範の声を発しようとすれば，規範の内容は一般的にならざるをえません。そうでないと，ある身体には，チューリップではなく，バラが現前しているのかもしれませんし，ある身体には，テレビの横ではなく，テーブルの上に花が現前しているかもしれないからです。

超越的身体が強力になるとは，より多くの身体を勢力圏にして，より一般的な規範の声を発するようになることです。それには，互換がより頻繁に行なわれること，あるいは，より多くの身体が互換するようになることが必要です。超越的身体が，ある程度まで強力になると，一時的に互換が減っても，あるいは，身体の数が少々減っても，超越的身体が消滅する可能性は小さくなります。ちょうど，噴水の水流の数は少なくても，非常に水圧が高ければ，一秒くらい水が止まっても，ビーチボールが地面までは落ちなくてもすむのと同じです（もちろん，ビーチボールの位置は，一時的に下がるでしょうが）。また，非常にたくさんの水流によって支えられていれば，いくつかの水流がストップしても，ビーチボールが少し降下するくらいですむのと同じです。しかし，あまりに長く水が止まったり，あまりに多くの水流がストップすると，ビーチボールは降下して，ついには，地面に落ちてしまいます。いかに強力になった超越的身体であっても，消滅の可能性がゼロというわけではありません。

強力な超越的身体――現前しない身体へ

重要なことの第2として，超越的身体が強力になると，超越的身体は，現前

しない身体へと近づいていきます。日常会話の言葉で言えば，見えにくい身体，さらには，見えない身体へと変化していくわけです。噴水の水圧が高く，水流の数も多いと，ビーチボールは，どんどん高い位置に押し上げられていき，次第に，見えなくなるのと同じです。

そもそも，超越的身体は，互換する身体のいずれとも同一ではない，第三の身体でした（86頁）。互換する身体は，いかに互換し続けてはいても，瞬間瞬間は，見える身体です。それに対して，第三の身体である超越的身体は，見えない身体です。

しかし，見える・見えないは，水と油のように，はっきり区別できるものではありません。むしろ，見える・見えないは，白色，うすい灰色，灰色，濃い灰色，黒色のような，程度の差です。超越的身体は，そもそも，互換する身体のように，はっきり現前する身体ではありませんが，そうかといって，最初から，まったく現前しないわけでもありません。ある程度，現前するわけです。

超越的身体が，ある程度，現前するとは，超越的身体が，現前する身体にオーバーラップするということです。つまり，超越的身体が，現前する身体と重なるかたちで形成されるわけです。一方，超越的身体がまったく現前しないというのは，超越的身体が，現前する身体とは，まったくオーバーラップしないということです。

見える超越的身体と見えない超越的身体とでは，見えない方が強力です。たとえ話をしましょう。超越的身体は，～である，～すべし，という声を発してくるわけですから，どこか職場の上司に似たところがあります。では，見える上司と見えない上司では，どちらが強力（こわい）でしょうか。見える上司ならば，どこにいるのかわかります。もし，なまけ心が頭を持ち上げてきたら，上司の目の届かない場所に行って息抜きをすればよいわけです。しかし，見えない上司だとそうはいきません。まさに，透明人間のような上司です。廊下の陰で一服しようと思っても，見られているかもしれません。トイレの中でも見られているかもしれません。本当に，不気味なまでに，強力です。

ここで，非常に強力になった超越的身体について考えてみます。超越的身体が非常に強力になるとは，非常に広大な勢力圏に対して，つまり，非常に多数の身体たちに対して，規範の声を発するようになるということです。同時に，

規範の内容が，非常に一般的になること，つまり，いつでも，どこでも，どんなことについても，当てはまるような内容になるということです。さらに，互換する身体から言えば，現前しなくなるということです。そうなると，どういうことが起こるでしょうか。今から，2つのケースを見ていくことにします。一つは，乳幼児のケース，もう一つは，近代社会のケースです。

3．人生初期における心のルーツ

母親にオーバーラップする超越的身体

まず，乳幼児のケースです。多くの場合，乳幼児の身体が，最も互換しあうのは母親の身体です。子が母に「なり」，母が子に「なる」という互換が頻繁に生じます。そして，その互換を通じて，超越的身体が生成されるのです。その超越的身体は，～である，～すべし，という規範の声を発してきます。その規範の声によって意味を与えられた事物や身体が，乳幼児に現前するようになります。例えば，白くておいしい事物（後になって，ミルクと呼ばれるようになる事物）や，決してさわってはいけない（さわるべからざる）事物（後に，ストーブと呼ばれるようになる事物）などが現前するようになるのです。

しかし，超越的身体が生成された当初は，まだ，見える超越的身体，現前する超越的身体です。また，超越的身体の勢力圏は小さく，規範の内容は特殊的です。超越的身体が現前する（見える）ということは，超越的身体が，互換する身体のどれかにオーバーラップしているということです。乳幼児と母親の場合に，超越的身体とオーバーラップするのは，母親の身体です。しかし，超越的身体イコール母親の身体，ではありません。超越的身体は，母子の身体が互換する中から，母子いずれの身体でもない，いわば，第三の身体として生成されたものです。その第三の身体である超越的身体が，母親の身体とオーバーラップするのです。ちょうど，乳幼児から見れば，母親の身体が写っているスライドと，超越的身体が写っているスライドを重ねて映したように現前するわけです。

その勢力圏は，乳幼児から母親がきちんと見える範囲に限定されています。

近くに母親がいれば，おとなしく遊んでいる子供も，母親が見えなくなると急に泣き出してしまいます。これは，子供が，母親の身体とオーバーラップしている超越的身体の勢力圏の外にいることに不安を覚えたためです。超越的身体の勢力圏にいれば，規範の声によって，事物や身体が，しかるべき意味をもって現前しています。しかし，勢力圏の外は，そのような意味がまったく定まっていない，闇の世界なのです。

また，生成された当初の超越的身体が発する規範の内容は，特殊的です。白くておいしい事物は，慣れ親しんだ特定の哺乳便に入った「白くておいしい事物」ですし，決してさわってはいけない事物も，居間のソファーの横においてある特定の「決してさわってはいけない事物」です。

母子の身体は，毎日の濃密な互換を通じて，いくつもの超越的身体を生成していきます。そして，一つ一つの超越的身体が，異なる規範の声を発します。このようにして生成される数多くの超越的身体のほとんどは，母親の身体とオーバーラップします。母親の身体は，生成される数多くの超越的身体とオーバーラップするがゆえに，乳幼児にとって，格別の身体になるわけです。

生後８ヶ月くらいの赤ちゃんが示す人見知りは，母親とオーバーラップする超越的身体が生成されたために起こる現象です。この頃，赤ちゃんは，母親や，常に母親の近くにいる人（家族など）以外の人をおびえるようになります。これは，母親とオーバーラップする超越的身体の小さな勢力圏の外に連れ去られることに対する，恐怖の現われです。

いつでも，どこでも

数多く生成される超越的身体の中のいくつかは，次第に，強力になっていきます。それは，食，排泄，安全など，乳幼児にとってきわめて基本的な行動に関して，規範の声を発する超越的身体です。例えば，スプーンは食べるべからず，排泄物は汚いものである，とがったものは危険である，といった「である規範」や「べし規範」の声を発する超越的身体です。その理由は，食，排泄，安全などをめぐっては，母子の間で，日々，とりわけ濃密な互換が生じるからです。

超越的身体が強力になるとは，超越的身体の勢力圏が広まり，規範の内容が

一般的になり，超越的身体が現前しなくなることでした。つまり，いくつかの基本的な行動については，超越的身体の勢力圏が広くなります。つまり，母親が周りにいなくても，いつでも，どこでも，規範の声が聞こえてくるようになるわけです。また，規範の内容が一般的になり，特定の事物や身体に限定されず，いつ，どこで，出くわす事物や身体にでも当てはまるようになっていきます。同時に，超越的身体は，母親という現前する身体にオーバーラップしなくなります。

こうなると，乳幼児の身体は，基本的な行動についてだけではありますが，いつでも，どこでも，超越的身体の勢力圏にあることになります。言葉をかえれば，いつでも，どこでも，超越的身体に見守られ，その規範の声を聞くことになります。どうでしょうか。いつでも，どこでも，超越的身体に見守られているということは，乳幼児が，常に，胸ポケットの中に超越的身体を入れて歩いているのと同じではないでしょうか。胸ポケットから胸の中までは，わずか数センチ。事実上，胸の中と同じです。胸の中の超越的身体，それこそ，心です。

これが，人生における心のルーツです。つまり，心の現前は，いつでも，どこでも，見守っている強力な超越的身体の勢力圏に入ったことの「効果」なのです。連続的に点滅するネオンサインで，文字や図柄に見えるのがあります。しかし，実際に，文字や図柄が存在しているわけではありません。存在するのは，連続的に点滅するライトだけです。文字や図柄は，連続的に点滅するライトの「効果」にすぎません。これと同じです。心の現前は，強力な超越的身体の勢力圏にあることの「効果」にすぎないのです。

こうして，強力になった超越的身体の効果として現前するようになった「心を内蔵した肉体」という観念は，その後の毎日の生活の中で，さらに定着していきます。例えば，ある幼児が，自分よりも年下の子に乱暴して，その子を泣かせてしまったとします。そんなとき，近くにいた母親は，「そんな乱暴したら，ダメ！」としかるでしょう。しかられた幼児は，その後，年下の子に乱暴なことをしなくなるかもしれません。しかし，その幼児は，もっと多くのことを学びます。それは，母親の「そんな乱暴したら，ダメ！」という発言の根底にある前提です。その前提を，あえて書き出せば次のようになります――「お

まえの体の中に心があるように，その子の体に中にも，心があるんだよ。そして，おまえが乱暴なことをするから，その子の心に悲しみが宿ったのです。その心の悲しみが原因で，泣いているでしょう。もう，小さな子の体の中の心に，悲しみが宿るような乱暴をしたらダメですよ」。同じことは，砂場で遊んでいた子が，年下の子におもちゃをかしてあげたときの，ほめ言葉についても言えます。ただ，上の例の乱暴が親切に，悲しみが喜びに，涙が微笑みに置き換わるだけの話です。このような経験を重ねて，私たちは，いつしか，「心を内蔵した肉体」という「個人」観に染まっていくわけです。

以上で，乳幼児のケースを終わります。ここで登場した超越的身体は，かなり強力ではありますが，その規範の声は，乳幼児にとって基本的な行動を指示する声に限定されています。つまり，基本的な行動に関してのみ，「いつでも，どこでも」見守っている超越的身体でした。「どんなことについても」見守っているのではないことに注意してください。次は，いつでも，どこでも，どんなことについても，見守っている超越的身体の話に移ります。それが，近代社会のケースです。

4．近代における心のルーツ

超強力な超越的身体

基本的な行動に関してのみ，いつでも，どこでも見守る超越的身体は，乳幼児期の母子関係の中で生成されます。一方，いつでも，どこでも，どんなことについても見守る超越的身体は，世紀で数える長い時間をかけて，社会的な規模で生成されました。

いつでも，どこでも，どんなことについても見守る超越的身体は，超強力な超越的身体です。では，超強力な超越的身体は，どのようにして生成されたのでしょうか。次に，3つの段階に分けて説明します。

まず，第1の段階として，勢力圏の小さな超越的身体が，そこここに生成される必要があります。勢力圏が小さいとは言っても，一つの共同体に住む人々を含むくらいの勢力圏です。また，一つ一つの超越的身体は，勢力圏は小さく

ても，簡単には消滅しない程度には強力になっている必要があります。その超越的身体は，共同体に住む人々が共同生活を送る上で必須の規範の声を発する超越的身体です。

次に，第2の段階として，ある共同体の超越的身体が，別の共同体の超越的身体を併合するという動きが生じます。Aという超越的身体が，Bという超越的身体を併合するとは，Bの規範の内容が，Aの規範の内容の一部として，無理なく包摂されてしまうことです。例えば，自分たちの祖先はaである，という規範（である規範）を与える超越的身体Aと，自分たちの祖先はbである，という規範を与える超越的身体Bが生成されていたとします。ここで，もし，2つの規範が，Aの勢力圏にある身体の祖先aには，数人の孫がおり，その孫の一人bが，Bの勢力圏にある身体の祖先であるというように，一つの規範に統合されたとします。Aが，自らの勢力圏に加えて，Bの勢力圏にある身体に対しても，このような規範の声を発するようになったとき，AがBを併合したことになります。

このような超越的身体の併合が，次から次へと生じることによって，多くの規範が統合されていきます。そして，多くの超越的身体が併合され，多くの規範が統合されたとき，多くの共同体の人々に対して（統合された）規範の声を発する超越的身体が生成されます。その超越的身体は，併合された超越的身体たちの勢力圏の全体を勢力圏とする，さらに強力な超越的身体です。すでに述べましたように，さらに強力になるということは，規範の内容がより一般的になる（より多くの人々に当てはまるようになる）ということ，さらには，超越的身体が，より現前しない（見えない）超越的身体になるということです。

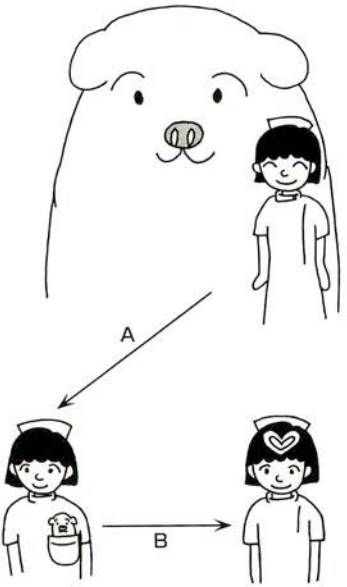
最後に，第3の段階は，強力になった超越的身体が，さらに強力になっていく段階です。すでに，第2段階までで，超越的身体の勢力圏は，多くの勢力圏を統合して，かなり大きなものになっています。この大きくなった勢力圏が，さらに大きくなるのは，やはり，身体の互換を通してです。つまり，勢力圏の内部にある身体と，勢力圏の外部にある身体が互換をし，その互換を通じて，外部にあった身体をも内部に取り込んで勢力圏が拡大するのです。こうして，超越的身体はより強力になっていきます。勢力圏はより広く，規範の内容はより一般的になり，同時に，超越的身体は，文字どおり，現前しない（見えな

い）超越的身体に近づいていきます。

以上，超強力な超越的身体が生成されるプロセスを説明しました。もちろん，現実には，もう少し複雑な経路をたどる場合もあるでしょう。例えば，一応，第1段階から第2段階を経て第3段階に至り，その上で，大規模な第2段階が生じ，その上で，再び，第3段階に入るといった経路もあるでしょう。しかし，いずれにせよ，第1，第2段階を経て，第3段階が進行するにつれて，現前せず，広大な勢力圏をもち，非常に一般的な規範を与える超強力な超越的身体が生成されていきます。

超強力な超越的身体の効果

このように超強力な超越的身体は，勢力圏にある身体が，いつどこにいようが，また，何をしていようが，規範の声を発してきます。したがって，前の乳幼児のケースと同様，超越的身体を胸ポケットの中に入れて歩いているのと同じ「効果」をもたらします。しかし，乳幼児のケースで登場した超越的身体は，基本的な行動に関してのみ，いつでも，どこでも，規範の声を発する超越的身体でした。それに対して，今回登場した超越的身体は，いつでも，どこでも，そして，どんなことについてでも，規範の声を発してきます。したがって，いつであろうと，どこであろうと，何をしていようと，超越的身体を胸ポケットに入れているのと同じ効果をもたらします。胸ポケットと胸の中は事実上同じですから，胸の中に心があって，その心で，いつでも，どこでも，何についても判断しているかのような「効果」をもたらします。



A―いつでも，どこでも，何をしていても見守っているトトロ（超越的身体）は，胸ポケットのトトロと同じ
B―胸ポケットにいるかのようなトトロの効果が「肉体に内蔵された心」

今回登場した超越的身体は，なにしろ超

強力ですから，その効果も絶大です。その効果たるや，もはや，肉体の中に心があることに何の疑問も感じない，素直にそう確信してしまう，そんな効果をもたらします。「肉体に内蔵された心（あるいは，頭）」の中で，認識したり，思考したり，判断したりするのだ，という実感を与えてくれます。頭でよく考える，自分の良心が許さない，といった表現も，ごくごく自然なものになってしまいます。

しかし，地球上のすべての人が，そうではありません。上に述べたよう超強力な超越的身体の勢力圏に入っていない人にとっては，「肉体の中に内蔵された心」で考えたり，感じたりするという感覚は希薄です。もちろん，全人類に比して，そのような人は少数ですが，確実に存在しています。前に，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識は，「外界と内界を区別する」常識と表裏一体であること，外界と内界を区別した上で外界を徹底的に解明していくのが自然科学であることを述べました。ということは，地球上で，「肉体に内蔵された心」という常識が浸透している地域は，自然科学が浸透し，科学技術として応用されている地域と，ほぼ一致しているはずです。現在では，地球上のほとんどの地域に自然科学，科学技術が浸透しています。しかし，自然科学や科学技術が，比較的，浸透していない地域が残されていのも事実です。そのような地域に住む人々に，「肉体に内蔵された心」という常識が，私たちほど浸透していないとしても，不思議ではありません。

「かや」（集合性）という言葉を用いるならば，「心を内蔵した肉体」という「個人」観は，一つの「かや」なのです。ただし，その「かや」は，非常に多くの人々を包んでいます。おそらく，その数は，国の違いを越えて，何十億人にも達するでしょう。そして，私たちも，人生のかなり早期に，その「かや」に包まれる一人になっているのです。しかし，地球上のすべての人々が，そのような「個人」観の「かや」に包まれているとは言えません。また，時代をさかのぼれば，そのような「かや」は，少なくとも，現在のようには堅固な「かや」ではありませんでした。歴史的に，そのような「かや」が浸透し，定着したのは，「近代」という時代の特徴です。

主体性の現前

覚えていますか？　初めて，次のセリフに出会ったときに感じた反発を。

> 「かや」が世界を現前させる。――私たちが，何かを認識するとき，実は，「かや」に認識させられている；私たちが，何かを欲しい，何かをしたいと感じるとき，実は，「かや」の欲望に突き動かされている；私たちが，何かを行動に移すとき，実は，「かや」の行動の一部を演じている。このように，あえて，認識や欲望や行動の「主体」という言葉を使うならば，決して，心を内蔵した個人が主体ではありません。「かや」こそ，主体です（第3章46頁）。

このセリフを，初めて聞いたとき，次のような反発を感じたのではないでしょうか――「いくらなんでも，それは言い過ぎだ。もし，そうだとしたら，皆，自分が属している集団や，周りの人々に流されているだけ，ということになるじゃないか。もちろん，人間，周りに流される場合もあるけれど，周りの動きとは別に，自分独自で考え，判断する場合もある。それに，集合体なんかとは無関係に，自分一人で，もの思いにふけったり，考えこんだり，何かをしたくなったりすることもあるじゃないか」と。

このような反発は，言いかえれば，人間の主体性――主体的な判断――は，どこにいったのだ，という反発です。実際，私たちは，主体的に判断した経験をもっていますし，主体的に判断することが重要である場合があることも経験しています。

第3章では，このような「主体的な判断」というのは，自分や他者のふるまいが現前するときの，現前の仕方の一つであることを述べました。自分や他者のふるまいは，「強制されたふるまい」，「まったく偶然のふるまい」，「不注意によるふるまい」など，さまざまに現前します。「主体的な判断によるふるまい」は，そのような現前の仕方の一つです。そうであれば，「わたしたちに，さまざまなものが現前するのは，ひとえに，集合体のなせるわざである」という人間科学の前提は，「主体的な判断」にも当てはまるはずです。

では，どのような集合性（かや）に包まれれば，主体性が現前するのでしょうか。第3章では，この問いに答えるのを先送りにしました。しかし，本章まで，グループ・ダイナミックスを勉強した今，この問いに答える準備ができま

した。

話を具体的にしましょう。病棟の申し送りに，常々，疑問を感じていたKさんが，ある日，意を決して，申し送りの廃止を提案したとします。Kさんは，文字どおり，主体的に，申し送りの廃止を提案したわけです。

この場合，第1に，Kさんは，現在の病棟の「かや」に包まれています。病棟の他の看護婦とともに，日々，申し送りという集合的行動を行なっています。申し送りは，病棟（という集合体）の制度（という「もの的環境」）になっており，「申し送り」という言葉（という「もの的環境」）も定着しています。そんな病棟の「かや」に，Kさんは包まれています。

第2に，Kさんは，以前，申し送りのない職場で働いた経験を持っているのかもしれません。もし，そうだとしたら，Kさんは，以前の職場の「かや」に，今でも包まれています。あるいは，Kさんは，申し送り以外に効率的な伝達方法があることを，だれかから聞いたのかもしれませんし，本で読んだのかもしれません。もし，そうだとしたら，Kさんは，申し送り以外の伝達方法を教えてくれた人，あるいは，本を書いた著者と同じ「かや」に包まれています。以上，Kさんが以前働いていた職場の「かや」，申し送り以外の伝達方法を教えてくれた人とKさんの「かや」，本を書いた著者とKさんの「かや」は，いずれも，申し送りの廃止とそれに代わる伝達方法の採用を特徴とする「かや」ですから，「申し送りなしのかや」と呼ぶことにします。

第3に，Kさんは，本章で説明した「個人＝心を内蔵した肉体」という常識の「かや」にも包まれています。この「かや」に包まれている身体には，「肉体に内蔵された心」が現前します。しかも，その「肉体に内蔵された心」は，そこで判断や意思決定がなされる場所として現前します。

Kさんにとって，自らの行動が主体的な行動として現前するメカニズムを，以上の3つの「かや」を使って説明します。Kさんは，もちろん，現在の病棟の「かや」の内部者ですが，同時に，「申し送りなしのかや」にも包まれていますから，病棟の「かや」の外部者でもあります。第6章（100頁）で，自分を包んでいる「かや」がわかるには，「かや」の内部者であると同時に，「かや」の外部者でもあることが必要である，と述べました。申し送りに関する限り，Kさんは，この条件を満たしています。だから，自分も病棟の「かや」に

包まれながらも（申し送りをしながらも），病棟の申し送りの「かや」について，疑問を感じることができたのです。

さらに，Kさんは，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識の「かや」にも包まれています。そのために，毎日の申し送りが，「問題にすべきもの」という意味をもって現前したときに，ごく自然に，その現前は，「自分の肉体に内蔵された心」のなせるわざと思えたわけです。こうして，Kさんは，ごく自然に，申し送り廃止の提案は，自分の主体的判断によるものとの感覚をもつことになります。

第5章で，「かや」の2面の一つ，コミュニケーション（規範や雰囲気の形成プロセス）について説明したとき，規範や雰囲気が，超越的身体の声であることを述べました。ここで，Kさんが包まれている，3つの「かや」の超越的身体の声を聞いてみましょう。まず，現在の病棟集合体の超越的身体は，「申し送りを行なうべし」という規範の声を発してきます。同時に，「申し送りなしのかや」の超越的身体の声，「申し送りに代わる伝達方法をとるべし」も聞こえてきます。おそらく，Kさんには，前者の声よりも，後者の声の方が大きく聞こえたのでしょう。さらに，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識を与える超越的身体からは，「自分が何かを試みるのは，自分の心で，そう決めたからだ」という声が聞こえてきます。これら3つの声，いわば，超越的身体の三重唱によって，Kさんは動かされていったと言えるでしょう。

心の豊かさは「かや」の豊かさ

第3章で述べた「天動説と地動説のたとえ」を思い出して下さい（49頁）。私たちは，天動説にずっぽりつかって，夜空の星を見ています。天動説は，私たちがずっぽりつかっている常識，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識に相当します。それに対して，地動説は，「かやこそ主体」というグループ・ダイナミックスの前提に相当します。

地面が動いている（地動説）などと考えた日には，おちおち，日の出の美しさにうっとりすることもできません。やはり，太陽が昇ってくる（天動説）のでなければ話になりません。「個人＝心を内蔵した肉体」という常識も同じです。この常識とともに日常生活を送ること自体，まちがっているわけでもなん

でもありません。いや，むしろ，望ましいことでもあります。他人にひどいことをしてしまったときに，「（あの人の肉体に内蔵された）心を傷つけてしまった」と反省できるのは，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識をもっているおかげです。

しかし，いくら日常生活は天動説でよいとしても，天文学者までもが，天動説オンリーでは困ります。天文学者は，天動説もわかると同時に，地動説にも精通している必要があります。すなわち，天文学者は，地動説に基づいて，星の動きを予測できなければなりません。その上で，さらに，予測結果を，一般の人にもわかるように，天動説の言葉で伝えることも必要です。

看護職は，自然科学のみならず，人間科学の専門家でもあることが求められています。人間科学は，「かやこそ主体」を前提にします。それに対して，一般の人々は，圧倒的に，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識を前提にしています。看護職は，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識に立って語られ，問題にされている現象を，「かやこそ主体」という人間科学の前提に立って，考察してみなければなりません。その上で，さらに，考察した結果を，再び，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識に戻って，表現しなおすことも必要です。

くれぐれも注意して下さい。「心」，「主体性」という言葉を使うな，などと言っているのではありません。重要なことは，「心」，「主体性」という言葉で語られている現象を，人間科学の立場（「かや」こそ主体，という立場）から考察してみることです。本書は，まさに，そのための手引きです。

今，心の重要性が叫ばれています。物質的な貧困が克服され，物質的には，かなり豊かな時代になりました。それとともに，もはや物質的に何をつくっても解決できない，心の問題がクローズアップされてきました。この心をクローズアップする動きに異論を唱える気など，毛頭ありません。その動きには，大賛成です。

しかし，心の重要性を，人間科学の立場から考察してみることを忘れてはいけません。本章で述べましたように，「肉体に内蔵された心」という観念は，強力な超越的身体が生成されたことの効果です。つまり，心は，「かや」の効

果なのです。そうであれば，「かや」の重要性を唱えることは，心の重要性を唱えることにつながるはずです。やさしい心は，互いを思いあう人間関係（の「かや」）から生まれ，きびしい心は，鍛えあう人間関係（の「かや」）から生まれます。心の豊かさが求められる現代は，「かや」の豊かさが求められる時代です。

旅の終わりに

旅をふりかえって

私たちの人間科学の旅も，いよいよ，終わりに近づきました。ここで，今までの旅をふりかえってみましょう。

私たちは，まず，自然科学と並ぶ，もう一つの科学――人間科学――が必要であることに気づきました。人間科学とは，研究対象（観察対象）と研究者（観察者）の間に一線など引くことはできないという前提，そして，研究対象と研究者の間には，共同的実践が展開され，その共同的実践の中から知識を紡ぎ出していくという立場に立つ科学でした。人間科学は，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識，「外界と内界を区別する」常識を前提にしません。そこで，旅立ちに先立って，これらの常識と訣別しました。

人間科学の旅と言っても，いろんなルートがあります。私たちは，グループ・ダイナミックスというルートを選びました。その理由は，患者と看護婦という集合体，同じ病棟の看護婦の集合体など，看護婦をとりまく，さまざまな集合体の動きを研究するのが，グループ・ダイナミックスだからです。人間関係の問題，組織の問題などは，すべて，グループ・ダイナミックスが研究対象にする問題です。

グループ・ダイナミックスは，「かや（集合性）」の動きを研究する人間科学です。旅に出てまもなく，「私たちに，さまざまなものが現前するのは，ひとえに，「かや」のなせるわざ」というショッキングな主張に出会いました。それまでは，何かが見えるのは，それが外界に実在しており，それを内界にとらえるからだ，と思いこんでいました。つまり，個人こそ，認識や行為の主体だ

と信じて疑いませんでした。しかし，私たちは，「かや」こそ，世界を現前させる主体であることを知ったのです。

「かや」について，もっと知るために，私たちは，さらに旅を続けました。「かや」が，観察できる面（集合的行動）と観察できない面（コミュニケーション）という2つの面をもっていることがわかりました。現実の「かや」は，多層的に存在していること，多くの「かや」が，重なりながら，ずれながら存在していることもみてきました。自分を包んでいる「かや」はわからない，しかし，自分とは異なる「かや」に包まれている身体（異質性）と「かや」をつくることによって，自分を包んでいる「かや」が見えてくる，そして，自分の「かや」が変化するきっかけにもなる，そんなことも学びました。

旅の最後に，旅立ちに当たって訣別した常識，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識も，一つの「かや」であることを知りました。また，どのようなメカニズムで，「個人＝心を内蔵した肉体」という常識の「かや」ができてきたのかも理解することができました。

旅で出会った異質性

旅は，未知なる世界，異質な世界との出会いです。私たちの旅も，そうでした。今までは，「個人（＝心を内蔵した肉体）こそ主体」と信じてきました。でも，今回の旅を通じて，「かやこそ主体」と主張するグループ・ダイナミックスに出会いました。言いかえれば，「かやこそ主体」と主張するグループ・ダイナミックスの「かや」，この異質性に出会ったのです。

異質性との出会いは，自分がいかなる「かや」に包まれていたのかを気づかせてくれます。私たちも，グループ・ダイナミックスという異質性に出会うことによって，今まで，「個人こそ主体」という「かや」に包まれていたことに気づきました。今や，「個人こそ主体」の「かや」が，どのようにして形成されてきたのかを説明することもできます。

また，異質性との出会いは，自分の「かや」を変えていくきっかけも与えてくれます。では，グループ・ダイナミックスという異質性との出会いによって，「個人こそ主体」の「かや」は変化するでしょうか。「個人こそ主体」という「かや」は，そう簡単には，変化したりしそうにありません。「個人こそ主体」

という「かや」は，近代に至る歴史の中で形成されてきた，巨大な「かや」です。おいそれと「かや」の外に出れるような，やわな「かや」ではありません。

しかし，「個人こそ主体」の「かや」に呪縛されすぎてしまうと，どうなるでしょうか。ここに，あなたの後輩がいるとします。あなたは，自分の私利私欲など忘れて，ひたすら後輩のためだけを思い，心からアドバイスをし，惜しみなく援助を続けたとします。もう，これ以上はできない。そのくらい後輩のために手を尽くしたとします。でも，すべて無駄，まさに，ぬかに釘，に終わったとします。そんなとき，あまりにも，「個人こそ主体」の「かや」に呪縛されていると，こんな決着のつけ方しかありません――ここまでやってもダメなのは，後輩の心（肉体に内蔵された心）が，腐っているからだ，と。こうして，後輩を切り捨てます。さらに，まじめな人は，こう考えます――後輩を変えることができなかった自分の心（肉体に内蔵された心）も，ダメだ，と。こうして，自分をも，崖っぷちに追いつめてしまいます。「個人こそ主体」という「かや」に呪縛されすぎると，こんな息苦しい状況をつくり出してしまいます。

でも，どうでしょうか。後輩に，あなたの努力を，余計なお世話として現前させているのは，後輩を包んでいる「かや」である，そして，あなたに，絶望的なまでに救いようのない後輩を現前させているのも，あなたを包んでいる「かや」である――こんなふうに考えると，ずいぶん，事態のとらえ方に幅が出てくるのではないでしょうか。後輩と自分に，もう１人加えて，３人の「かや」をつくってみる；後輩とその友人Ａの「かや」を，自分とＡの「かや」をつくることによって変化させ，それを通して，後輩と自分の「かや」を変えていく，等々，いろんな可能性が出てきます。少なくとも，「もう，やめた」とギブアップする瞬間を，少しは先の延ばせるのではないでしょうか。

「かやこそ主体」というグループ・ダイナミックスの主張が，「個人こそ主体」のかやに包まれているあなたにとって，異質性として役立てばと願います。もし，そうなれば，本書を書いた私たちの「かや」と，あなたを包む「かや」が，あなたという身体を介して，重複構造をつくることになります。それは，本書を書いた私たちとあなたによる共同的実践の始まりでもあります。仮に，あなたが本書について批判したとしても，私たちさえ，批判に耳を傾け，前向

きに思考していくならば，それもまた一つの共同的実践です。

人間科学の目的は，共同的実践です。今回の旅で出会った異質性がきっかけになり，執筆者と読者という2つの集合体の間に，新たなる共同的実践が生まれるとしたら，これにまさる喜びはありません。

参考文献

本書を執筆するに当たって，参考にした文献を，本書の流れにそって記します。これらの文献のほとんどは学術書ですので，一般の読者にとって，必ずしも読みやすいとは言えないでしょう。しかし，本書によって，予め，ある程度の理解を得ておけば，これらの文献にチャレンジすることも可能だと思います。

第1章 「看護職は二足のわらじ——自然科学と人間科学」

この章で紹介した人間科学の立場は，社会構成主義（社会構築主義）と呼ばれるものです。社会構成主義については，

・K. ガーゲン「もう一つの社会心理学：社会行動学の転換に向けて」（1998，ナカニシヤ出版）

をすすめます。

第2章 「大きなハードル——「個人＝心を内蔵した肉体」という常識」

この章は，基本的に，

・廣松　渉「存在と意味（第1巻・第2巻）」（1982・1993，岩波書店）に基づいて執筆しました。この本は，本書全体を通じての参考文献でもあります。ただし，この本は，少々とっつきにくい本です。そのような場合には，

・廣松　渉「世界の共同主観的存在構造」（1991，講談社学術文庫）

・廣松　渉「新哲学入門」（1988，岩波新書）

をすすめます。

第2節「常識への疑問」の（3）「分かり合えるということ」については，

・大澤真幸「心の社会性：機械の心・人間の心」（1987，「現代思想」15巻5号）

を参考にしました。

第3章・第4章・第5章（第1節・第2節）・第6章

これらの章は，次の文献をベースにして，大幅に肉付けをしました。

・杉万俊夫「A New Theoretical Perspective of Group Dynamics」(1997,「Progress in Asian Social Psychology (Volume 1)」, John Wiley)

第5章第3節「規範の形成プロセス」および第7章「「個人＝心を内蔵した肉体」という常識のルーツ」

これらの章は，

・大澤真幸「身体の比較社会学Ⅰ」(1990，勁草書房)

に基づいて執筆しました。この本は，規範の形成について体系的に理論化した，唯一の文献です。

本書で紹介した，人間科学としてのグループ・ダイナミックスの立場から行なったフィールド研究や実践研究には，次のようなものがあります。なお，「実験社会心理学研究」は，日本グループ・ダイナミックス学会の学会誌です。

・「阪神大震災とグループ・ダイナミックス」(1995,「実験社会心理学研究」35巻2号の特集)。

これをわかりやすくしたものとして，

・城・杉万・渥美・小花和（編)「心理学者がみた阪神大震災：心のケアとボランティア」(1996，ナカニシヤ出版）があります。

・「過疎地域の活性化：グループ・ダイナミックスと土木計画学の出会い」(「実験社会心理学研究」37巻2号の特集)。

これに関連するわかりやすい本として，

・日本・地域と科学の出会い館（編)「ひまわりシステムのまちづくり：進化する社会システム」(1997，はる書房)

があります。

・「地域医療とグループ・ダイナミックス」(1998,「実験社会心理学研究」38巻2号の特集)

索　　引

ア行

アソシエート・ナース　62
新しい知識を学ぶ　97
異質性　90,94,96-97,101-102,122
1次モードと2次モード　17
意味　36
インター・ローカル　21

カ行

「外界と内界を区別する」常識
　ii,27,38,72,116,121
カウンセリング　11,15
科学（サイエンス）　i,6
かや　iii
　——がわかる　98
　——こそ，主体　46,120,122
　——の多層的重複構造　92
　自分を包む——　100
環境　52-53,58-63,92
観察者と観察対象　1
気づかざる前提　17
規範　70
　「べし」——　70-72
　「である」——　70,72
　より一般的な——　108
共通の経験　82-83,86
共同的実践　iv,15
共同メッセージ　1,16,20
近代　113
グループ・ダイナミックス　ii,iii,37,40-41,43-44,49,53,92,104,117,121
経済予測　8,9,11,12,14
けんかする2人も集合体　43
現前　34-36,46-47,110,117,123
　——しない　108
行動科学　9
行動主義心理学　105
互換的身体　76-77,80,83-84,86
心の豊かさ・「かや」の豊かさ　119
心のルーツ　112-113
「個人イコール心を内蔵した肉体」という常識　ii,26,37,49,103-104,116,119,121-122
言葉　60-61
コミュニケーション
　39,50,52,68,74,76,92,96,100,119
　——の無縁圏　74
コンピューター　105-106

サ行

自然科学　i,ii,5,6,8,11-12,16,21-22,33,37,104,116,120-121
事物　34-36,42,53,58,111
自分を包む「かや」　100
集合性　iii,44,49,52,67,68
集合体　iii,40-42,52,58,69,92,124
　けんかする2人も——　43
集合的行動　39
　——の無縁圏　64
主体性　46-47,117
身体　34-36,42,53,58,78,89,111
　互換的——　76-77,80,86
　超越的——　76-77,80,86,107-110
制度　59,63
ソフトウエア　105-106

タ行

超越的身体　76-77,80,86,107-110,113
　——の声　86-89,119
　——の勢力圏　87
　——の併合　114
　超強力な——　113,115
　母親にオーバーラップする——　110
　胸ポケットの中の——　112
超強力な超越的身体　113,115
「である」規範　70,72
データ収集　16
天動説と地動説　48,119

当事者が知っているからこそ存在する事実　5
当事者が知ろうが知るまいが存在する事実　5
トトロ　77

ナ行

ナースキャップ　72
内部者　兼　外部者　98
二足のわらじの専門家　23
人間科学　i，ii，5，12，14-15，17，19，21-22，26，33，36-37，46-48，72，104，106，117，120-121，124
認知心理学　105

ハ行

ハードウエア　105-106
母親にオーバーラップする超越的身体　110
人見知り　111
物的環境　58
普遍的（ユニバーサルな）　16
プライマリー・ナーシング　62
プリセプター制度　59
雰囲気　69，75-76，88，95，100，119
「べし」規範　70-71

マ行

胸ポケットの中の超越的身体　112
目的と価値観　19
「もの」的環境　58

ヤ行

役割　59，63
予言の自己成就　9
より一般的な規範　108

ラ行

ローカル（局所的）　16，20

あとがき——「楽学舎」について

学ぶことは楽しい。楽しく学んでいこう。こんな思いを込めて，「楽学舎」という名前をつけました。

大阪府看護協会が，大阪府の委託を受けて実施している「実習指導者講習会」という講習会があります。看護学校の学生が病院実習に出かけたときに，病院側で指導に当たる看護婦（士）を養成する講習会です。この講習会では，約2ヵ月間，いわゆる看護学のみならず，看護学の隣接領域である人文科学や社会科学も学びます。隣接領域との出会いは，それまでの視野が狭かったことを改めて感じさせるとともに，隣接領域を学ぶことの楽しさをも教えてくれます。また，講習会の後半では，グループに分かれ，課題を定め，グループワークが行なわれます。そのディスカッションでは，経験や職場を異にするさまざま人の意見が行き交います。それらの意見との出会いは，思考の幅を広げてくれるとともに，互いに教え，教えられながら，ともに学びあっていく楽しさをも感じさせてくれます。

講習会が終わると，受講生は，再び，各自の勤務場所へと散っていきます。しかし，もっと隣接領域を学びたい，議論しあえる場がほしいと思う人は，決して少なくありませんでした。平成3年度から9年度にかけて，大阪府看護協会の担当者として講習会の運営に携わった，私たちの一人（野沢典子）は，そのような受講生の希望を感じとり，自主的な学習会を始めようと有志に働きかけました。こうして，実習指導者講習会の修了者が，自分たちで学んでいく場をつくろうと，平成7年度に発足した学習会が「楽学舎」です。会員数は，年によって変動がありますが，大体，160-200名。隔月で開かれる学習会には，50-60名が参加しています。現在は，実習指導者講習会の修了者に限らず，広く参加者を募っています。企画も運営も，すべて手づくり。忙しい仕事の合間をぬって，ボランティアの役員が中心になって行なっています。

学びたいテーマを一口で言えば，人間を理解したい，人間を見る眼を豊かに

したいということでしょう。看護職が患者という人間を相手にする以上，このテーマは，看護職にとっての永遠のテーマかもしれません。また，一人の社会人としても，このテーマを通じて，人間的な成長をしていける，生涯教育を継続していけると思います。

これまで楽学舎で取り組んできた学習内容は，次のとおりです。

1995・96年	新しい人間科学を求めて （本書の骨格部分，講師・杉万俊夫）
1997年	社会学「初めての看護理論」（講師・勝又正直）
1998年（前半）	哲学・現象学（講師・西　研）
1998年（後半）	医療社会学（講師・黒田浩一郎）
1999年	臨床心理学・システム理論（講師・長谷川啓三）

「かや」の理論との出会い

初めて聴いたときには，何となくわかったような，わからないような，でも，何かひっかかる。そんな印象でした。

何かひっかかったのは，おそらく，私たちが日頃悩んでいる人間関係（患者との関係，同僚との関係，医者との関係など）を，まっこうから，しかも，今まで知らなかった角度から見つめる理論だったからでしょう。今までも，人間関係論という講義や本がなかったわけではありません。しかし，それらの多くは，欧米からの翻訳ものでした。何かちがう，まとを射ていない。そうは思っても，他に代わるものはない。「かや」の理論には，そんなあきらめを払拭してくれそうな期待を感じました。

しかし，理解するのは大変でした。なにしろ，「かや」の理論は，私たちが常識として抱いていた人間像とは，およそ違う人間像からスタートする理論だったからです。人間には，内面の世界があり，その内面の世界で考えたり，感じたりする――これが，私たちの常識です。本書の言葉で言えば，「心を内蔵した肉体」という個人観（人間像）です。ところが，「かや」の理論は，この内面の世界を否定するところからスタートします。肉体に内蔵された心で考えたり，感じたりしているのではない。そもそも，考えたり，感じたりしているのは，「かや」である，というのが，「かや」の理論でした。

「かや」の理論は，確かに，とっつきにくいと思います。しかし，考えてみると，私たちは，あまりにも，「心を内蔵した肉体」という個人像にしばられすぎています。そのような個人像を，根底から問い直したことなどありません。患者のことを考えるときも，同僚看護婦のことを考えるときも，そのような個人像に立って考えています。「かや」の理論は，そんな日常の思考に対する強烈な刺激になりました。

最後に，「かや」の理論は，人間科学の理論です。人間科学という，共同的実践によってつくられる，共同的実践のための科学がある，という主張も新鮮でした。人間科学という立場に立つと，本を読むこと，議論すること，理論を使うことが，自然科学とはちがう意味合いをもってきます。本を読むことは，著者と語り合い，著者との共同的実践を開始すること。本で読んだことについて仲間と議論するのは，共同的実践の輪を広げていくこと。理論を使うことは，理論を発信した人たちとの共同的実践に入っていくこと。こんなふうに，意味合いが変わります。

だとしたら，楽学舎で語り合っていることは，隣接領域と参加者（看護婦）との共同的実践ではないでしょうか。それは，単に，知識を得るための講義，わからないところを教えあうための議論ではないはずです。実は，私たちが，楽学舎でやっていることは，さまざまな人間科学の共同的実践ではないのか。そもそも，有志が集まって，隣接科学を学びたいと思ったエネルギーは，そんな人間科学の共同的実践に参加したいという熱意ではなかったのか。そんな気持ちが脳裏をよぎります。

2000年3月

楽学舎を代表して
野沢典子
坂口久代
山本広美

看護のための人間科学を求めて

2000年3月20日　初版第1刷発行　定価はカヴァーに表示してあります

編　者　楽　学　舎
発行者　中西　健夫
発行所　株式会社ナカニシヤ出版
606-8316　京都市左京区吉田二本松町2番地
telephone　075-751-1211
facsimile　075-751-2665
郵便振替　01030-0-13128
URL　http://www.nakanishiya.co.jp/
e-mail　iihon-ippai@nakanishiya.co.jp

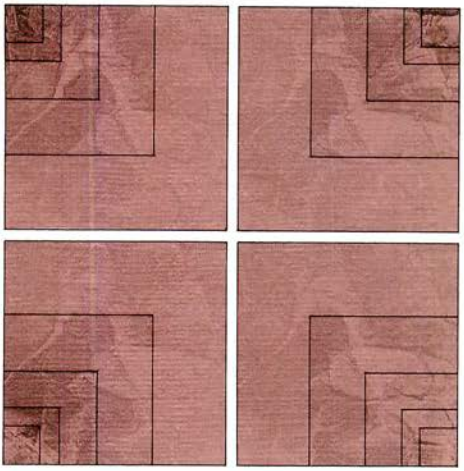
印刷・創栄図書印刷／製本・藤沢製本

Copyright © 2000 by Rakugakusha

Printed in Japan

ISBN 4-88848-560-7 C0011

看護のための
人間科学を求めて



9784888485609

1920011020004

ISBN4-88848-560-7

C0011 ¥2000E

定価（本体2,000円＋税）